

259.5

99



* 0044757000 *

0044757-000

259.5-99

文化中心新教授学大系

教育研究会

第10卷

昭和2

AHF

7.7.28

文 化 中 心 新 教 授 大 學 系

第 十 卷

石 澤

東京高等師範學校教授
東京帝國大學助教授
奈良女子高等師範教授

吉 磨 著

佐々木秀一
入澤宗壽
石澤吉磨

監 修

家 事 新 教 授 法

東 京 教 育 研 究 會 發 行



中文新教授學大系

發刊趣旨

教育教授は文化を媒介し、文化を學習して文化價值創造の力を養ふにある。各教科の教授はこの意味に於て文化を了解せしめ、文化力を造る見地から考へねばならぬ。各教科は文化財としてこれを見、兒童の發達段階に應じて文化力を造り得るやうに工夫されなければならない。

我が國に於て各教科の教授法に關する書は決して少しとしない。しかも上述の意味に於て新教授法を建設叙述せるものは果して他にありや否や。本大系を發刊する所以は、實にこの缺陷を救ふにある。

文化とは何ぞ。いふ迄もなく人間精神が自然を素材として造り出せるものである。

修身道德と、國語國文學と、算術數學と皆是れ人間が創造せる精神的財産であり、理科、家事、唱歌、體操またこれ人間が自然と素質とを根底として造り出せる文化活動の方法であり技能である。歴史地理はこの文化發展の跡を辿り文化活動の環境を明にせんとするもの、この意味に於て各教科は生きた人間活動の目的と方法とを示すものであり、かゝる意義を了解して始めて兒童の文化力を造ることが出来る。國民文化を媒介し、國民文化力を造る事を任とする國民教育者は、この點に目ざめ、この點に熱愛を傾注すべきであり、本大系はその途を示し、その力とならんとするものである。一言、本大系の所期するところを述べて序とする所以である。

昭和二年八月

監修者

佐々木秀一
入澤宗壽
石澤吉磨

序

教育は即ち生活である、而かも將來の生活準備では無く現在の生活完成である。時々刻々の現在生活をして意義あらしめ、之を完成しつつ連続的に發展し行く所に、教育即ち生活の眞意義があり、それが又期せずして次期生活の準備とも成るであらう。斯くの如くにして、茲に人類生命の進化とも成り、人類文化の促進とも成るでは無からうか。

家事教育は家庭生活其の物であり、家庭生活は吾人に最も近き所のものにして、人類生命の第一表現であると同時に、人類文化の第一表徴である。蓋吾人の内部には先驗的自我なるものがあつて、吾人一切の生活行動は、この自我の發露に外ならぬと見做すことが出来る。若し吾人の行動を自我發露の基礎の上に置いて考察するならば、衣食住の家事的生活も亦生命進化の自我自由表現であり、文化促進の自我自由表徴であらねば成らぬ。而して其の表現の第一歩と表徴の第一階梯とは、吾人に最も近き家庭生活其の物に於てである。

吾人は此の見解の下に、自己の生活を完成する上に一定の物質を要する、かの物質の缺乏

序

は生活の完成を妨ぐると同様に、其の過剰も亦生活の煩累を招ぐものである。故に物質は自我の自由生活上絶対の價值あるものでは無く、之をして價值あらしむるものは自我であると見做すことは出来る。

家事は、家庭に於ける自我的生活の完成及び完成の保證上必要なる物質の價值の利用と、之に伴ふ必然の作用とを取扱ふものである。換言すれば、文化的なる自我自由表現の家庭生活は、一定の節制の下に物質を消費しつつ、吾人の刻々の生活を完成せんとするものである、この要求を達する爲めに、家事教授は如何なる教材を如何に學習せしむべきであらうか。

吾人はこの問題に遭遇して、過去幾年其の頭腦なやまし、種々の工夫と幾多の經驗とを重ねたものの、教育の思潮は新たに其れから其れへと限りも無く流れ行きて、未だ混沌たるの境を脱し得ざるの觀がある。而かも文化中心の家事新教授法は、叙上の姿に於て物質の價值を眺め、學ぶものの現在生活中より其の教材を見出し、自我の自由活动に訴へて學習せしめ、以て獨自成長の生活を造ることにあるであらう。この所信の下に本書を公にし、斯科教

授者の研究の資に供すると共に、斯道先覺者の示教を待たんとするのである。

大正十一年十一月

於奈良 著 者 誌

は生活の完成を妨ぐると同様に、其の過剰も亦生活の煩累を招ぐものである。故に物質は自我の自由生活上絶対の価値あるものでは無く、之をして価値あらしむるものは自我であると見做すことは出来る。

家事は、家庭に於ける自我的生活の完成及び完成の保證上必要なる物質の価値の利用と、之に伴ふ必然的作用とを取扱ふものである。換言すれば、文化的なる自我自由表現の家庭生活は、一定の節制の下に物質を消費しつつ、吾人の刻々の生活を完成せんとするものである。この要求を達する爲めに、家事教授は如何なる教材を如何に學習せしむべきであらうか。

吾人はこの問題に遭遇して、過去幾年其の頭腦なやまし、種々の工夫と幾多の經驗とを重ねたものの、教育の思潮は新らたに其れから其れへと限りも無く流れ行きて、未だ混沌たるの境を脱し得ざるの觀がある。而かも文化中心の家事新教授法は、叙上の姿に於て物質の価値を眺め、學ぶものの現在生活中より其の教材を見出し、自我の自由活动に訴へて學習せしめ、以て獨自成長の生活を造ることにあるであらう。この所信の下に本書を公にし、斯科教

授者の研究の資に供すると共に、斯道先覺者の示教を待たんとするのである。

大正十一年十一月

於奈良 著 者 誌

文化中心 家事新教授法

目次

第一章 文化生活觀と家事教授……………一

第一節 文化生活の倫理的考察……………一

文化生活と人格價値の實現—人格と物質との區別—人格と自我との關係—人格は個體なり—人格と性格とは異なる—人格主義的文化生活觀。

第二節 文化生活より見たる人格主義と物質主義……………六

人格主義と物質主義との交渉—人格主義より見たる物質の價値—目的と條件との區別—人格主義表現の二様の態度—人格主義生活に對する家事の位置。

第二章 婦人に對する近世の社會的要求……………二

目次

第一節 婦人に對する早期時代の要求……………二二
 家庭に於ける婦人の生活—社會に於ける婦人の生活—女性としての女子教育。
 第二節 婦人に對する社會的要求……………二五
 家庭活動の變化—婦人の活動範圍の社會的擴張—社會化せる近世的家庭。
 第三節 婦人に對する現代的要求……………三三
 主婦としての要求—公人としての要求—收入者としての要求。

第三章 社會的要求に對する家事科の發達……………二九

第一節 過去に於ける學校の家事……………二九
 早期に於ける學校の家事—家事の發達に對する自然科學者の貢獻—家事の發達に貢獻せる高等教育—家事の發達を助長せる他の施設。
 第二節 現時に於ける學校の家事……………三七
 小學校に於ける家事—女學校に於ける家事—職業教育の學校に於ける家事。

第三節 將來に於ける學校の家事……………六〇
 現代の要求が將來に及ぼす影響—物質消費者としての主婦の教育—金錢收入者としての主婦の教育。

第四章 家事教授要旨の教育的考察……………七七

第一節 家事の對象……………七七
 家事の定義—家庭生活の意義—家事の對象—家事科の範圍—家事と家事科。
 第二節 家事教授の効果……………七九
 効果の二方面—實質陶冶主義—形式陶冶主義—兩主義の調和。
 第三節 家事教授の要旨……………一〇八
 教則に示されたる要旨—要旨の解釋—知的方面—技術的方面—能力的方面—要旨の歸結。

第五章 家事教材の選擇と排列……………一〇三

目次

第一節 教材選擇の基礎的要件……………一〇三

教材選擇の必要—生活の必須上より—理解の適合上より—興味の喚起上より—地方の要求上より—現代の要求上より—教授時間の制限上より。

第二節 選擇されたる家事教材の實際……………一〇九

高等小學校に於ける家事教材—高等女學校に於ける家事教材—家事教材内容の斟酌。

第三節 教材排列の基礎的要件……………一一三

教材排列に關する要件の三方面—心理的要件—論理的要件—對他的要件。

第四節 排列されたる家事教材の實際……………一二六

教材排列の二様式—高等小學校家事教材の排列—高等女學校家事教材の排列。

第六章 家事教材の學術的研究……………一二四

第一節 家事教材の自然科學的研究……………一二四

自然科學研究法の本領—理論的方面的研究—實驗的方面的研究—實習的方面的研究—

産業的方面的研究。

第二節 生活改善資料の研究……………一二五

改善資料研究の必要—住居の改善資料—衣服の改善資料—食物の改善資料—一家管理の改善資料。

第三節 家事教材主眼點の研究……………一二六

主眼點把握の必要—教材の種類と主眼點の相違—住居の一例—衣服の一例—食物の一例—主眼點の把握と教材に關する知識。

第七章 家事科と他教科との關係……………一三二

第一節 家事科と理科との關係……………一三二

理科の本領—基礎的知識と應用的知識—歸納的態度と應用的態度。

第二節 家事科と數學科との關係……………一三六

家事の經濟的基調—經濟術と數學—自家主上主義の經濟と社會的經濟。

目次

第三節 家事科と修身科との関係 二九二

家事の二方面—精神的奉仕と修身—物質的奉仕と修身—子女の教養—家人の修養。

第四節 家事科とその他の教科との関係 二九六

一家對市町村自治體關係—一家對國家關係—一家對世界關係。

第八章 家事科學習の根本的態度 三〇一

第一節 學習の基礎的考察 三〇一

學習の意義—學習の四作用—學習の態度—學習の動機—學習の法式—學習の順序。

第二節 訓練すべき科學的態度 三〇二

種々の教育主義と教授上に於ける適用—科學主義の特徴—經驗と觀察—觀察と實驗—
考察と法則の歸納—法則の演繹—發見と發明—科學研究の二大特色—家事の科學的訓
練、

第三節 訓練すべき創造的態度 三〇三

創造と科學—創造と事業—創造と文化—創造と家事—創造と教育。

第九章 家事學習上に於ける考察の價值 三〇五

第一節 考察の科學的訓練 三〇五

學習上に於ける考察の意義—學習上に於ける考察の位置—考察の學習訓練。

第二節 考察の法式 三〇八

學習上に於ける考察の要件—學習上に於ける考察の法式。

第三節 考察の適用 三〇九

學習上に於ける考察指導の形式—考察内容と指導形式。

第十章 家事學習上に於ける實驗の價值 三四五

第一節 實驗と考察の關係 三四五

發見的實驗と證明的實驗—學習上に於ける實驗の位置—學習上に於ける實驗の本義—

目次



實驗に關する誤解。

第二節 實驗の法式 二四九

場所上よりの法式—主體上よりの法式—過程上よりの法式—内容上よりの法式—程度上よりの法式—實驗の要件。

第三節 實驗法式の適用 二五五

實驗事項の選擇—實驗材料の選擇—實驗に對する兒童の態度—實驗法式の調和。

第十一章 家事教授上に於ける實習の價值 二六〇

第一節 實習の性質 二六〇

學習と實驗との區別—實習の本義—實習と實務—實習技術の練習—技術の客觀化—實習と學習完成—教授時間割。

第二節 實習の法式 二六五

場所上よりの法式—主體上よりの法式—適用上よりの法式—程度上よりの法式—實習

の要件。

第三節 實習法式の適用 二六七

實習事項の選擇—實習材料の選擇—實用主義より來る誤解—指導學習上の實習—自由學習上の實習—見學上の實習—實習法式の調和。

第十二章 家事教授の形式的段階 二七六

第一節 普通教授 二七六

豫備—提示—整理。

第二節 實習教授 二八二

豫備—提示—整理。

第三節 家事教授案の實例 二八九

普通教授の實例—實習教授案の例—指導案—實習案。

第十三章 家事教科書の性質及び選定 三〇〇

目次

第一節 家事教科書の性質……………三〇〇
 教科論上より見たる教科書—方便論上より見たる教科書—教科書の不備。

第二節 家事教科書の具備すべき要件……………三〇二
 要件の概観—豫習上より見たる要件—本習上より見たる要件—復習上より見たる要件
 —家事教科書の改良—現行家事教科書の使用法。

第三節 家事教科書の選定……………三〇四
 主要條件—參考條件。

第十四章 家事教室の設備及び解放……………三二七

第一節 家事教室の設備……………三二七
 設備の必要—普通教室—實習教室—教具標本室—研究準備室。

第二節 家事教室の解放……………三三一
 解放の必要—普通教室—實習教室—教具標本室。

目次終

文化
中心 家事新教授法

石澤吉鷹 著



第一章 文化生活觀と家事教授

第一節 文化生活の倫理的考察

文化生活と人格價値の實現 二十世紀に於ける物質文明の劇甚なる競争に疲勞し困惑
 したる世界人類は、有らゆる方面より其の生活を改造せんとして努力し且之を實現しつゝ、あ
 るのである。此の一種思潮の流域内には種々の支流は分派しては居るが、其の全潮流を支配
 するものは、物的文明より心的文明へと推移せんとするもので、詳言すれば、各個人の生活
 價値を向上伸展せんとする文化生活の要求であると云ふことが出来る。

然らば即ち文化生活の眞義は何であるか、之に對して二様の見解がある、其の一は狹義の

第一章 文化生活の倫理的考察

ものであつて、自然科学や應用科學の發達に伴ふて飾られた燦然たる光彩の生活其の物を意味し、他の一は廣義のものであつて、吾人の持つて生れた先驗的可能性を遺憾なく發展せしめ、其の人格價値を實現せしめたる生活を意味する。即ち前者は對外的であり常識的物質的であるが、後者は對内的であり學術的倫理的である。

茲に人格價値と稱するものは何であるか、今其の内容を明らかにせんが爲めに、先づ人格の概念を明らかにせなければ成らぬ、此の目的の爲めに次に述ぶる人格の四要素を吟味することを要する。

人格と物質との區別

第一に人格は物質と區別せらるゝ所に特有の意義を持つて居る。靈精神と物質とは異なる存在であるか、或は同一存在の兩面に過ぎざるものであるか、又其の何れか一方は根本的存在であつて他方は其の派生的存在に過ぎざるものであるか、是等存在に關する問題は、哲學的には如何に解釋せられ居るにもせよ、兎に角精神と物質とは互に區別して考察せらるゝ限りは、是等兩者は異なる意味を有するもので無ければ成らぬ。

吾人の知る所にては、精神は感覺し思考し意志する主體なるに對して、物質は感覺され思

考され意志さるゝ對象である。従て吾人は智者であり思想家であり努力家であり得るが、書籍であり机であり肉體であり得ることは出来ぬ。即ち吾人は或物を持つては居るが、此の持物を吾人の精神的屬性と區別する所に人格概念の第一要素は存在するのである、故に人格生活と物質生活とは明らかに區別されなければ成らぬ。

人格と自我との關係

第二に人格は個々の意識的經驗の總和には非ずして、其の底流を成して之を支持し之を統一する所の自我であると云ふ點に特有の意義を持つて居る。

かの健全なる精神は健全なる肉體に宿ると云へるものは、精神の健全ならんことを欲する者は其の自然的條件として肉體を健全ならしめざるべからざること主張するものであつて、價値若しくは目的上の見地よりする時は、依然として精神を主とするものである。

若し又假りに自然的條件として肉體の意義を高調するに止まらずして、肉體價値の優越なることを主張するものだとするならば、其の優越なりとの主張の根據は、肉體上の偉大なる理性者・命令者・創造者でなければ成らぬ。果して然らば茲に吾人は肉體以上の或者を認めなければ成らぬのであつて、それは即ち所謂人格である、人格は個々の刹那に於ける思考内容感

情内容意志内容の總和又は其の連續には非ずして、是等を生起消長せしむる所の内面的統一の主體なのである。

人格は個體なり 第三に人格は不可分の意味に於て個體であると云ふ點に於て特有の意義を持つて居る。従て人格は一の分つべからざる生命を本質とする所の個體でなければ成らぬ、一の生命に依つて貫徹されしものに非ずんば人格では無いのである、此の意味に於て人格は個體である。従つて又人格の個體たる所以は、他の人格との對立にも非ず又相互制限にも非ず、唯一貫したる生命を有する點に存在する。故に吾人は或る制限を絶して而かも尙一貫の生命を有する神又は宇宙を想定することを許さるるならば、其の生命が精神的のものなる限り、吾人は之を個體と見、人格と呼ぶに何等の矛盾を感知せざるのである。此の見地に依つて又人格主義を普通の個人主義と區別すべき主要なる着眼點を發見することが出来る。之れ人格主義を基礎とせる人格價值實現の文化的生活が、普通の個人主義を基調とせる生活と明らかに區別されなければ成らぬ所以である。

人格と性格とは異なる 第四に人格は先驗的要素を内容とする點に於て、後天的の性格と

區別されなければ成らぬ。蓋人格生活には、自己の如何とも爲し難きことも尙且之を批判し詰責するが如き普遍的にして且先驗的原理を含んで居る、吾人は如何なる境遇と性格と宿命とに據るにもせよ、苟くも之に違背することを許さず、若し之に違背する時は、己自ら安んずること能はざるが如き斷言的命令が與へらるる。即ち人格は單に一の生命として自然に統一を有し居るのみで無く、又之が先驗的に統一されて居るのである、依て茲に吾人は先驗的なる人格と經驗的なる性格との差別を發見する。

人格の先驗的要素は、經驗的性格を鼓舞し激獎し、之を苦しめ之を腦まし之を洗練し之を淨化して、人格を人格として琢磨するものである、之れ即ち人格特有の第四要素であらねば成らぬ。

人格主義的文化生活觀 吾人は人格概念を、叙上の四要素に依つて他と區別し之を明瞭ならしむることが出来る、従て人格價值の實現とは、斯る意義の下に於ける人格の成長と充實と發展とに努力し、且之を表現することを期するものである。かの現代人の要望する文化生活は、之を倫理的見地より人格主義的生活と見做し、過去に於ける物質萬能主義の生活

と反對の立場に立たしむることが出来る。

第二節 文化生活より見たる人格主義と物質主義

人格主義と物質主義との交渉 文化生活を倫理的に考案して人格主義の生活だとするならば、それは物質主義の生活と反對の立場に立つが故に、相互に何等の交渉をも持たざるが如きである。若し果して交渉を持たぬとするならば、家事が主として主宰する衣食住の物質消費經濟とも亦交渉を失ふものである、換言すれば物質的生活には何等文化的意義を持たぬことに成るのである。斯くの如きは人格主義の生活を皮相的に解釋せしものにして、未だ其の眞髓を穿ちしものでは無い。然らば人格主義の生活より見て、物質主義の生活は如何なる交渉を持つものであるか、今之を思索し考察することは、文化中心の家事新教授法を考究する上に極めて重要であり極めて興味あることたるを失はぬ。

人格主義より見たる物質の價值 さて人格主義と物質主義とは、生活の本義に於て反對の立場に立つのであるが、然しながら此の兩者は互に相害し相滅すものでは無く、寧ろ意味に於て互に相携ひ相助くるものである。

人格主義と物質とは何故に或意味に於て相提携し相幫助するか、蓋人格主義の立場より見るも物質には或程度の價值はある、然らば人格主義の生活に取つて物質の所有と其の消費とは如何なる程度の價值を有するか、此の解答の如何に依つて物質を重要視する程度に種種の差等こそ生ずれ、等しく人格生活に取つては物質の所有と消費とは必要にして缺くべからざるものなることは妥當性を持たねば成らぬ。何となれば、物質は吾人の人格生活に衣食住等の基礎を與ふるものである、然して基礎生活の安定ならざる人格生活は、殆ど架空的蜃氣樓たらざるを得ないからである。

目的と條件との區別 人格主義が物質に或程度の價值を認むるは、基礎生活を安定ならしむる意味に於て人格價值の實現を増進せしむる條件なるが故である、換言すれば物質は人格に取つて條件的價值を有するが故である。故に物質の所有若しくは消費は或條件の下に於てのみ人格價值を増進するもので、若し此の條件を缺かんか、それは却て人格價值増進の煩累と成るものである。かの物質の所有又は消費の過剰は、往往にして人格生活を墮落せしむるものなることは、吾人の現實生活に於て幾多の例證を發見することが出来る。

此の見地より論ずる時は、物質其れ自身は絶対價值を有するものではない、物質の價值ある所以のものは、之を所有し之を消費する人格の反映なりと結論せざるを得ない、斯くの如くにして吾人は物質に對する人格主義生活の根本的態度を宣言することが出来る。

現代の生活問題上物質は如何に重大なる位置を占むるにもせよ、物質價值の重大視さるる所以のものは、單に人格價值増進の條件として重大なるものにして、目的として重大なるものではない。此の條件の問題と目的の問題とを置換へる時に、そこに非常なる昏迷を招致する、何となれば條件を目的と置換へる時は、所有又は消費の増加は無制限の目的となるが故に、物質の所有又は消費の途上に於て、或る原理を基礎とせる妥協の問題はあつても、其の所有の制限又は消費の節制を顧みるの餘地は無く成るのであらう。此の見地から人格主義は或種の人の現代生活に對して大なる自覺を促がさねば成らぬ。

人格主義表現の二様の態度 人格主義より見たる物質價值は叙上の如くであるが、物質主義より見なば物質價值を如何に認むべきであるか、蓋物質主義の生活に放ても物質に獨立絶対の價值を認むるには非ず、其の價值ありとする所は物質其の物には非ずして物質所有

の喜びである。然して此の喜びも亦更に一步を進めて之を考察する時は、所有せる物質の消費に依て生ずる幸福と便宜及び此の幸福と便宜との保證を確保する安心の喜びに外ならぬのである。

果して然らば是等の保證確保の安心の喜びの度は、物質主義の見解よりすれば、物質所有の量に正比例すべきにより、叙上の幸福と便宜及び之を保證確保する安心の喜びを満足せんが爲めには、勢ひ物質の所有を唯一の目的とし、其の獲得に狂奔して日も尙足らざるに至るべきは當然のことである。

然しながら、斯くの如き論理は、物質に對して吾人の人格を消極的受働的態度に置きたるものにして、物質に對する人格の奴隸的服従である、故に吾人は人格を積極的能働的態度に置き、勤勞の喜びや困難と戦ふ勇氣や創造の樂み等、總て人格の人格たる價值を研磨し實現する爲めの必要條件を限度として、物質を所有し且之を消費しなければ成らぬのである。

人格主義生活に對する家事の位置 家事は家の安寧幸福を増進確保する爲めに、家庭生活上必然なる衣服食物住居及び一家の管理に關する事項を、衛生經濟及び審美の三方面

より、其の準備用法及び保存に亘る一切を司るものである、換言すれば家庭生活上人格と物質との交渉を主宰するものである。然らば即ち吾人は文化生活上人格主義生活を高調せんとする限り、其の基礎生活を健全ならしめんが爲め、衣食住の資料たる物質の所有と消費とを生活の條件として要求しなければ成らぬ、然しながら或る原理の下に節利の限度を忘るべからざることには已に述べたるが如くである。

此の節制の限度の下に物質を消費し、人格主義生活の條件を満足するには、其の消費すべき最小限度の物質をして最大限度の能力を發揮することに努力しなければ成らぬ、之れ前者は節約であり後者は利用である、此の節約利用の理想を實現するには、相當の學術と技能とを要する、家事は此の意義に於ける基礎生活の建設上不動不易の位置を有し、且教科として特殊の研究を要する所以である。

さればとて、家事は一家を社會より引離し社會より孤立せしめて物質の消費經濟を考慮すべきものではない、吾人は自己の一家を孤立せる金城鐵壁とする時に、茲に文化生活上大なる錯誤を招致するものである。何となれば一家を斯くの如く置く時に、自家にすら便ならば

例へ社會に不便なりとも之を是なりと成し、自家にすら利あらば例へ社會に不利なりとも之を善なりとの錯誤的批判を下すからである。

現代に於ける吾人の生活は、家庭と社會家人と民衆との密接なる交渉を産み出し、兩者協調の下に生の満足が求めらるる。之を人格主義的文化生活の本義より見るも、人格は不可分の意味に於ける個體であつて、個人と個人との對立や一家と一家との制限を絶するのである、故に人格主義の生活は、單に自己を至上なりとする個人主義生活と異ると同時に、自家を無上のものとする自家至上主義生活をも排するものである。故に今後に於ける文化中心の家事は偏狭なる自家至上主義を去り、社會民衆と共に其の生を享樂し幸福を讚美することに立脚すべしとの結論に到着するのである。

第二章 婦人に對する近世の社會的要求

第一節 婦人に對する早期時代の要求

家庭に於ける婦人の生活 早期時代に於ける人類生活の状態は、衣食の資を天然物に仰ぎ、何等の加工なく之を需要したりしことの、何れの國土何れの住民に於ても同様なりしは、史實の等しく證する所である。斯る時代に於ける女子は、男子を助けて山林原野に衣食の資を需むると同時に、其の家庭とも稱すべき生活所にあつては、衣食の供給に従事したものである。之れ早期時代の家事的原始形態に外ならぬ、モールス・アール氏が一七八九年に著述せし『米國博物館』より引用した『殖民日に於ける家庭生活』中に、次の様な事を述べて居る、曰く『斯くの如くにして吾人の家庭は最も良好なる生活の秩序を維持することを得、從て生産上に得る所も亦大なるものがある、吾人をして食ふべく又飲むべく何物をも有せざりし状態より、進んで之を足らしめたるのみならず、更に幾多の貯蓄をも得さしめたと呼ばしめた』のである。

歴史は或意味に於て何れの國にも普遍の原則を包含する、我が國に於ても其の早期時代にありては、女子は男子を助けて衣食の資を需めたる傍、其の家庭日とも稱すべき時に於ては専ら絲を績き布帛を織り、米を炊き魚を灼りて、家事的任務に關心したりしことは争ふべからざる事實である。彼の現時にありてすら、農蠶牧畜を業とする原始的生活の人類は、婦は夫と共に土を耕やし作物を培ふといへども、適當なる家庭日又は家庭時に於て、衣を洗ひ食を調ふるは、東西其の軌を一にするものである。

分業は進歩を促がすとは蓋古今の哲言である、人類が早期時代を脱して次第に其の生活が複雑するに従ひ、性的相違がもたらす必然的な天分上及び體力上より、男子は外に生産の業に方り、女子は内に消費の業に従ふに至れるのは、蓋理の當然なりといふべきである。

社會に於ける婦人の生活 社會生活状態の複雑と成るに従ひ、經濟的壓迫も亦次第に増加し、女子をして再び男子の分野たりし生産事業に従はしむるの止む無きに至つたのである。蓋早期時代に於ける女子が、男子を助けて衣食の資を需めたるは、専ら自家の需要に應ずるに止まりしも、當期に於ける女子の活動は、社會的生産業に従事するものにして、布帛

を織成して之を市場に賣り衣服を裁縫して其の工賃を得るの類は皆それである。かの現時に於ける各戸の女子家内職業より、官衛工場等に於ける幾多の女子事務員女工の如き、皆此の意味に於ける女子の社會生活であらねば成らぬ。

女性としての女子教育 早期時代に於て、女子を女性としての見地から教育することは、例へ組織的な學校に於てで無くとも、先づ家庭に於て行はれ、之に依て彼等の運命は展開したのである。然して此の家庭にての女子教育は之を二様に區別して觀察することが出来た。其の一は精神的方面で他の一は物質的方面である、前者は精神的である限り人格主義のものであつて、後者は物質的のものであり限り生産と消費とに關するものであつた。而して此の兩者中重きを爲したものは前者なりしことは言明を待たぬことである。

蓋人口の稠密ならざりし時代に於ては、需要に比し供給すべき天産物及び人工物の饒多なるの結果、生存競争が物質的方面に其の影を表はさざること、人口問題に伴ふ社會經濟史實の雄辯に之を證明し居る所である。従て此の時代の教育は精神的方面に専ら力を注ぎ、忠孝仁義貞節の道を説くにありしものにして、彼の『女大學』の如き書は此の傾向を代表して

居るものだと見るべきである、其の教育所は云ふまでも無く家庭にして、其の教師は即ち父母である、稀には私塾の無きに非らざりしも、男子に對するその如く一般的に非らざりしことは明らかである。

物質的生産的教育としては、農蠶・製絲・製織の業より裁縫・手藝・料理等に至るものにして元より家庭に於て其の教養の基礎を得、又私塾に學ぶことのありしは事實である。かの和歌文藝・音曲・插花等の技を修むるを常としたのは、一は之に依て精神の修養に資し、一は之に依て生活の平和を調節せんとしたことは明らかである、依て當代に於ける女子教育が、如何に時代的に用意周到なりしかを察知することが出来る。惜むらくは、其の教育の自由放任なりしと同時に、設備の不完全なりしことと、指導の當を得ざりしことこの爲めに、一般の普及を見ること能はざりしを遺憾なりとする。

第二節 婦人に對する社會的要求の變化

家庭活動の變化 明治維新の以前にあつては、子は親の家に居して其の家名を継ぎ其の

稼業に勤しみしものにして、婦は嫁して夫の家に入り夫と共に其の家に生涯を共にするのを常態として、『親在さば遠く遊ばず』と唱へ、其の家門を重んじ家系を尊び、父母の膝下に孝養を盡すの美を成したものである。従て稼業は個性の特徴や個人の長所に従つて選ぶものには非ず、其の家其の家門に固有なりしことは今更いふまでも無きことである、故に一面より云へば其の人の生涯は、誕生と同時に殆ど宿命づけられしのがあつた。

然るに明治維新後に於ては、世態漸く變化し四民の階級を徹廢せしと同時に、學問修業の途も亦次第に開け、各人其の資性の趣く儘に之を培養し發揚するを得るに至り、或は仕官に或は實業に自らの運命を開拓するに至つた結果、事業を爲すの地は獨り故郷のみでは無く、子は必ずしも親の膝下にのみあるを以て孝道の至上なりと考へ得ざるに至れるこそ是非も無き次第である。

斯くの如くであるから、現今に於ては女子といへども尙郷關を出でて他郷に偶居生活を爲すもの極めて多く、而かもこの種の生活者は食物住居の自給自足を爲すもの少くして、旅館下宿寄宿舎等の共同經營所の供給を受くる場合が多い點に於て、其の生活活動は家庭婦人と

大に趣を異にして居る、かの職業婦人として立つ女教師・女事務員・看護婦・女醫・女工等の如きは即ち之にして、其の生活活動は家庭的なるよりは寧ろ社會的方面に於て専らである。

更に女子の家庭活動は産業發達の影響を受け居ることを見逃すことは出来ぬ、今之を衣服材料に就て考ふるに、昔時は魚獵農蠶の餘暇を以て家内工業として紡績成織を爲したりし物も、今は工場製産の下に之を供給するが如きであり。之を採光方法に就て考ふるに、昔時は油燈燭火を點じたりしを今は電力の供給を會社に仰ぎて電燈を點するが如きであり、或は井戸は廢れて水道となり、薪炭は影を密めてガスと電熱となりしが如きであつて、家庭活動上に於ける時間と勞力とエネルギーとは著しく節約輕減するに至り、其の必然の結果として他に活動の新局面を展開せざるべからざるに至つたのである。

産業の發達に伴ふ家庭活動の他の影響として考ふべきことは、食物衣服の需要に關する状態の變化である、昔時は是等の材料は主として農蠶魚獵の原料品其の儘を家庭に需要し、主婦の手に依し一切を料理裁縫したものであつた、然るに現時に於ては是等の材料は或程度までの加工を経たる半既成品或は既成品として供給需要するに至つたのである。例へば食品に

就て考ふれば、米は白米として供され、味噌は熟製して供され、麥は搗麥引割製麥と成しパンとなし、大豆は煮て魚肉は焼きて之を賣り、家庭に於ては僅かの加工を施せば之を食するに足る有様に至つたのである、況んや簡易食堂輕便食堂等の社會的施設が簇發するに於ておやである。之を衣服の材料に就て考ふれば、ウエスト・ズロース・シャツ・メリヤス・襦袢等の既製品が店頭に販賣さるるのみで無く、表着衣裳等の既製品も少からず、加ふるに仕立屋裁縫店等の専門分業も益々發達して需要に應じて立所に之を辨じ、熟達せる手工力及び精緻なる機械力に依て、各戸未熟の家内作業を壓倒し、萬戸の主婦をして時間と勞力との節約から經濟生活を根本的に改むるの餘儀なきに至らしめた。斯くの如くにして女子の家庭活動をして益々昔時と其の趣を異らしむるに至つたのである。

婦人の活動範圍の社會的擴張 文化の伸展に伴ふ産業發達や社會施設の完備は、婦人の家庭内に於ける衣食住の活動に關する勞力と時間とを、次第に輕減するに至つたことは前述の如くである。之れと同時に一般婦人は其の個性に目醒め人生を自覺し、家庭活動の餘力を以て社會活動を爲すに至つたのは、自然の勢だと云はねば成らぬ。

更は此傾向を急激に助長せしめしものは遮般に於ける世界の大戦亂である、此戦亂に於て何れの交戦國に於ても、少壯有爲の男子は戦線に立つに至つた結果、國內の社會事業を轉補すべく婦人は家庭を出でて社會に其の業に従つたのである。交戦國にあらざる他國に於ても、交戦國の影響を受け、或は物質の自給上より或は他國への物質の供給上より、男子と共に女子も亦其の業に従ふに至つたのである、換言すれば世界の女子を擧げて家庭より社會へと出でしむるの一大傾向を招致せしめたのである。

此現象は、戦時に於ける異數の事實なるにより、之を以て常時を律すること能はずと云へども、而かも此事象によりて、婦人の社會活動上に於ける力量や能力が、業務の種類に依ては必ずしも男子に劣るものには非らざること、並に或種の業務にあつては男子と同等以上の成績を擧げ得るものなることが、一般に認知せられたるは到底否定すべからざる事實である、斯くの如くにして平和克復後に於ても、女子の社會活動は其の儘に擴大され種々の方面の新職業に従事するものを見るに至り、所謂女子の社會奉仕の聲を大にするに至つた、其の奉仕的職業として現今比較的適當視され且實際に其の數の多きものは、女教師・女事務員・女店員・

女工・女醫・看護婦・助産婦等にして、就中女教師・女事務員・看護婦・女醫・助産婦等は、智識階級に屬する職業にして、戰役後に於て特に劇増せしことは注目し値する。

元來女子が女性としての使命な家庭奉仕にあるにもせよ、文化の伸展するに従ひ、其の餘力を以て社會奉仕の業に従ふは、人類幸福の増進上當然のことである、而して女子の家庭活動の範圍及び程度は、社會施設の進歩と産業の發達とに伴ふて次第に減少さるるが故に次第に餘力を生ずる譯である、之れ近時女子の社會奉仕事業の頓に其の頭角を表はせし所以である。然らば其の奉仕事業としては何を以て適當なりすべきか、そは各人の個性資質の如何に依て異なるが、普遍にして妥當なるものは、女子の家庭活動の社會的延長である。然るに女子の家庭活動は所謂家事的作業に屬するものにして、衣服・食物・住居・看護・育兒・一家の管理等である、故に其の社會的延長としての業務は、衣服の調達整理に關する職業、食物料理業及び供給人、女醫看護婦、女教師・保姆、家庭教師・家庭管理人等であると云はねば成らぬ、かの米國に於て一家の管理を專業とする職業婦人のあるのは、文化發達上當然の歸結だと云はねば成らぬ。

社會化せる近世的家庭

社會の安寧幸福と家庭の安寧幸福とは相對的互助に依て發達もし保證もさるる、蓋大は小の集まりに依て成ると云へども部分の實在は全體の存在に依て保證さるるが故である。然らば即ち吾人は自家一身の幸福の爲めにのみ躍躍することなく、社會共榮の爲めに奉仕するの美くしき決心を持たねば成らぬ譯である、之れ近時に於ける人類活動の一大傾向にして、女子の社會奉仕の勃興も亦其の一表現に外ならぬものである。

元來奉仕觀念の根本的基調をなすものは之を三種に區別することが出来る、其の一は自己を以て至重至上なるものとし、一切の行動事象の是非の判斷は、自己に對する利害便否を以てするものにして、此判斷の下に自己奉仕をするものを自己至上主義と名づることとする。其の二は自家を以て至重至上なるものとし、一切の行動事象の是非の判斷は、自己の家庭に對する利害便否を以てするものにして、此判斷の下に自家奉仕をするものを自家至上主義と名づることとする。其の三は自己及び自家と社會との有機的關係を觀視し、他と不可分の意味に於て自他の區分對立を絶して、人生の爲めに人格價値の實現を期し、一切の行動事象の批判を自己及び自家の制限を絶したる一貫せる人格的生命に依てするものにして、之

を人格至上主義或は社會至上主義と名づくべきものである。

自己至上主義及び自家至上主義の生活にあつては、自己及び自家と社會との中間には、頑強不拔の鐵壁を建設し、自己及び自家をして益々社會より隔離せしめ、一切の行動批判の對象は自己及び自家にして、其の便益を圖るを以て至上の目標と爲すを以て、例令社會に不便不利なる事なりと云へども、自己又は自家に取つて便利なるに於ては、之を善なり眞なりとして敢行するの勇氣と決心とを有するものである。然るに人格至上主義にあつては、自他を一貫せる眞理の命令による人格實現の生活を爲すものなるにより、此眞理の命する所は、例へ自己に不便にして自家に不利なりとも社會多數の幸福の爲めには之を敢行するに何等の躊躇も無いのである。

近世に於ける家庭生活は、此人格至上主義の意味に於て社會と密接に結合され來たつたのである、彼の節米麥食問題の如き、又都市公衆衛生問題としての家宅清潔法の如き、又は夜間就眠後に於ける電燈消火經濟の如き、或は臺所に於ける水道水の節約問題の如き、一として家庭生活上の近世的社會化に非らざるは無いのである。此見地より文化中心の家事科内容

及其の教授の方法は、過去の時代に於けるものと、大に其の立場を異にせなければならぬ。

第三節 婦人に對する現代的要求

主婦としての要求 家人の健康を維持する上に於て直接又は間接に責任を負ふ處の主婦は、物質的及び精神的に智力活動の範圍と深度とは、現代生活に於て一層増大せなければ成らぬ。詳言すれば家人の爲めに、食物衣服住居及び管理に關し、其の選擇準備用法の注意に就き、一層深刻にして合理的なる研究と實行とを要求して來たのである。

従て現代の主婦は、家事の主宰上物質勞力及時間の三ツを智力ある方法に依て使用し、有効なる結果を收むることに努力すべき大なる責任を持つのである、かの最小限度量の物資を消費して最大限度量の効果を獲得すべしとは經驗主義上の金科玉條である。而して最小限度量の消費は即ち物資の節約にして、最大限度量の効果獲得は即ち物資の利用であらねば成らぬ。従つて現代婦人への主婦としての要求は、衣食住等に關する物質エネルギー及び時間を節約利用する爲めに理智的活動を爲し、以て一家數人の者をして、其の幸福を享受せしめん

ことを期するになる。

以上の見地より考察する時は、主婦は家庭生活上料理裁縫等の爲め殆ど全部の勞力時間を消費し來れる過去の生活法を改め、相當の器械器具及び社會施設を利用することに依て、其の勞力及び時間を輕減節約し、且一家科學に經營的を運用することに依て其の効卒を高め、餘力を以て女子に適當にして有効なる他の責務に奉仕することが又現代の要求である。

更に他の要求として見逃がすべからざることは、家庭に於ける女子の平和的精神の發露に成る活動である、家庭は一面より云へば社會的事業の策源地であり、他の一面より云へば家族團樂の場所である、故に吾人は一方に於て社會生活の爲めに粉骨碎身すると同時に、他方に於て家庭生活の團樂に依て慰安を與へられねば成らぬ。而して男子の資質及び活動は主として直線的突進的なるに反して、女子の資質及び活動は主として曲線的靜止的である、故に女子は男子に伍して家庭生活を調和し、之を愉快ならしめ平安ならしめ和氣を漲ぎらすに適當の使命を持つて居る、此家庭平和の精神を遺憾なく發揚し、家人をして之に浴せしむることは、稍もすれば乾燥に失せんとする現代家庭の主婦に對して、其の要求の切實なるものが有るのである。

斯くの如くなるが故に、現代に於ける婦人への要求は、物質勞力及び時間の理智的使用に依て、衣食住の基礎生活を満足し、其の餘力を以て他の奉仕事業に従ふと同時に、平和の精神を培養し之を發露せしむることに依て叙上の要求を満足せしむることは、即ち現代女子の使命であり要望である。

公人としての要求 女子も亦男子と等しく公人である、故に公人として社會の一員たる以上は、社會公衆の幸福を増進する爲めに應分の貢獻を爲す所が無ければ成らぬ。蓋男子の社會的奉仕事業に就て見ても明らかなるが如く、人各長なりとする所に従ふのは、自己より見ても社會より見ても利とし便とする所なのである。従てこの原理を男女の別に就きて考ふるも亦同様であるべきだから、男女は各其の長とする所に従ふのは當然である、然らば即ち女子の公人としての奉仕事業は如何なる方面たるべきであるか、こは先きに述べたるが如く、女子の家庭に於ける主婦としての任務の社會的延長である、而して此延長には、物質的方面と精神的方面とがあつて、前者は衣食住看護育兒等の事業を社會に延長したるものであ

り、後者は平和を中心とする家庭精神の社會的宣傳と表現とであるのである。即ち先きに述べたる男子の直線的奉仕活動に對して、女子の曲線的平和活動を交叉せしめ行く處に、人生の幸福を期待することが出來得るのである、換言すれば人生の幸福は男女の協調に依る產物なのである。

更に市民としての要求を考察して見ると、女子にして戸主たり世帯主として一家を代表する場合は云ふも更なり、戸主又は世帯主の配偶者として之を幫助し、一家對市町村の義務や權利を遂行する場合もある。依て現代に於ける女子は、一家の縣市町村及び國家に對する義務と權利とに關しては、各種の憲政的法令民法等の成文律を始めとし、不成文律による責務に關しても、明智を働かせて其の大綱を心得て居らなければ成らぬ。

我が國は憲政布かれて既に三十有餘年を経過して居るが、憲法政治の徹底や自治體の發達の未だ充分ならざるものありて存するは、憲政の精神が一般民衆に普及せざるものなるが爲めだと考へなければ成らぬ。特に此方面の明智を缺く所は、男子よりも女子に於て其の多くを發見し得る。此の見解に依る時は、少くとも一家對自治體關係の法令等は、今後の女子教

育に於て之を授くることにせなければ成らぬと思ふ、若し現行の小學校教科中に、之を授くるに適當なるものなしとするならば、それは家事科に於て其の一般を取扱ふべきものであると信ずる。

收入者としての要求 文化の發達幼稚なりし時代にありては、人口の割合に土地廣く、天產物も人工物乃至其の資料も豊富であるから、物價も低廉にして生存競争も緩徐であり、從て生活が安穩であつたのである。然しながら人口が増殖し文化が發達するに伴ふて、天產物も人工物資料も次第に缺乏し來り、同時に需要供給の不權衡より物質は次第に萎縮し、生存競争も次第に劇甚の度を加へ、所謂經濟的生活難を招致するに至つたのは自然の趨勢である。斯くの如き時代に於ては、曾ては男子は専ら社會に立ちての收入者であり、女子は専ら家庭にありての消費者であつた分界が次第に徹廢され、女子も亦收入者としての立場を見出さなければ成らぬことに成る、近時我が國に於ても女子勞働者の増加し來たのは蓋止むべからざる勢であらう。

然らば女子は收入者として如何なる方面にその勤勞を捧ぐるのを以て適當なりと成すべき

か、それは上來述べ來れる所論より演繹する時は、女子の家庭的在務の社會的延長事業なりと斷定せざるを得ないのである。クローリー氏も其の著家事教授法に於て、『女子は金錢獲得者として立つた場合に於ても、矢張消費者として立ちて、如何に食すべきか如何に着るべきか如何に住むべきかに關して智識と技能とを理智的に働かせしと同様に、其の智識と技能との理智的活動を收入事業に向つて注ぐのを賢なりとすべきである』と云つて居るのは、吾人と其の見解を同じうするものである。

此の見地よりする時は、今後に於ける女子の金錢獲得者としての活動範圍は次第に擴大され、女教師・保姆・女醫・看護婦・女子官吏・女子會社員・女子銀行員・女子商店員・女工等の如き婦人職業は次第に増加し來るのであらう、之と同時に家庭生活の方法は次第に科學的に變化して行かねば成らぬ。

今之を社會經濟上より立論する時は、現今に於ける多くの家庭の主婦は、自ら奮勵して勤勞の精神を發揮し、以て家事の映掌に勉め、從來過多に使用し來れる女中下婢なるもの多数を解放して、之を社會的生產事業に従事せしめ、進んでは主婦自らが家庭の家事を主宰する傍に於て、收入者として社會的生產事業に従事するに至らば、其の結果の實に驚くべきものがありて存することと思ふ。

然るに現今に於ける或る種の家庭の主婦は、終日安逸なる生活を貪らんとし且現に之を貪り、徒に女中下婢を使役し、而かも女中下婢なるものの待遇は、他の勤勞事業と到底約合はざるの觀がある。故に女中下婢なるものは次第に他に轉職し、遂に今日の如く沸底を告ぐるに至つたのである。今假に主婦の勤勞尊重に依て多くの女中下婢を解放し得たりとし、彼等をして一人一日一圓の生産を爲さしめたりとしても、現今我が國の女中數七十萬に達すると稱せらるるが故に、一日七十萬圓の生産増加を見ることは可能である、之れ今後に於ける主婦は自ら勤勞奉仕に覺醒して自ら家事に勉め、且其の生活法を科學的にし、餘裕の時間を以て生産事業に従ふのを必要とすると同時に、家庭に於ける雇人を出來得る丈け解放して、社會生産の事業に従はしむることの、社會經濟上必要な所以である。

第三章 社會的要求に對する家事科の發達

第一節 過去に於ける學校の家事

早期に於ける學校の家事 女子に施す普通教育に加味するに、家庭生活に關する課程を以てすべしとの主張は、近世に於ける新傾向にして、此種の課程によりて、女子の實生活に及ぼす効果の極めて大なるものが其處に産み出さるべき點に於て、吾人の大に喜ばざるべからざる事實である。

この新傾向は一日にして大成したものは無く、歐洲に於ては遠く第十六七世紀に亘つて、コメニウスやラッサー氏等に依て唱導し始められたものである、氏の著『學校の原理』に於て載せてある記事は之を物語るのである。降つて第十八世紀に至り、博愛學脈の人々は之に唱和し、次でペスタロッチ及び他の教育改革論者に依て次第に其の氣勢を高めたものである。然しながら、家庭の爲めの教育課程を、普通教育の民間學校に加味したのは、第十九世紀以後にして、其の教材は編物に始まり、レース刺繍に及ぼし、遂には衣服の裁縫及び料理

もを課するに至つたのである。

米國に於て始めて其の聲を揚げたのは、殆ど五十年前のことである、即ちウ・ルラード及びビーチャー兩女史は、一八一八年に此種の教育を開始するの必要をニューヨークの立法院に建議したことがそれである、而してウ・ルラード女史は編物・裁縫・料理等の外に、女子に必要な教材として家事經濟を主張したことは吾人の注目すべきことである。

有名なる女子教育者カッサリン・ビーチャー嬢は、叙上の所説を賛同して之を高調せしめしのみで無く、實行問題として之を劃策し、一八二〇年には女子教育の民間學校を設立し、家事經濟及び家庭管理に關する教科書を著述し、家事教育の發達に貢獻する所が僅少で無かつた、斯くて家事科は小學校より開始されて次に中等學校に及ぼし、遂に専門學校に普及するに至つたのである。

我が國に於て家事を普通教育の學校に加へたのは明治十五六年頃で、中等學校から始まつたのである、當時は此種の教科を家政學又は家政科と稱したのであつたが、明治三十二年に高等女學校令が發布さるるに至つて家事科なる稱號を用ふるに至つた。然しながら、其の範

國は歐米に於けるそれと異なつて居た、即ち彼の國では裁縫手藝等は家事科の一部として取扱つて居たことは、先きに米國家事學會が國內に行はれて居る代表的家事要目として公表したものを見ても明らかである、今其の主要なる題目を抜書すると左の通りである。

第一例。裁縫・料理・家庭管理。

第二例。家庭經營・家庭活動—食物・裁縫・洗濯・娛樂・家族に對する注意。

第三例。衣服・裁縫・住居・食物。

然るに我が國に於ては、裁縫は婦人の重要な仕事として古來之を尊び、未だ學校組織の教育施設を見ざりし以前より、自からの家庭に於て母より之を學び、或は寺小屋風の私塾に於て専心に修業したものである。特に我が國の衣服は、其の地質・染色・形狀・裁縫等に於て、歐米のそれと異り頻回の洗濯手入・仕立換等を爲すの必要があり、從て是等一切の衣服經濟の運用は、主婦の重要な仕事なりしことが、益々之を重要視させ、主婦の家庭活動中の大多數の時間と勢力とを之が爲めに消費さるゝの狀態なりしことが、早くより獨立したる裁縫科なる一教科として之を取扱はしめた所以であつた、從て我が國の家事科は衣食住に關して

之を學習せしむるとは云へ、裁縫手藝を含まざるのは叙上の事情上寧ろ當然である。

以上は早期に於ける家事科の發達と其の範圍の概要とであるが、其の範圍内に於ける教材の實質は、已に家事科創始の目的其の物が指示する如く、女子の家庭に於ける實際生活の準備としてであつたから、徹頭徹尾實用上の見地より之を打算し、直接眼前の家庭的實務のみ教材として選定したものである。而して其の教材の取扱方は、歐米諸國に於ては、専ら實習的技能に重きを置き、其の技能の基礎たるべき理論を批判し探究することは、殆ど全く之を度外視したものである。從て其の教授は宣言的注入的短刀直入的に實習の方法順序材料等を授け、兒童をして其の命令の下に殆ど盲目物に作業せしめたのは、甚だ遺憾とする所である。

然るに我が國に於ける家事教授は、之と其の事情を異にし、家事科の設置は専ら歐米の^先進國に倣ひたるものなるにより、該科加設の必要が家庭より出でしには非ずして、先進國の教育施設に倣ふと云ふ點に發生したのであるから、其の教材の如きも彼の國のそれに倣ひたるが爲め、我が家庭の實狀に適せざるものありしのみならず、其の教材の取扱は主として教

師の講義のみにして、實習技能の教育は殆ど皆無なりしと云ふも過言で無かつたのである。之れ蓋該科加設の當初にありては、家事教室が實習設備の困難なりしこと、及び家事教師が實習教授に可能なる資質を缺きしこと、並に當時の學風が實物實驗又は實習の教科をも、四書五經の經典を祖道するが如く、單に口頭の講義をのみを以て授くる等の事情が有つた爲めであらう。従て其の教材内容も我が家庭に不適當なりとし、又其の教授の効果も頗る貧弱であるとの非難があつたのも、是非も無き次第だと云はねば成らぬ。

家事の發達に関する自然科学者の貢獻

近世に於ける産業の發達に偉大なる效績を挙げたりし獨逸化學界の恩人リービヒ氏は、一千八百二十四年巴里ボン大學の留學を卒へて故國に歸るや、其の第一着手として研究の效を奏せしものは、農業界に一大革命を與へたる三大肥料の發見と、其の肥料の人造法とであつた。而して如何に不毛の土壤と云へども、此の三大肥料中缺乏せる何れかの一種若しくは二種以上の成分を肥料として施せば、之を豊饒ならしむることを得べしと主張し且之を實地に施行して、彼の土地は瘦せ氣候は寒く晝間は短く、農業國としては極めて不適當なる獨逸をして、當時に於ての世界有數の農産國たらし

めたのである。之れ即ち第十八世紀以後に於て、急速なる發達をなせし自然科学を、利用厚世上に適用して驚嘆に値する効を奏した特筆すべき一大事實なのである。

リービヒ氏の驚天動地の一大事業に覺醒されて全世界の自然科学者は、爾後争ふて各自専攻の純正學術を提けて之を殖産工業上に應用し、以て人類生活上の幸福増進を爲さんとの一大傾向を表はすに至つたのは、實に喜ぶべき現象にして、所謂應用科學なるものの發達が、之より大に見るべきものがあつたことを記憶せなければ成らぬ。

此間に處して、家事科加設の宣傳運動が盛々隆昌に趣くと同時に、之に平行して家事科内容を革新すべしとの聲を高め、其の科學的研究か盛に行はるるに至つたのである。即ちベンチャミン・トンプソン氏は、ルンフォールド伯（一七五三—一八一四年）と共に『熱はエネルギーなり』との問題につきて發見する所があり、更に此思想を家事問題に適用して、料理經濟上燈光加熱装置・パン焼ストーブ・コーヒー煎出法等より、家具什器類の選定・使用・保存・臺所の整理等に就き研究を進め、大に其の面目を改めしめたのである。斯くて家事問題としての採光・換氣・臺所等の設備は、恰も社會問題として學校兵舎旅館等が公衆のために爲すと同様

の注意を爲すべきことの警告と興味とを、一般世人に附與せしと同時に、家事的實務を科學的に研究操作することに依て、生活革新の實を擧げ得ることの確信をも附與したのである。

此趨勢は遂に『家庭理科』の著者なる米人ユーマン氏（一八二一—一八六七年）と、『家事の基礎』の著者なる米人リチャード氏とを輩出せしむるに至つた。ユーマン氏は化學者にして『通俗理科』と題する月刊雑誌を發行し、家事上に物理・化學及び生物學の知識を應用することに甚大の貢獻を成したること、恰も獨人リービヒ氏が數年前に、純正化學の知識及び化學研究法を農業上に貢獻したのと同様であると云ひ得るのである。かの『家庭理科』なる著書は、其の後家事關係の熱・光・空氣・食物等に關する理科實驗用教科書として採用されたことに徴するも、其の貢獻の大なることは明らかである。

家事科の科學的發達上注目すべき他の事實は、米國に於ては食物に關する人體營養問題が研究の中心と成つたことである。斯種の方面の研究に貢獻せる人には『營養及び消化の原理の實驗』（一八〇三年）の著者チョーン・ヤング、『動物體內經濟上の食物の性質及び方法』（一八一〇年）の著者ダブルユー・ツォーレー氏、ペンシルバニア大學に於て『消化に關する研究』

（一八二一年）の卒業論文を書きしウ・リアム・スチス氏、『消化の生理學的論究』（一八二五年）の著者アール・スミス氏、『健康上に於ける食物、衣服及び娛樂の關係』（一八二九年）に自家の研究を發表せしカルプ・フキツコル氏、胃の瘻孔を有するアレキシス・セントマルチン氏の病症につき、多年（一七八五—一八五三年）消化の實驗をなせしウキリアム・ベウモンド氏、コルネル農科大學教授にして營養研究所員たりしチョーン・スタントン氏（一八一—一八七四年）、營養學の權威者にしてウエステアン大學教授たるウ・リアム・アトウォーター氏及びエドワード・アトキンソン氏（一八四四—一九〇七年）等のあることを特筆せなければならぬ。特にアトウォーター氏は、食物營養研究の科學的實驗家にして、大學課程中にこの種の研究講座を創始し、且レスピレーション・カロリメーターを創案して世界的貢獻を成せし一大恩人である。

食物營養以外の方面に於ては、住居の設備管理の研究・生活價值に關する家庭奉仕の研究をなし、此方面に於ける科學的研究の基礎を造りしサルモン嬢の効績を忘れては成らぬ。

斯くの如くにして、曾ては單に實用的方面のみに捕はれたりし家事科は、漸くにして科學

的の發達を遂げ、其の一切の實務を理論的基礎の上に建設せんとするに至つたのである。我が國に於ても亦過去數年に亘りて著しくこの傾向を表はし來り、其の家事科内容及び家事教授は將は面目を一新せんとするの狀況を呈して來たことは、旅に贅言を待たぬ所である。

家事科の發達に貢獻せる高等教育 家事科の發達に關して自然科学的研究が多の貢獻をなしたと同時に、之に平行して家事科の研究が科學的なるべき必然的要求として、家事科が單に初等教育及び中等教育の研究題目たりしに止まらずして、次第に高等の専門教育及び大學教育の研究題目と成り、其の課程中に之を加味し、且此程度の教育に従事する教師が其の研究に没頭するに至つたのである。斯くの如くにして家事科は一面に於て科學者の研究の賜物に依て發達の基礎を提供され、他の一面に於て高等教育の施設に依て發達を助長せられ、其の結果として殆ど面目を一新し、内容は充實し外形は整理し、以て所謂家事科の革新の招致するに至つたことこそ實に本科のため慶賀し祝福せざるべからざることなのである。

今之を米國に就きて事實觀を述べると、遠く一六九七年にメリー・アステル氏が英國にありて婦人に對する家庭の爲めの教育に向つて大學を開放すべしと絶叫した其の要求は、意外

にも第十九世紀の前年に至り、米大陸に實現されたのである、即ち一八三七年にはオハイオ大學は四人の女子大學生に其の門戸を開放したのを先頭とし、一八五〇年にはユータ大學に、一八五六年にはアイオワ大學に、一八六二年にはワシントン大學に、一八六六年にはカansas大學に、一八六八年にはミネソタ大學に、一八七一年にはネブラスカ大學に女子の入學は許可されたのである。この形勢は識者をして洲立大學を婦人に向つて開放することの必要を益痛切に感ぜしめ、一八七〇年にはミチガン大學・イリノイ大學・カリフォルニア大學及びミシッソリー大學が、一八七三年にはオハイオ大學が、一八七四年にはキスコンシン大學が之を開放し、更に進んで婦人の爲めの獨立大學の設立を見るに至つたのである。

婦人に向つての大學の開放は、其の初期に於ては家事教育に爲めには、多くは應用課程を附加するの程度を脱せざるものであつて、化學に關して食物講義を授け、或は手藝を課し若しくは家庭整理を講ずるの類であつた、然しながら婦人に向つての家事の高等教育の効果が次第に社會に認めらるるに連れ、大學に於ては家事の學部を創設するの好運に遭遇したのである。即ち一八九〇年には洲立大學中にて家事學部を有するものが四校あつたが、一八九五

年には九校と成り、一九〇〇年には遂に三十校に達したのであつた。而して是等の高等教育に於ては、家事を衛生と經濟と美術との三方面より、食物・衣服・住居及び家庭管理の三部門に亘つて研究せしめ、且職業教育的色彩をも發揮させつつあるのである。

我が國に於ては、明治三十三年發布の小學校令旅行細則中國語の部に、『女子の學級に用ふる讀本には、特に家事上の事項を交ふべし』と示し、理科の部には『高等小學校に於ては(中略)女子の爲めには家事を併せ授くべし』と示せる結果、小學校教員養成を目的とする府縣立女子師範學校及び同師範學校女子部に於ては家事科を加設するに至り、之と同時に師範學校及び高等女學校教員養成を目的とする、東京及び奈良(明治四二年創立)の兩女子高等師範學校に於ても家事科を置いて之を研究し學習せしむるに至つたのである。

官立以外の學校にして家事科の高等教育に貢献せしものとしては、日本女子大學校を推さねば成らぬ、近年に至り東京女子大學の設立をも見るに至つたのである。

以上の高等教育の學校に於ては、物理・化學・生物學・生理・衛生等の基礎學を修めしめて先づ家事研究の基礎を建設し、更に繪畫・圖按・英語其の他の補助學を課して之を助け、依て以

て家事科各部門の科學的研究に供せしめて居る。然しながら其の基礎學科及び補助學科の學科目數又は分科目數及び其の配當時間研究設備等に於ては、歐米諸國のそれに比すれば遜色あるを免れないのである。例へば基礎學科に就きて云へば、物理・化學・生物學の外は、彼にありては應用分科として家庭化學・家庭物理學等の家庭理科(ドメスティックサイエンス)・庭細菌學・食物化學等の如き學科を有するが如きである。

我が國の中等學校以上の家事教授を施す學校としては、前述の外、官立のものにては高等女學校及び其の専攻科があり、又高等女學校高等科なるものも次第に其の加設を見るの形勢を呈しつつあるのである。私立の學校として家事教育を主とするものには、女子職業學校東洋裁縫女學校等の高等師範科等を數ふことが出来る。

家事の發達を助長する他の施設 家事の改善を家庭に促がす上に於て、家事科教授が貢献せしことの僅小ならざること、今更云ふまでも無いことである。彼の明治十五六年頃我が國に於て家事科を普通教育に加味してより以來、兎角其の教育的効果に對して非難の聲が少なく無かつたものである、今其の非難を大様二種に概括することが出来る、其の一は

教材の選擇と内容とに關するものにして、家庭の實際に適合せないと云ふ點にあつた、其の二は家事科教授は口頭の説明にのみ偏して、技術は之に伴はぬといふ點にあつた。然しながら之れ家事教育の眞の目的を了解せざる酷烈なる非難だと云はなければ成らぬ。蓋學校教育の效果は之を永遠の將來に期すべきものにして、徒弟奉公の弟子が眼前の實利實行にのみに捕はれて、其の業を盲目的に習ふのとは異なり、將來自からの力に依て發達工夫し得べき基礎の知識と技術との陶冶を期して居るのである。故に其の教材の種類や内容も、單に現下の家庭生活に適し居るのみにては満足すること能はず、更に一步進んで現代家庭を指導誘發するに足るものであるべきであり、家事教授全證を通じての態度も、理論の根柢の上に技術を建設すべきであり、又實際之に努力したのであつた。故に其の兒童をして毎日に學習せしむる技術が、敢て多年盲目的練習を積み來れる職人や技術家に劣ることあるは當然であり、其の家庭生活に對する希望意見等が、多少現在の實生活に超越して居るもののあるのも亦當然である。

見よ過去の時代に於て家事科教授に對して放ちたる非難の論點も、其の多くは現代の家庭

に於ては次第に實行され應用されるに至り、從て非難の聲も何時とも無く其の片影をだに失つた觀があるでは無いか。例へば學校にては洋式料理をも授くるが、家庭には其の必要なしと云ひたりしも、今や普通の家庭に於ても、多少の洋式料理又は洋式料理を加味せしものを用ひざるものが殆ど稀であると云つてもよい有様に成つた如きである。

斯くの如くなるが故に、普通教育の學校に於ける家事科の教授が、一般家庭の家事に貢獻せし効績は、今に於て稍之を認め得るに至つたといふことが出来る。明治時代の教育は直に明治時代の文化に効果を表はすことは、多くの場合に不可能であつて、次代たる大正時代に至つて之を表はし來るのである、從て又大正時代に於ける現今の教育は、現時の子女が主婦となり母と成るの時代に於て、大に其の効果を表はし來るのであらう。

家庭生活上に於ける家事の發達に貢獻せるものにして、普通教育の家事科及び専門學校大學等の家事部の教育以外に、見逃すべからざる他のものがありて存する。それは視學制度・職業教育・大學の應用科學講座・展覽會・共進會・博覽會等の開催、家事關係事項研究所の獎勵補助・家事雜誌の刊行物等である。

是等の事項が、家事の發達に及ぼしたる効果の數例を、米國に於けるそれに就きて示すと、一九一三年に米國政府に小兒課なるものを特設し、小兒の養育及び教育上に關して盡力し、引いて家事の發達を幫助した。翌一九一四年には、同國政府の教育課は、師範大學のドクトル・ベソヂャミン・アンドレウス氏をして、『家庭の爲めの教育』(エデュケーション・オブ・ア・ザ・ホーム)の公報を叢書として發行せしめ、家事の發達を助長した。又同年に、スミス・レバー・ビル氏の記名により、聯合政府は始めて家庭に關する法令を作り、其の結果として農科大學に於ては、農學の延長として家事に關する事項、特に食物榮養問題の研究を開始するに至つたことを特筆せなければ成らぬ。

一九一五年に、米國政府の教育課は、二人の家事特別委員としてヘンリー・カルピン夫人及びキャリー・エム・ライファルド嬢を任命し、家事科教授に關する指導と監督とをなさしめ、大に其の効績を揚げたのであつた。一九一七年には、家事科教授の發達を目的として、補助金下附其の他の獎勵方法が開始され、それかあらぬか普通教育以外に、職業教育を目的とする種々の學校が盛に家事科教授をなすの狀況を呈し、且家事の研究調査をなすものの爲

めに、補助金を與ふるの便宜も亦講ぜられたのである。

我が國に於ても、上は文部省より下は各府縣郡市等に、それぞれ督學官又は視學官の制度があり、更に視學委員なるものの依囑があつて、斯科教授の指導と監督とを爲しつつあるのは周知の事實である。

職業教育の方面に關しては、先に已に述べたるが如く、直接にこの方面に効績を擧げて居ることは單に昨今の事業では無い。又農科大學にての食物榮養研究は、多年東京駒場及び北海道札幌に於て實施し、其の研鑽の世を益して居ることは決して少くないのである。望むらくは、我が各大學に於て單に其の儘の講座を開放するのみに非ずして、家庭の爲めの家事的應用理科講座を特設するの機運が、近き將來に於て實行されん事を切に希望するのである。

屋覽會・共進會・博覽會等の開催は、其の目的に依て多少の相違はあれども、何れも一般文化の伸展に裨益する所あると同時に、家事科の發達に及ぼす効果も亦僅小ではないものである。特に前年東京教育博物館を最初として開催し、引續き各地に移動開催せる生活改善展覽會の如き、或は昨年大阪三越吳服店に開催せる婦人博覽會の如き、或は又本年京都岡崎公園

に開催せる家庭博覧會、大阪大丸呉服店に開催せる文化博覧會、同しく高島屋呉服店に開催せる世帯之會の如き、其の效果の直接なるもの頗る多かつたのである。かの本年東京上野に開催せし平和博覧會の如き、殖産工業の奨励を目的とせるものであるとは云へ、間接に家庭生活の向上に對し、文化的刺戟を與ふるに効ありしことは、云ふまでも無いことである。

家事關係事項の研究所としては、各地の衛生試驗所又は榮養研究所なるものが、官公立又は私立として近年益々開設せられ、衣食住に關する研究にも従事して利用厚世に資して居ることは、決して僅少では無い。

刊行物が家事の發達改善に資料を供給するものとしては、第一に家事關係の單行本を數へねば成らぬ、家族制に關する書、國民性に關する書、家庭教育に關する書、家庭改良に關する書、家庭理科に關する書、日用理科に關する書、衣服編物裁縫に關する書、食物榮養に關する書、衛生學書類、經濟學書類、建築學書類等頗る多いのである。

第二の刊行物としては雜誌に其の指を屈せねば成らぬ、食物養生に關する雜誌、住宅研究に關する雜誌、衛生雜誌、料理法雜誌、時好流行に關する雜誌、醫學に關する雜誌等皆それぞれ領域に於て、斯道の爲めに盡して居る筈なのである。家事専門雜誌としては、米國の『ヂョurnal・オブ・ホーム・エコノミックス』の如き、我が奈良女子高等師範學校の『家事研究』の如き、^{東京}東京世帯之會社の『世帯』の如きは言を待たず、一般婦人雜誌も亦相當なる効果を與へて居ることである。

新聞紙及び其の週刊附録の如きも、或種のもものは婦人欄又は家庭欄を設けてこの方面の開発に資して居る、特に週刊附録又は旬刊附録或は日曜附録と稱するもの内には、殆ど一部の雜誌様の物すらありて、専ら家庭的起事を網羅し、以て家庭文化の促進に努力して居るのは喜ぶべきことである。

第二節 現時に於ける學校の家事

小學校に於ける家事 我が國現行の教則にては、小學校は滿六歳より十四歳までの學齡兒童を收容し、其の身體の發達に注意して道徳教育及び國民教育の基礎並に其の生活に必須なる普通の知識技能を授くるを以て本旨として居るのである。而して尋常小學校がそれぞ

れ所定の教科目に依て、叙上の目的を果たすべく努力をして居る。然らば是等所定の諸教科目は、互に相據り相助けて其の本旨とする所を達成せんことを求むべきは云ふまでも無いことである。然らば尋常小學校の連続としての、高等小學校に於ける教科目の家事科は、右の本旨を達成する上に、如何なる位置を占めて居るか。

普通教育を施す小學校の一教科目としての普遍性から云へば、家事科も亦他の教科目と共に、兒童身體の發育を促し、道德教育國民教育及び生活必須知識の授與を爲すべきは勿論であるが。然しながら各教科目の特異性より云へば、家事科は家庭生活に必須なる普通の知識技能を授くるのを本旨とすること、かの小學校令施行細則に、家事科は『家事に關する普通の知識を得しめ、家事の趣味を長じ、兼て節約・利用・秩序・清潔の習慣を養ふを以て要旨とす』と示してあるのを見ても明瞭なことである。

然らば、家事に關する普通の知識とは何であるか、同則に示す所に依ると、『家事は衣食住・看病・育児・其の他一家の經濟に注意し、又實習に重きを置き、土地の情況に適切ならしめんことを務むべし』とあるから、其の範圍を知ることを得べく、又文部省發行の『高等小

學家事教科書』を見ると、住居・衣服・食物・看病・育児・一家の經濟・一家の管理事項等が記載してあるのに依て、更に前記の範圍を確かめ得る譯である。而して之と同時に、其の教科書に依て、文部省の精選したる教材、精細に研究したる排列、慎重に考慮したる程度、精密に考究したる前後の聯絡を窺知することが出来るのである。然しながら、教材内容は土地の情況に適切ならしむべしとあるから、適當に之を増減斟酌をしてもよい譯であるが、而かも土地の情況なるものは、獨り空間的に異なつて居る許りでなく、時間的にも亦異なるものであるから、此の兩様の意味に於て、家事教材及び其の内容は、之を劃一固定主義に採定することは不合理であり、さればとて幾種の教科書をも作成することの不可能である事情もあるであらうから、かの文部省教科書は之を家事教科書の標準と見て取扱ふべきである。

空間的相違に關しては、家事教材の地方化問題として過去數年來盛に研究され調査されて居るから、今茲に之を再び云はなくともよいと思ふ。然しながら時間的の相違に關しては、餘り多く論議されて居らぬ、依て次に少しく之を考察する。

文化の意義は、先に已に述べた様に、其の當面の問題は精神的人格的に見たのであるが、

條件の問題は物質的經濟的の満足であつた。然らば文化の伸展に伴ふ生活の營爲は、一面に於て精神的の向上を求め、他面に於ては物質的の向上を企圖しなくては成らぬ。其の精神的方面に關しては、現代思想の推移をも理解せなければ成らぬ、かの過去の時代に於ては、自己の家庭をのみ至上至重なるものとした所謂自家至上主義を高調し、勇敢に之を決行した様な傾向を持ちし時代もあつたが、デモクラチックの思潮が世界人心を浸潤するに至つた現今に於ては、自家至上の主義は世間に容れらるるの餘地なく、自家を一般社會との相互協立關係の下に人生の幸福を求むべき、社會協調主義に據るべしとせらるるに至つた如きは、其の著しき一例である。このデモクラチックな調協主義より云へば、前年世間に喧しく宣傳されたりし節米麥食問題の如きは、豪農にして饒多なる貯藏米を有する家庭なるか、或は富豪にして白米の購入に窮せざる家庭にありては、自家經濟の上よりは何等節米の必要を感じざるべきも、一般社會問題として之を考察する時は、直に其の必要を感じ得ることを得べきである。又電燈問題に就ていへば、月極め電燈は毎夜の點燈時間の長短に依ては電燈料に變化を來たさぬ、従て夜間就眠後に於て點燈し置くも自家經濟には影響せぬのである、さればとて

之を社會經濟より見る時は、不用時間に電力を消費せずして之を電燈會社が適當に蓄電し置かば、他の有用時に之を供給することを得るが故に、就眠後の消燈の如きは文化人の盡すべき義務なることが了解し得ることである。其の他家長の獨裁的權力主義や、長子の家産獨占主義の如き、今後の家庭生活上深く考慮すべき問題である。

更に眼を物質文化の方面に轉するならば、時代の推移と共に進歩し發達することの一層驚くべきものがあると思ふ。今試に之を電氣の應用に就て考察せんか、通信機關の方面に於ては有線電信の印字機より出發して音響機となり、次に無線電信の創裝を見るに至り、其の驗波器は金屬コヒーラーより鑛石驗波器と成り、電波は遠く太平洋上を東西兩大陸間に往來して居る。電話機にあつては、ベル氏の創案より出發してハンニングスコン式を経てデレビル式ソリッド・バツニ式に發達し、市内近距離の通話が次第に延長して市外數十百里の通話を完成するに至り、其の交換機様式も、各戸電池式より共同電池式となり、更に進んで無線電話の完成となり、今や已に實用に供されつつあるのである。

次に交通機關の方面につきて述べんか、電車・電氣機關車の運轉より、列車運轉の安全信

號用タブレットの如き、飛行機等が有する輕油發動機の點火裝置、潛航艇の潛航動力等皆電氣力を應用せざるものは無い。機械工業の方面に於ては、蒸氣動力は今や將に電氣動力に制服されんとしつつあるのである。探光加熱裝置の方面に於ては、薪炭・石炭・ガス・石油等の燃料は今や次第に電氣に化し、石油燈は其の影を潜めて電燈となり、カーボン電燈はタングステン電燈と成りオスラム電燈と成りて次第に其の効率を増大し、臺所の竈はガス七輪と成り電氣混爐と化しつつあるのである。其の他電氣化學製造方面や電氣醫療方面等につきて考察する時は、殆ど枚擧するに暇が無い程である。

斯くの如く、物質文化の威力は、之を大にしては自然を征服して尙飽足らず、之を小にしては原子電子の深奥を窺ふても尙止まないものである。是等極大極小の研究がそれぞれに應用科學上に實現され、一方に於ては天を摩するの大煙突下に轟然として、大機械が物凄く運轉するかと思へば、地方に於ては研究臺上の顯微鏡が、細胞組織の微を穿ち細を極め、或は實驗臺上の真空放電裝置が、分子原子の崩壊によりて生ずる原子を窺はしめて居る。かくて基礎科學と應用科學とは相伴ひて進歩し、以て寥々たる物質文化を飾ることに依て現代人類の

基礎生活を安定ならしめ、從て精神文化の發達を確保し、人生の幸福を招致して居るものである。

然るに基礎生活を安定ならしむる爲めの物質文化利用の状態を觀察して見ると、其の社會生活上の施設は可成り巧妙に之を利用しては居るか、家庭生活上の利用に至つては實に不備にして寒心せざるを得ないものがある。換言すれば物質文化の程度に於て、社會と家庭とを比較すると殆ど隔世の感なき能はずである。之れ主として社會生活上の施設は、先見者たる男子の指導計畫宜しきを得たるに反して、家庭生活上の施設計畫は、殆ど主婦としての女子に一任され、而かも主婦其の人の物質文化觀が、概して社會先見者のそれよりも低級であつたことが其の有力なる一原因で無ければ成らぬ。

以上の見地よりいふ時は、家事科教材の内容は、獨り空間的に其の郷土の情況に適切なるのみならず、時間的にも亦現代文化に適應せしものならざるべからずと斷言し得るのである。之れ吾人が常に家事教材の郷土化と平行して、家事教材の現代化を唱導して居る所以なのである。

ドクトル・デューン・デーウェー氏は、一般民衆をデモクラチックに幸福ならしむべき責任を負ふべき普通教育は、第一に兒童の趣味と兒童の生活上の必要との相違によりて作業教科の學習課程を異にすべきであると同時に、第二に同一作業教科に於ても、兒童の趣味と必要とに依て斟酌することを許容すべく改造するを要すと云つて居るのも、蓋叙上の意義を含んで居るものと考ふべきでありう。

之を要するに、現時に於ける小學校の家事は、教則に示されたる範圍内の事項に就て教材を選択し、其の選擇せる教材内容は家庭生活を指導啓發して現代文化を取入れ得る様に、空間的には之を郷土化した時間的には之を現代化することに努力すべきである、從て家事教師の手腕と効果とは、先づ第一に此點に於て別るることを覺悟しなくては成らぬ。

女學校に於ける家事 本書は主として小學校に於ける家事教授を論ずるものであるが、其の所論を徹底させんが爲めに、更に進んで女學校職業學校に於ける現今の家事につき少しく述べる必要がある。

高等女學校の教育は、小學校に引續きて普通教育を稍高等の程度に於て授けるのである。

英米等にては大學の豫備教育を意味するものもあるが、そは大學との連絡制度を有する國で、我が國では然が見做すことは出来ぬ。かの歐米のカレッジに相當する我が女子高等師範學校に入學するの連絡があるとしても、我が國の高等女學校の教育はそれ等への豫備教育の性質を有するものでは無く、徹頭徹尾四個年又は五個年の課程で女子としての高等普通教育を完成させることを目的として居るものである。

米國に於ては、我が國の高等女學校に類似するオール・レギュラリー・オルガナイズト・ハイスクールの外、女子中等學校としては各種の職業を授くるボケーションナル・スクールがあり、適宜の時間のみ通學するパートタイム・スクール等がある、前者は市民として公人としての必要な職業を授け、後者に正規の女學校に通學し得ざるものの爲めに、或る特別な時間に於て教育を受けしむるものである。

我が國の實科高等女學校は女子の爲めのプラクチカル・ハイスクールにして純然たる職業教育の學校では無いが、普通の高等女學校の教科を一層應用的ならしめた所に其の特徴を發揮すべきものである、即ち家庭生活上より見ても、市民又は公人としての社會生活上より見

ても、必要にして缺くべからざる業務を應用的に授くる點に於て、其の設置の理由を發見し得るものである。

純然たる職業教育の學校としては、中等程度のものには女子技藝學校とか裁縫學校とか刺繡學校とか稱する種類のものがあるが、男子の爲めのその如く多種多様では無い。蓋英米等の如く、男女共學でもなく社會狀態も異つて居る結果として止むを得ざることであらう、將來に於ては我が國の中等教育も此方面に向つて大に發達の餘地と必要とを有する。

さて我が國の高等女學校の家事科は、如何なる目的の下に如何なる範圍内の事項を取扱ふのであるが、今之を述ぶるの前提として高等女學校教育其の物の目的から考へるのが便である。明治二十二年發布の高等女學校令に依ると、高等女學校は、『女子に須要なる高等普通教育を爲すを以て目的とし、特に國民道德の養成に力め婦徳の涵養に留意すべきものとす』と示してあることに依りて明らかなるが如く、小學校教育の連続として高等普通教育を施し婦徳涵養に於て其の特色を發揮すべきものである、彼の米國家事教育の聯合組合教授アンナ・エム・クリーリー氏が、其著『家事教授法』に於て、ハイスクールの教育の目的とする所は、『道

徳的身體的及び智識的の善美と、總明にして忠實なる市民性の高等なる典型としての基礎を陶冶し、且彼等の職業上に於て、人類にまでの善良なる奉仕の準備を、中等程度に職業的特別訓練を施すにある』と云つて居るのは、彼の國情の下に於て我と同意義を持つものである、唯其の教育を將來の職業準備と云ひ切つた點に於て論議の餘地を有する。

さてこの高等女學校教育全般の目的より見る時は、家事科も亦體育的智育的及び徳育的に眞にして善美なるべき中等教育を施すにあるけれども、家事科の特異性より見る時は、教則に『家事整理上必要なる知識を得しめ、兼て勤勉・節儉・秩序・周密・清潔を尙ぶの念を養ふを以て要旨とす』とあるが如く、總明にして忠實なる家庭奉仕者らしむべきことを要求し居ることも亦明らかである。更に吾人の考察を家庭を通じての社會關係に及ぼすならば、家事科教授は家庭を通じての社會奉仕者を教養するものであると云へる。若し夫れ特に職業教育として更にこの種の教育を擴張するとしたならば、そは先に述べたるが如く、家處奉仕の社會的延長だと云はねば成らぬ。

以上は、家事科の目的を高等女學校教育の目的に對比して考察したのであるが、次に其の

範圍教材並に其の内容一般を述べて小學校のそれに比較するの資たらしめなければ成らぬ。

高等女學校の家事科の範圍及び其の教材は、明治四十四年に發布された教授要目に依て知ることか出来る。即ち衣食住・養老・看病・育兒・經濟に亘つて居る點は小學校のそれと同様であるが、唯これ等各部門に關する教材は更に廣くして内容は一層充實すべきは當然である。

教材取扱の態度につき茲に之を附言すれば、現今其の普通教授は家事處理の方法的説明にのみ偏し、又實習教授は傳統的方法の盲目的練習が未だ全く脱却されて居らぬ。彼の所謂理論教授と稱するものも、主として前述の方法的説明に止まり、實習教授と稱するものも學理と對照されざる技術の演出である點は、先に述べたる實用主義の餘弊だといはねば成らぬ。近年に至り、自然科學の世界的影響を受け、自然科學者にして斯科研究に没頭するものもありて、家事科の科學化を高調せし結果、一般家事教師の覺醒を促がし、次第に其の面目を一新せんとし、從て又家事教材取扱の方法も研究せらるるに至れるは、吾人の意を強うするに足る傾向である。

職業教育の學校に於ける家事 歐米諸國に於ては、裁縫手藝を家事科の一部と爲し居

ることと、家庭管理は一部の家庭では職業的に成つて居ること恰も我が家庭の下婢又は洗濯婦なるもののあるのと同じの觀を呈して居ることとは、我が國と相違して居る點である。從て學校の家事科は、裁縫手藝又は家庭管理を職業的に授くる場合が決して少くない。この意味に於て彼の國では職業教育としての家事教育を見るのである。

我が國に於ては、裁縫手藝は家事科より分立して居るから、之を職業的に教授する各種の裁縫學校や手藝學校が多數あるが、然し之が爲めに家事科の職業教育と稱することは出来ぬ。然しながら他の一方より考ふる時は、裁縫手藝は、其の本質上より見て衣類に屬する事項なるが故に、家事の一部を爲すのは當然である。唯我が文政上の規定に於ては家事科より分立した獨立教科を爲し居るだけの事である。從て又我が國に於ける裁縫手藝學校は、家事科を教授するのでは無いが、家事の一部を教授し居るものだと云へる。

この見地よりする時は、割烹學校・看護婦養成所・保姆養成所の如きは純然たる家事科の一部を職業的に教授する場所であり、女子美術學校・女子職業學校・女子商業學校・女醫學校等の如きは、例令其の教科中には家事以外の須要なる多數の教科が設けられ居るとは云へ、矢

張り家事科の一分科を職業的に教育する場所だと見ることが出来る。

是等の職業教育所の家事科又は家事分科は、如何なる程度に之を取扱ひ居るかと云へば、家事科全般に亘るものは高等女學校に於けるものと大差なく、唯實習的技術の熟達完美を期して居る點は、職業教育當然のこととして到底高等女學校教育の企て及ふべからざる所である。又家事分科を教授し居る割烹學校・保姆養成所・看護婦養成所の如きに至つては、其の教養は遙に高等女學校を凌いで居るもので、純然たる職業婦人として其の卒業生の世に立ち居るのを見ても認知し得る事柄である。

第三節 將來に於ける學校の家事

現代の要求が將來に及ぼす影響 吾人の現代に於ける生活は過去に於ける教育の結果に依て得られしものなるが如く、將來に於ける生活は現代教育の結果に依て産出せらるるもので無ければ成らぬ。然らば即ち吾人は、過去の教育の現代生活に影響したるに顧みて、將來の生活の爲めに現代教育を企圖計畫せなければ成らぬ譯である。この論理を是認するな

らば、教育は現代生活の完成を當面の目的とはするが、而かも當然の結果として將來の生活準備となるものなることを豫期せざるを得なれから、現代文化の實狀より一步先立ちたる理想の下に施すべきだといふことが出来る。

早期殖民時代の男女共同稼業の状態より發達して、男女は社會と家庭とに關し内外分業の状態に到着したのは自然の経路である、かの世界戰亂の時に於て女子をして男子の分野に馳驅せしめたるは、止むを得ざる變態にして、平和克復後に於ては、再び女子をして家庭に歸らしめ、唯家庭の延長事業に關してのみ、家庭外に活動せしめ居るのは理の當然である。

然しながら五個年有餘に亘りし大戰亂が、吾人人類が過去幾千年心血を注ぎて建設し來れる精神の世界にも物質の世界にも、一大改造を試むべく餘儀なくしたのである、かくて個人にも家庭にも乃至は社會國家國際の上にも、有らゆる方面より着着として改造を實行しつつあるのである。蓋改造はレコンストラクションにして、從來の組織又は運用の根本原理を否定し、新らたなる原理の上に其の組織を建設し之を運用せんとするものである。然らば家庭生活上に於ける改造も亦この一般原則に當嵌まる意義を持たねば成らぬ、蓋戰後に於けるデ

モクラチックの思想は、過去に於ける自家至上主義を放棄せしめて、個性の尊重と社會協調主義とに目覺めたることに基因し、茲に家庭の改造氣分を招致せしめたものであらう、然しながら家庭の改造と稱するものは家庭制度の改造といふよりは、寧ろ家庭生活方法の改造を意味するものである。この傾向から見ると自家を至上なるものとして、家人の自由發展や社會公共の利益を犠牲にしても家人を之に奉仕せしむるが如きは、人類社會の健全なる發達を促進し其の幸福を企圖する所以で無い。従て家庭生活は、單に家門尊重をのみ中心とせず、一家の發達と個人の自由伸展との關係、一家の幸福と社會の平和との關係を考へて、適當に家庭生活を肘度營爲すべきである。

近年に至り、我が國にても家名の相續と職業の繼承とは必ずしも相伴隨するを要せざるに至れるが如き、或は家名の相續者は必ずしも家産の全部を相續すること無きに至れるが如き、或は種々の社會施設が家庭生活の狀況を變じて主婦をして果てしなき家事の煩瑣より免れしめしが如き、或は家長專制の生活方式が殆ど全く影を收めたるが如き、皆前途の傾向の一表現であると見ることが出来る。

斯くの如くなるが故に、家事教授に於ても、現在及び將來の此傾向を洞察して家庭經營の方針を樹立し、家事運用の方法に關して總明なる知見を得せしめ、且單に消費者としてのみでは無く、收入者としても市民としても將又公人としても、善良にして忠實なる女子たるべく教育し、健全にして幸福なる家庭生活を創成し得べく期待しなくては成らぬ。

物質消費者としての主婦の教育 家事教授上から今後の家事科内容を考察して見る

と、對外的には社會との接觸を一層密接ならしめたものであり、對内的には其の生活方法が一層科學的に經營されたもので無ければ成らぬ。吾人は是等の場合を更に考察して置く必要がある、即ち科學的生活の經營指導上、家事教授が注意すべき根本事項は、物質・エネルギー及び時間の三ツをば如何なる方法を以て最善活用をなすかの問題である。かの物質を浪費せざる様の器械を使用するとか、時間とエネルギーとを節約し得る器具を使用するとか、社會的施設たる電力・ガス・水道・電話・乃至は公設市場簡易食堂・托兒所等の最善活用を試むるとかして、對外的にも對内的にも其の生活方法が科學的に組立てられ合理的に運用されることが必要である、世の所謂能率増進法なるものも、要するに之に立脚し之より出發すべきも

のであらう。

主婦は一家の衣食住に關し、物質エネルギー及び時間の消費者である、故に其の消費經濟は科學的に研究し合理的に運用して初めて生活能率が增大される、然るに現今の主婦は稍もすると家事經濟とか消費節約とか云はゞ、單に消極的方法のみを考へて徒らに物質消費量の減少金銭支出額の天引等を實行せんとして居り、最小限度の物質エネルギー及び時間の最大活用を工夫案せざるもの多いは、消費經濟の本旨を徹底せざるものであると同時に、家事教授はこれ等の點に着眼して其の効果を擧ぐるやうにすべきである。

金錢收入者としての主婦の教育 人口が増殖するに従ひて物質の缺乏を來たし、物質の缺乏を來たせば需要供給の權衡上より物價の騰貴を來たし、從て生活難を招致する、此點より考ふるも女子は單に消費者としてのみでは無く、收入者としても活動せなければ成らぬ必要を生ずる。

人類には自然に男女の性別がある、故に男子のみにては人類生活の半面を表はすに過ぎざることとは極めて明瞭なことである、かの家庭生活に於ても男女相提携して茲に始めて圓滿な

る生活を表現し得ることは、吾人の已と體驗し居る事實である。然らば即ち社會生活に於ても亦同様にして、女子の活動は人類の生活を圓滿ならしめ其の幸福を増進する所以である。

更に人類社會の幸福増進と其の奉仕者數との關係を考察するならば、其の數の多きと共に増進度も亦大なるべきである。然るに現今の社會に於ては直接の社會事業奉仕者は主として男子のみにして、女子の多くは主として家庭奉仕事業にのみ従事して居る。故に今後に於ては、家庭生活の方法を改善して時間と努力との餘裕を造り出し、之を社會奉仕事業に傾注せしむることが、極めて必要なる方策である。

我が國に於ても、近年女子の社會的職業は次第に開拓せられ來れることは上來暫々述べ來れる所であるが、大正十年度の教育年鑑や大正十一年度の毎日常鑑に依ると、大正七年に於ける公私立師範學校及び高等女學校の女教師數は、五六三一九人にして、大正八年に於ける公私立實業補習學校の女教師數は一四六三人なるが故に其の合計は五七七八二人となるのである、それに女醫看護婦以下女子事務員・女工等を通等すると相當の數に達して居るであらう、以て現代女子の社會的職業の趨勢を察知することが出来る。

米國に於ては、エム・クレー氏の著書に依ると、一九一九年には職業婦人數は實に一二〇〇萬人の多きに達し、其の内俸給生活者は約八〇七萬人にして其の四〇%は年齢一六歳以上二〇歳以下の妙齡女子であると云ふ。斯くの如くにして彼等は、一方に於て人類福祉増進の爲め社會奉仕に勉むると同時に、やがて其の奉仕は金錢收入者として家庭生活に貢献して居ることが知らるるのである。今其の職業の主要なるものを類別表示すると、一九一〇年度に於ては左の七種を見出すことが出来る。

通信業(電信・電話・郵便事務等)……………	一〇六五九六八
商業(販賣係・會計書記等)……………	四六八〇八八八
事務員(タイピスト・出金係等)……………	五九三二二四八
教導職(教員・講師・保姆等)……………	七三三八八五八
農業(牧場労働・日雇業・植木職等)……………	一八〇七五〇一
工作製造業(仕立業・工場労働業等)……………	一八二〇九八〇
家庭奉仕業(下婢・家庭管理者・洗濯仕上業等)……………	二五三〇八四六

而して現時の家事教授が金錢收入者として彼等多數の女子の將來に、如何なる地位を與へ得るかといへば、大凡之を左の三類に區別することが出来る。

(イ)生産的職業 (Vocational Industrial Pursuits)。衣類調製業(仕立屋)・帽子屋・足袋職・刺繡編物業・洗濯仕上業・料理業・喫茶室管理業・會計係・室内裝飾業・着付整容業・家庭支配人(家庭管理業)等にして、今後の正規の高等女學校の家事科内容は、次第に此方面に向つて職業的意味を加味して來るに至ると同時に、普通正規の高等女學校以外に、或る特別の時間にのみ通學するパート・タイム・スクールや、餘暇にのみ通學する餘暇學校や、夕刻の時刻を利用するエブニング・スクール等の種類のもが次第に設置せられて、叙上の職業的家政教授が益々盛に行はるることと思ふ。

(ロ)學藝的職業 (Vocational professional pursuits)。食料品係・組合管理人・寮務係・保姆等であつて、筋肉労働であるよりは寧精神的動勢に屬するものである。

(ハ)家庭的職業 (Vocational home-making pursuits)。妻とし母とし主婦としての任務中に於て、主婦としての任務は職業的に之を映掌することが出来、又現に之に従事する婦人があ

る。即ち衣食住に關する事項を衛生・經濟・審美の方面より支配するものにして、一家庭の生活方法の安定と幸福とを増進せんが爲めの一分業とも見るべきものである。

第四章 家事教授要旨の教育的考察

第一節 家事の對象

家事の定義 家事は、家庭又は他の集團に對して、衛生・經濟及び審美的立場より、其の安寧と幸福とを保證し且之を増進する爲めに、衣服食物及び住居に關する一切の事項を處理する仕事の總稱である。而してこの範圍に屬する仕事は、家事科なる教科の名に於て兒童をして學習せしむるには、餘りに廣汎に失するの嫌がある、故に英米等の學校にては女兒の課程としては、暫々單に料理と裁縫とのみを意味する教科として用ひられしことがある。蓋此の二種の仕事は家事上極めて重要なものなるが故である、然しながら、其の何れの國たるを問はず、通常家事科といへば料理裁縫以外に更に更に家庭内の主婦としての任務を包容した廣義のものとして取扱はれて居る。

米國に於けるレーキ・ブレイシド・コンフェレンス・オブ・ホームエコノミックスの後繼者たるアメリカン・ホームエコノミックス・アソシエーションは、一九一〇年に『家庭の爲めの

教育』を施す教科の名稱を一定するために調査委員を選定し、同委員はホーム・エコノミクス (Home economics) なる名稱を以て適當なりと結論し、同時にホーム・エコノミクス (家事) を左の如く定義して、之を同學會に報告した。

教科としての家事は、家庭生活上の家族又は他の集團生活上の人々に對し、食物・被服及び住居の選擇・調製及び用法を、經濟・衛生及び審美の三方面より研究せしむる所のものがある。

斯くて此の調査報告は、翌一九一一年二月ワシントン市に開催せる、同學會第四回總會に於て可決採用された。

吾人は、茲に家事科の定義を吟味し、其の對象や範圍を決定し、且家事と家事科との區別を明らかにし、家事教授法の立脚地を求めんが爲めに、先づ家庭生活の意義を考察せなければならぬ。

家庭生活の意義 家庭生活の意義を、個別的に考察序列して見ると、次の八種を擧ぐる事が出来る。

(イ) 家庭は家族生活の場所である。即ち家庭は家と稱する組織の下に、家人が相集りて生活を営み居る場所なのである。若し家なる組織なきか、或は家族ならざる人々の集まれる生活園ならば、それは家庭 (ホーム) の生活には非ずして集團 (インスチテューション) の生活である。

(ロ) 家庭は安息の場所である。即ち家庭は、煩瑣なる社會の生活場裏より身を逃れて、肉體的にも精神的にも疲勞したる心身を休息慰安せしむるの場所なのである。

(ハ) 家庭は家族團樂の場所である。即ち家庭は、單に社會の煩瑣より逃れて、消極的に心身の休息を求むるのみに非ずして、更に進んで積極的に家族相團樂して其の心身の慰藉を求むる場所なのである。

(ニ) 家庭は交際の場所である。即ち家庭は、主として私的生活に於て知人・親戚等と交際し、友情を温め信義を厚くし禮讓を交はすの場所である。然れども公的生活上の交際は、別に其の場所と方法とあるが故に之を區別すべきものである。

(ホ) 家庭は子女教養の場所である。即ち夫婦相携へて家庭生活を營爲する以上は、子女の

あるべきは當然であり、子女のある以上は之を養育し之を教育することも亦當然のことである。父母の無限なる慈愛の下に受けたる家庭教育こそは、吾人の全生涯の浮沈を支配する全我活動の基礎をなすものである。

(へ)家庭は修養の場所である。即ち家庭は、交際の場所であり子女教養の場所であるから、之と同時に家人各自が、父とし母とし子としての、或は又個人とし家人とし社會人としての本分職責を完ふする爲めの修養を積むの場所でなければ成らぬ。かの古今東西を通じての偉大なる人格者が、聰明なる父母を有する家庭より輩出して居るのを見ても亦明らかなる事實である。

(ト)家庭は事業策源の場所である。即ち家庭は、家族の生活上の安定のためにも、社會公衆の幸福増進の爲めにも、家人各自が其の分に應じて事業を爲すの策源地なのである。彼の父祖傳來の多額の遺産を擁して、終日何等爲すことも無く、唯安逸に其の生を送るを以て誇りと成し、世人も亦この種の人を以て尊敬に値するものと爲すは、勤勞の尊重すべき所以を知らざるものであつて、寧社會を毒するものとせなければ成らぬ。

(チ)家庭は國民生活の場所である。即ち家庭は、所謂家庭生活を営むの場所であるが、同時に國民生活を営むの場所である。家が相集まりて國家を爲し、家には戸主あり世帯主ありて、國家府縣市町村等の自治團體と密接なる關係を維持し、各戸の家庭は戸主世帯主の名に於て各種の自治體や國家に對して、公民とし國民としての義務責任を盡すと共に、其等の自治體國家の施設より保護の恩恵に浴して居る。この意味より考ふれば、吾人は家庭を單位とし家庭を立脚地として、國民生活を営むものである。

吾人は更に眼を轉じて家庭生活の態度を、概括抽象的に考察序列して見るならば、左の五種に歸結せしむることが出来る。

(イ)道徳的態度。家庭は家族生活をなし、親子は敬愛孝養し、夫婦は相和し、兄弟は相友に、長幼の序正しく、道義行はれ修養積んで化育を完ふし、人道發揚の源と成る。古語に所謂『三歳の魂百歳まで』といへるが如く、幼時より陶冶され訓練されたる魂は、能く百歳の生涯を通じて人生を支配するものである、而して陶冶訓練は實に家庭生活上に於ける道徳的態度に依て成さるる。

(口)審美的態度。家庭生活は道德的態度であると同時に、吾人は之を審美的に眺むるのは當然である、而して後者に依て培養されし感情は、前者と結合して人生を藝術化する。かの高尚清楚の品格や温情閑雅の風彩などは、是等性情の現はれなのである。蓋家庭は安息の場所であり、團樂の場所であり、交際の場所であると同時に修養の場所である以上は、家庭生活上に於ける審美的態度は、道德的態度と相並んで輕視すべきものではない。

(ハ)利用的態度。家庭は家族生活の場所であり事業を営むの策源地である、而して人生百般の事業は一として時と物とエネルギーとを費やさずし爲し遂げ得らるべきものは無い。然らば即ち吾人は汝々として學び汝々として工夫し、依て以て自然界に行はるる理法を理解し、取て以て之を人生に利用し、我と人との幸福を進め、社會國家の安寧を確保することに努力せねば成らぬ譯なのである。

(ニ)奉仕的態度。元來吾人の勤勞は、之を二様の方面より觀察することが出来る、其の一は經濟的物質的であつて勤勞を以て報酬に達する方便とするものである、他の一は人格的精神的であつて、勤勞を以て人格表現の一形式なりとし、人の人たるべき義務であり目的であ

るとするものである。吾人は家庭生活上の勤勞態度を以て、經濟的物質的なりとはせず、之を以て人格的精神的なりとし、義務なるが故に之を盡し、目的なるが故に、之に努力すると奉仕觀念を以てすべきものだと思ふ。斯くてこそ始めて家庭生活は眞實化され審美化され清淨化さるるであらう。何時如何なる國に於ても、家人が家事を修むるに之を經濟的勤勞として勞銀を求むるの愚を演ずるものはあるまい。

(ホ)向上的態度。宇宙は相携へて進化の道程上を驍進しつつあるものである。然らば宇宙の一小微塊たる人類も亦この大自然と共に進化の一大道程上を進まねば成らぬ。此の見地よりいふ時は、家庭生活は時の経過と共に向上し發達すべきものである、即ち自然界の理法を吾人の生活上に應用し、絶えず發明工夫の考慮を廻らし、事業を畫策し、之を小にしては一家生活の幸福を増進し、之を大にしては人類生活の安定を企圖し、以て文化の伸展に貢献するの向上的態度を有すべきものである。

家事の對象 家事は先に定義したるが如く、或は教則の要旨に示されたるが如く、家と稱する組織に於て家族生活上に必要な衣食住等に関する各種の仕事の意味するものである

以上は、其の對象となるものも亦この範圍を脱出せぬ筈である、今之をば研究の便宜上左の三類に區別することが出来る。

(一)人。家を中心として影響を及ぼし又は影響を受くる人、即ち家長・家族・其の親族・友人・傭人及び隣人等。

(二)物。生活上必然的なる物、即ち衣服・食物・住居等。

(三)作用。人特に母たり主婦たるものの、家人及び物に及ぼす作用、並に其の作用に伴ふ技術等。更に之を分ちて左の三種とする。

イ、人に關する作用。祭祀、和親・養老・育兒・看病・傭人の取扱・親族・友人・隣人との交際等。

ロ、物に關する作用。住居・衣服・食物の選擇・調製・使用・保存に關する衛生的・經濟的・審美的處置等。

ハ、家に關する作用。一家經營の方針・一家の秩序の維持・家計の整理・一家の負ふ公的義務及び權利等。

以上列舉した各類各種の事項を對象として家事を處理する上に於て、其の方法の根據とな

るべき理法を求むる爲めの關係學術は、之を左の如く表示することが出来る。

(四)理法。物理學・化學・鑛物學・生物學、醫學・衛生學、建築學・土木學・機械學、農學・製造學、美術・工藝、經濟學・社會學・法律、心理學・教育學・道德倫理學等。

家事科の範圍 小學校に於ける家事科は、普通教育の趣旨に基きて、女兒に授くるに前項の對象事項を處理するに必要な知識技能を以てするものである、從て其の範圍は叙上の對照圈內にあるべきは當然であるが、教材としての、家事科は、前記の事項中より左の二項を省くを以て適當なりとされて居る。

イ、家庭に於て、母自らが其の子女に教へ居る事項又は教へ得る事項。

ロ、學校に於て、獨立したる教科目となり居る事項又は他教科中に含有され居る事項。

然る時は、彼の英米等に於て裁縫手藝を家事科の一部と爲し居るも、我が國に於ては獨立せる一教科目をなすが故に、之を家事科の範圍外とするのは當然である、かくの如く(ロ)の條件に當嵌まるべき、事項の取舍は極めて明瞭であるが、(イ)の條件に關する斟酌は、家庭の實狀によりて異なり、又教師の見解に依て異なるにより大に攻究の餘地を存する。然しな

がら現今一般の趨勢より云へば、如何に實用的便宜の事項なりども、單に眼前即時の技術にして、何等改良指導の要素を含まず、或は取扱上教師の勞に持つべき理法を含まざる事項は、母自らの教へに依て充分なるにより、之を家事科の範圍より取去るを可とすべしとの意見は一般に是認さるる處のものである。かの下駄の鼻緒のすけ方、小包の包方、夜具の延方、蚊帳の吊方等の如きは即ち之に屬する事項にして、是等は勇敢に削除すべしとの説をなすものが少くない。

今我が國の小學校に於ける家事科の範圍を、教科書の所載に依つて概観する時は左の如くである。

- イ、住居。住居・住居の修理保存・戸締及び火の用心・掃除・石鹼洗ひ及び灰汁洗ひ・疊建具の手入・木製器具の手入・金屬器陶磁器ガラス器の手入・雜具の手入。
- ロ、衣服。衣服・衣服の整理保存・白布類の洗濯・衣服の洗濯・シミ拔法・寢具。
- ハ、食物。割烹の心得・野菜の切り方・野菜の煮方・味噌汁の作り方・飯の炊き方・澄汁の作り方・魚の拵へ方及び煮方・魚の焼き方・牛肉の料理・酢の物の作り方・鶏卵の調理・漬物の漬方・病人の食物・飲食物・献立・食物の貯藏・飲料水。
- ニ、看病。看病の心得・藥用及び介抱・病人の衣食住・應急手當。
- ホ、育兒。嬰兒の取扱・哺乳兒の飲食物・小兒の衣類・小兒の疾病・小兒の躰け方。
- ヘ、家事經濟。一家の經濟。
- ト、家庭管理。善良なる家庭。

之に依て明らかなるが如く、其の範圍は衣食住・看病・育兒・家事經濟及び一家の管理に及ぼして居る。育兒事項は未だ年少なる女兒には理解困難なるべきにより、之を省くを可とするの説なきに非ず、又教育即生活論の見地より普通教育は兒童將來の生活準備では無く、現在の生活を完成せしむるにあるから、其の教材は兒童現在の生活世界中より選むべしとの論法により、育兒事項は之を省くを當然とするもの無きに非ざるも、女兒は幼少の頃より其の母に見習ひて幼兒保育のことに多くの興味を有し、人形遊びに於てすらも能く人形其の物を人格化して取扱ひ、之を抱き之を寢かし、或は哺乳の動作を擬するものである、殊に弟妹のある場合には好んで其の世話をなすこと、恰も母の如きである、故に育兒の全部を以て不可

解の事項なりとし、或は生活圏内の事項に非すと断定することは出来ぬ、依て適當に之を學習せしむることは、何等の不合理でもなく又困難でも無い筈である、唯妊娠生理とか妊娠中の心得とかに關する事項は、心身の發達未だ其の時期に達せずとの理由に依て之を省くのを適當なりなりと爲すべきである。

歐米の小學校に於ける家事の範圍は、國により地方により又學校によりて必ずしも同一では無い、今其の一例として米國コロンビヤのテイチャース・カレ、チの附屬小學校のものを示せば、大概左の如くである。

第一學級。家事を課をす。

第二學級。産業的方面よりも、寧社會的・公民的方面に重きを置き、原始時代より現代に至るまでに發達し來れる事項を、理科・衛生及び社會生活・産業生活に關係せしめて學習せしむる。

其の實際を窺知せんが爲めに、『日常生活』下の事項を左に例示する。

〔一〕理科關係事項としての食物・衣服・住居。其の住居に關する範圍を詳記すると左の如

くである。

(イ)使用。天候に對する保護・家族生活の場所・家族財産の保護。

(ロ)種類。一家族の爲めの家・數家族の爲めの家・多數家族の爲めの家・海岸地方の家・農業地方の家。

(ハ)材料。木材・石材・煉瓦・セメント・鋼鐵。

(ニ)一家の整理。掃除・塵埃・卓の据付・臥床の造り方・食器の洗方。

〔二〕火災・巡視・衛生保護に關する都市の施設・原始生活に於ける木上居住・洞窟居住、住居・衣服教育。

第三學級。狩獵・漁業・牧畜・農業及び商業の分布に關する仕事の相互關係は、之を技術的のものとしては地理・理科に於て取扱ひ。産業的美術工藝的のものとしては、食物・住居・衣服・家具・什器・機械・兵器等に含ませて之を取扱ふ。今其の食物に關する實際事項を例示すれば、左の如くである。

(イ)牛乳・田園生活者への關係としての牛乳及び牛乳製産物・他の食物との比較としての

牛乳の營養價・衛生上の牛乳問題、バター・其の營養價・其の製法・レンネトの作用・麥粉・レンネト及び澱粉を用ひて牛乳を濃厚にすること。

(ロ)歴史への連絡としての黒人の食物・南瓜・苹果・獸肉等の乾燥食物・豆粉・玉蜀黍粉・炒穀物。

(ハ)冬期用果實及び野菜の貯藏・ニューヨーク市場法・米人用黒人法。

(ニ)歴史への連絡としてのヘブライ人の食物・パン・扁豆。

(ホ)東部沿海地方の食用生産物・橄欖・橄欖油・其の營養價・サラダ用法・橙・無花果。

第四學級。技術的のものとしては、歴史・市民又は公民として希臘羅馬の童學・地理等にして取扱ひ。他の一般産業的のものとしては前學級と同一である。今其の食物に關する實際事項を例示すれば、左の如である。

(イ)鶏卵、其の牛乳・獸肉・野菜等に比較せる營養價・鶏卵貯藏法・同冷藏法・被覆貯藏法等。

(ロ)澱粉・其の營養價・鑑識・料理法・食物としての米の用法・野菜の貯藏・ホワイトソー

スの製法・マカロニー・其の營養價・製法・用法。

(ハ)魚、其の營養價・貯藏・罐詰・乾燥法・食物としての用法・牡蠣・鱒・鮭・鯖等。

(ニ)ココア及びチョコレート、其の原料・製法・營養價・用法。

(ホ)晝食の献立、食物の營養價より見たる献立の食量標準。

第五學級第六學級。前學級に連絡して一般相互關係事項を學習させる、今其の技術的作業中食物に關するものを例示すれば、左の如くである。

(イ)パン及びバター、其の貯藏法。

(ロ)パンを膨脹せしむる方法・鶏卵及び饅頭皮種に依て・ベーキンパウダーに依て・ソーダ及び酸敗牛乳に依て・醗母に依て。

(ハ)食量・種々の食品と營養價・食量標準。

(ニ)醗酵、已往學習の總括・イースト及バクテリア・其の存在の證明・適合條件・繁殖中止法・罐詰消毒法・牛乳殺菌法・酸性乳の用法・有用醗酵・バター・チーズ・パン・酢酒等。

(ホ)食物經濟、營養價より見たる食物の代用物・牛乳・鶏卵・牛肉及び野菜の比較營養價

及び比較代價・食品の季節購入。

(ハ) 褐色パン・焼豆・印度式腸詰・豚肉鹽漬・玉蜀黍パン・和蘭式料理等。

(ト) 茶・コーヒー・ココア、其の榮養價・衛生的疑問。

(チ) 食物廢棄物の利用。

之に依て見る時は、米國の小學校の家事科の範圍は、衣服・食物・住居及び看病・育児等に亘つては居るが、住居に關する事項は建築様式及び材料を異にするにより、我が國のものと同趣を異にするは云ふまでも無く、又育児事項の如きは單に小兒の食物に關する事に止め、家事經濟を缺けるに反し、家庭と自治體又は社會との關係につきて稍詳細を盡せるは、國情を異にするとはいへ、注目に値するものといふべきである。

參考の爲めに、我が國の高等女學校の家事科の範圍を、教授要目に依て綜合すると、左の如くである。

住居。住居の修理・保存・掃除・室内の設備・衣服什器の選擇・保存及び其の整理・裝飾・戸締り・火の用心・採光・換氣・排水等。

衣服。衣服の選擇・保存及び其の整理・洗濯法・シミ拔法。

食物。日用食品・嗜好品・飲料水・飲料・調理・献立・貯藏・庖厨用具・燃料。

養老看病。衣食住の注意、介抱・藥用・危篤者の取扱・應急手當・傳染病及び其の豫防・消毒法。

育児。懷妊中の心得・出産・嬰兒の取扱方・哺乳・離乳後の食物・小兒の衣服・運動・睡眠・疾病

言語・動作・遊戲・玩具・躰方・就學・學校と家庭との關係等。

家事經濟。家計簿記。

即ち之を小學校に於けるそれと比較すると、其の内包を異にするも外延に於ては同一であることが知られる。

歐米諸國の高等女學校に於ける家事科の範圍は、各國各地各學校に於て任意の研究的態度を以て課し居るから劃一的になつて居らない、從て其の代表的なものを捕ふことは困難である。然しながら、米國家事學會(アメリカン・ホームエコノミックス・アツツション)が、イリノイ大學のアイサベル・ベリール氏を委員長とせる、八名の調査委員に托して研究調査せしめ、其の總會に於て可決是認せしものの要項を、其の一例として左に掲ぐるのは、

比較的適當なものとする。

〔一〕食物。

(イ) 選擇。理論・分類・成分・性質・營養價・生産及び製造・偽造品・代價。

(ロ) 準備。料理・貯藏・供給・取扱及び注意。

(ハ) 用法。理論・食量・響應・管理・社會的關係・標準。

〔二〕衣服。

(イ) 選擇。理論・分類・成分・性質・調製・模造・代價。

(ロ) 準備。調製・修繕及び仕立換・洗濯及び仕上・取扱及び保存。

(ハ) 用法。服裝・裝飾・管理・社會的關係・標準。

〔三〕住居。

(イ) 選擇。理論・不正建築・費用。

(ロ) 準備。設計・構造・採光・暖房・冷室・換氣・給水・排水・下水・其の裝置・修繕及び取扱・保存・管理。

(ハ) 用法。使用法・標準。

(四) 管理。

(イ) 物質的基礎。理論・收入・支出・行事。

(ロ) 社會的關係。理論・法律・經濟的要件・社會的要件・倫理的要件。

(ハ) 活動及事業。理論・家庭生活・集團生活・社會活動。

(二) 計畫及結果。理論・個人家族集團及び公共生活の結果、物質的及び精神的結果・善良なる生活。

此の決定事項に依ると、家事科の範圍は衣服・食物・住居及び一家の管理にして、育兒・養老・看護及び一家の經濟者は、特別の部門を設けては居らぬ。唯夫々に小兒の衣食住・老人の衣食住、病人の衣食住及び其の特別取扱或は特別注意として、前記の衣服・食物及び住居の各部門中に分割包含せしめ、一家の經濟事項は一家の管理中に包含せしめて居るのである。この點に於て我が國の家事科の組立と其の趣を異にするものである。

家事と家事科 家事は已に述べたるが如く、家庭に於ける家族生活上必要なる衣食住及

び一家管理等に關する一切の仕事であり、家事科は學校の一教科として教師が兒童に授くる一教科である。従て家事の全部は家事科には非らざる筈である、即ち家事中に於て特に一教科として教師が取扱ふことを要する事項のみを選定し教材としたる教科なのである。

然らば家事と家事科との範圍の差は果して如何であるか、此の問題に關する吾人の見解は、前文に述べたるが如く、家事科は家事中より教科として教師の取扱ふことを要せざる事項及び本教科外の教科にて取扱ふ事項を省きたるものであるべきである、今其の省略すべき事項を總括すると左の如くである。

(イ)家庭の母又は主婦自からが指導し教導し得る事項。

(ロ)獨立したる他教科目として教授したる事項。

(ハ)獨立せる教材として非ずとも、他の既設教科目中に加味して教授するを以て、合理的にして且有効なりとする事項。

之を積極的に云へば、文化中心の家事新教授は、現代文化の發達より考察して、現代文化の粹を内容として包含し、而かも學校教師の教授に待つに非ずんば、之を兒童に學習せしむ

ることを難しとする事項で無ければ成らぬ。故に家事科に於て、家事教師が家事の全部を取扱はんとするのは、根本的錯誤であつて、何等家事教材の精選を施さざるものと云ふべきである、此の點に關して今後の文化的家事教授者に向つて、一大警告を與へなければ成らぬ。

第二節 家事教授の効果

効果の二方面 家事教授に限らず、知識技能に關する教授は之を二ツの方面より其の効果を觀察することが出来る。其の一は實質的陶冶にして他の一は形式的陶冶である、前者は教材の實質内容其の物が直接に吾人の家庭生活に及ぼす効果にして、後者は其の教材を取扱ふ方法に伴ふ必然的心的練磨に關する効果である、こは教授法般論が已に説述する所であつて、本書の詳述を要せざる所である。

實質陶冶主義 家事教授上に於て此の主義を高調せんとする一派の論旨に依る時は、家事科は一家整理上の實務を授くる教科なるが故に、本科の教授は教授要目に指示したるが如く、衣食住・育兒・養老・經濟及び一家の管理に關する任務を、具體的に教授すべきであつて、

かの觀察推理等の如き心力の練磨は、數學・理科の如き教科が追求すべき教育的効果である、故に家事教授は實質陶冶を主とすべきものであるといふのである。

形式陶冶主義 實質陶冶主義に對する他の形式陶冶主義の論旨に依ると、一家整理上の實務は、其の事項極めて多く、限りある時間内に於ては到底之を教授し盡さるるものではない、よしや之を教授し盡せりとするも、兒童は悉く之を理解し運用することは望み難く、又兒童各自の家庭は夫々に事情を異にし、且兒童の卒業後に於ける境遇は相互に變化し、又一般文化社會の環境も亦日々に發達し行くものである。故に何時如何なる境遇にある何人に向つても、其の儘に用立つべく家事の總てを教授し盡すことは到底不可能事である、依て吾人家事教師は、如何なる事情に處し如何なる境遇にあり如何なる環境の變化に遭遇しても、相當の効果を舉げしむるに足る教授を施すには、寧基礎的知識と技能とを授くるに止め、思考推理の心力を練磨させ、發明工夫の能力を助長せしむること、兒童の生涯を通じての教授の効果を大ならしむる所以である、故に家事教授は形式陶冶を主とすべしと云ふのである。

兩主義の調和 普通教育の一教科としての家事科は、他の教科目と共に、互に相倚り相

助けて普通教育其の物の目的を到達すべきであると同時に、各教科目は互に分立され居る以上は、各教科目の教授は、各其の特色とする所を充分に徹底し發揮するやうに努力すべきことも亦勿論である。之れ各教科目獨特の効果を達成すると同時に、やかては普通教育其の物の目的をも達成する所以の途なるが故である。然らば即ち家事教授は何を以て獨特の教育的効果と見做すべきであるか。

家事教授特有の効果としては、種々の立場と見解とより、種々の色彩を表現せしめ得るのであるが、吾人は已に述べ來れる實質陶冶主義と形式陶冶主義とは、それ等の兩極端を代表する主張なりとすることが出来る。然らば此の兩主義に對して、吾人は如何なる態度を持つべきであらうか。

元來實質的及び形式的兩方面の陶冶は、教授上決して之を引離して行はれるべき教授作用では無く、一の教材に關する教授作用を、表裏兩面より見て名づけしものに過ぎぬ。從て其の教材に就て、實質的陶冶の効果を充分に舉げんとするには、考察推理の形式的心力を練磨せしむるを要し。又形式的陶冶の効果を充分に舉げんとするには、是非其の實質的知識を材

料として取扱はねば成らぬ。即ち形式的陶冶を離れて實質的陶冶の實を擧ぐることは能はず、又實質的陶冶を離れて形式的陶冶の目的を到達することは不可能である。故に此の兩陶冶は、唇齒補車の關係を有し、恰も車の兩輪の如く互に相離るべからざるものである。

然しながら、この兩陶冶は實際の教材に方つては、其の一方をのみ過重視して他方を輕視するの弊に陥ることが暫々あるものである。即ち過去に於ける家事教授の多くは、實に此の種の弊に陥りしものにして、實質陶冶にのみ注意を拂つたのであつた。蓋少數の教授時間内に、出來得るだけ多量の知識を兒童に與へんとせば、學習上に自發的の考察とか推理とか將又論證とかいふ様な、廻り遠き觀のある道程を踏ましむることを爲さずに、教師は自から豫定の事項を豫定の順序に依て、滔々一瀉千里に講述し去り、兒童は單に受身の位置に立ちて、之を聽取するより外に適法が無いのである。

由來我が國に於ける各種學校の教科内容を、歐米諸國のそれに比較して見ると、必ずしも甚だしき差等は無いと思ふ。寧吾人の見る所に依れば、教科の種類に依りては、却て廣き範圍に亘り且多くの知識を教授されつつあることを信ずることが出来る。然らば在學中に、我

が國の如く多量の知識に附與するならば、卒業後に於て果してそれに比例して用立つものであるかが、次に起る重要問題である。

思ふに、現時に於ける文化の度を、我が國と歐米とに就きて比較して見ると其の間に數等の間隔のあることは、識者の等しく認むる所なのである。蓋彼の國の文化は主として獨創的發見なるに反して、我が國の文化は主として模倣的施設であることも何人も否定し得ざる所なのである。勿論少數の學者専門家にあつては、獨創的研究に依て世界的文化に貢獻して居るものもあるけれども、一般的に云へば前述の如くであると云はねば成らぬのを悲しむのである。然らばかかる生活態度の相違を招致した原因は果して何であらうか、吾人の所見に依る時は、我に於ては已知の知識を自由に活用するの能力を缺くのと同時に、已知の知識を基礎として、未知の事項を類推研究するの心的訓練を缺くのとあるものとせられて居る。斯かる能力の相違は、學校教育の學習法の相違に基因するものにして、彼に於ては自主的學習の態度の徹底し居るに反し、我に於ては他主的學習なることが即ちそれである。之れ我が國の家事教授が比較的多數の事項に關する知識を授けられたる卒業生を世に出しては居るが、

自から研究し自から工夫し得る卒業生を世に出すこと能はざりしが故であつて、取りも直さず實質陶冶にのみ重きを置き、形式陶冶を輕視したる教育法の結果に外ならぬのである。

此の缺陷を補ふ爲めには、今後の家事教授は、從來よりも一層形式陶冶を重視し要なくては成らぬ、然らずして實質陶冶を重んじたる結果、其の教法を誤まり、單に事實を教師より注入するの教育法によりて與へられる家事的知識は、事情と環境とを異にせる家庭の臺所に立ちては、何一ツとして已知の知識技能を應用變化してそれに適應せしむるの妙用を發揮することが出来ぬのである。故に學校の教授にありては、例令少數の教材だとは云へ、兒童をして自主的方法に依て學習せしめ、以て獨自成長の學習訓練に慣れしめ、之れに依て得たる知識技能と研究の方法とを將來の生活に適用して、自から工夫し自から研究しつつ家事を處理し得べく教育することを、今後の家事教授法は勉めなくては成らぬ譯である、斯く考へて來ると左の第一の結論に到着する。

(イ)家事教授は、單に知識技能のみを授くるを以て目的と爲すべきで無い。

然らば家事教授は、知識技能の實質教授以外に、如何なる目的を追求すべきであるか、そ

は云ふまでも無く考察推理の能力練磨である。然るに論理上よりいへば推理の形式には歸納法と演繹法との二種があつて、吾人の論理生活は此の兩形式を練磨することに依て始めて圓滿なることを得るのである。而して理科の如き數科の學習は、自然物及び自然現象の直觀より出發して歸納論理の過程を経て知識の成果に達するものであるから、家事科の學習は此の知識の成果たる概念理法より出發して、之を家庭生活上の箇々の事項に演繹して、其の整理の方法を解決すべく訓練し、依て以て歸納演繹兩方面の論理生活を完成する様に指導誘掖すべきものである。斯くの如く考へて來ると、吾人は次の第二の結論に到着する。

(ロ)家事教授の方法は、形式的陶冶を重んじ、兒童をして家事研究の方法を會得せしめなければ成らぬ。

然しながら、已に述べたるが如く、教材の實質を離れて形式陶冶は不可能であるから、教師は教材の實質を取扱ふに方りて形式陶冶を満足すべく取扱はなければ成らぬ。従つて吾人は家事教授上實質的陶冶と形式的陶冶とを成し遂げんが爲め、次の第三の結論に到着する。

(ハ)家事教材は、實質陶冶上の價值を充分に發揮し得るもので無ければ成らぬ。

是等の結論に依て、吾人家事教授の任にあるものは、實質陶冶主義の主張と形式陶冶主義の主張とを、互に調和せしむることが出来る。

第三節 家事教授の要旨

教則に示されたる要旨 家事教授の教育的考察を正當ならしむるが爲めに、已に家事の對象を攻究し、教授の効果を評論したる以上は、次に教授の要旨を吟味することを要する。

現行の小學校令旅行規則第十五條に依れば、高等小學校の家事科の要旨は左の如くである。家事は、家事に關する普通の知識を得しめ、家事の趣味を長じ、兼て節約・利用・秩序・清潔の習慣を養ふを以て要旨とす。

参考の爲め、高等女學校令施行規則に依る、高等女學校家事科の要旨を擧ぐれば、左の如くである。

家事は、家事整理上必要な知識を得しめ、兼て勤勉・節儉・秩序・周密・清潔を尙ぶの念を養ふを以て要旨とす。

要旨の解釋 是等の兩要旨を比較して見ると、殆ど同一主旨より出でたものであつて、

其の前半は實質陶冶方面の目的を示し、後半は形式陶冶方面の目的を示したもので、一目瞭然として實地教授者の準據する所のものである。然しながら、總ての事は唯表面上の解釋のみにては其の眞意を了解することが出来ぬものである。故に或は之を裏面より或は之を側面より解釋して眞意を了解するに努むることは、實地教授者の爲めに、極めて必要なることである。今次にこの立場から少しく解釋を試み、且吾人の教育的見解を附加することにする。

(イ)知識。『普通の知識』又は『必要な知識』と稱するのは、之を筋肉的作業と區別して考ふると學理を意味することに成る、然らば家事科教授は、家事に必要な普通の學理を授ければ足るのであるか、之を家庭生活の實際より考ふれば、技術の伴はざる學理は、實生活に對する奏効極めて貧弱であるものである。從て教則の所謂知識と稱するものは、單に學理のみを意味せるものには非ずして、家事教授の二種即ち普通教授と實習教授とに依りて授くる知識、即ち學理と之に伴ふ必然的な技術とを包含するものと解することが出来る。

(ロ)趣味。小學校の家事教授要旨には、『家事の趣味を長じ』と示してある、蓋女子は家庭生活を愛し、家事的勤勞を尊重し、愛家の念に長じ、家事整理の業に趣味を有することは、

一家の安寧と幸福とを増進する所以である。然るに文化の發達に伴ふて、女子の社會的奉仕事業の次第に増加するに従ひ、動もすれば家事のことに没頭するの女子を以て不甲斐なく手腕なきものとなし、知識階級の者は須らく社會活動を以て任すべきものの如く誤解し、家庭を外に飛び廻りて快哉とし徹底せる生活なりとするもの無きに非ずである。之れ其の本末を誤れるものにして、社會的活動は家庭活動の延長なるべきが故に、後者の餘力を以て前者に従事すべきものである。若し之に反して家庭生活の趣味を缺くに於ては、如何に家事教授が百千の知識技能を授くるとも何等の効果を見ることは出来ぬであらう。故に家事教授は、この意味に於て先づ家事の趣味を長ぜしむることが必要である。

(ハ)節約等 節約・利用・秩序・清潔等は、知識としては生活上有効なるものでは無く、實行的習慣として必要なるものである。故に家事教授に於ては、特に實習教授に於て是等の良習慣を體驗せしめ、實地に之を馴致することが必要である。此の點に於て節約等の『念を養ふ』のみでは無く、其の實行的習慣を養ふべきものである。

知識方面 以上の家事教授の要旨を分解して考察すると、第一に授くべきは家事に必要

なる普通の知識である。而してこの知識の授與を高調せんとするものは家事教授上の知識主義である、蓋從來の我が國に於ける家事整理の仕方を考察して見ると、主婦多年の經驗に依つて得られた方法なのである、而して此の經驗は所謂經驗其の物の共通の缺陷として、秩序的追求と合理的考察とを加へたものでは無い、従て經驗は之を尊重すべきではあるが、之に信頼することは出来ぬ、故に家事の改良と發達とを促がして、現代文化の精華を之に利用せんとするには、先づ家事に關する知識的方面の開拓を爲さねば成らぬ。

技術的方面 已に知識の獲得を爲し得たならば、次に家事科の特有なる色彩を表はす必然の結果としてこの知識を技術化せなければ成らぬ、即ち得たる知識を實際の仕事に適用し之を技術として表現せしむることである。蓋知識表現の形式には種々の方式が存在し得る、例令ば國語科に於けるが如く詩歌文章と爲すのもそれであり、圖畫科に於けるが如く描寫として表はすのもそれであり、手工科に於けるが如く製作と爲すのも即ちそれである。家事科に於てはそれと同様に之を家事的實務として技術上に表現するのを以て其の特色とするのである、かの我國に於て、家事科を普通教育に如へたりし當初にあつては、知識偏重主義であ

つたりし反動として、其の後に至り技術偏重主義を高調するに至りしも、蓋この特色の表現に努めたからであつた。かくて技術主義の家事が次第に過重視され、過去の講義的家事教授を變じて實習的家事教授となし、口頭の家事教授を變じて手指の家事教授と爲さんことに努力したのである。

能力的方面 教授上思考能力を練磨することの必要は、之を二様の方面より唱導するこゝとが出来、其の一は實質的知識及び技術の獲得上よりするものにして、先に述べたる實質陶冶の目的は形式陶冶を離れては達成し能はずと云へるのは即ちそれである、他の一は獲得せる知識及び技術の運用上よりするものにして、兒童が將來の境遇事情の變化に順應して、巧みに工夫し研究しつつ家事を處理するに至るのは、思考能力の養成と練磨との賜物でなければ成らぬからである。

去る大正六年に文部省中等教員夏期講演會を奈良女子高等師範學校に開催した機會に、家事教員協議會を開き、『家事科教授をして一層有効ならしむる方案如何』といふ諮問案を討議した結果、『家事科は、他教科に比し其の範圍極めて廣く、之を日常生活に訴へて教材を求む

れば、其の數數百千の多きに達すべし、今悉く之を具體的に理解せしめ且實習せしむることは頗る困難なることに屬す、故に家事教授は、日常生活上必要なる基本的代表的教材を選び、如何なる境遇に處するも自在に活用し得る根本の知識及び能力を確實に得しむることは、眞に本科教授をして永遠に適切有効ならしむる所以なり、世間往々實用的言辭に誤られて、機械的に眼前の實利實効を收むることにのみ腐心するものあれども、斯くては生徒の將來に起り來るべき各種の場合及び事情に應じ、適切に處理するの知識と能力とを附與することを得ず、家事科教授の進歩せざる原因又茲にありて存す』との結論に到着したのは、一面に於て代表的基本的教材に就きての知識技能を授くることを主唱すると同時に、他面に於て思考能力の練磨の必要を高調したものである。

要旨の歸結 以上攻究し來れることにより、家事科教授の要旨は、智的方面に於ては家事整理上必要なる普通の知識を附與すること、技術的方面に於ては知識に伴ふ必然的な技術を附與すること、能力的方面に於ては研究工夫の思考力を養成すること、道德的方面に於ては家事整理上の趣味と勤儉・利用・清潔等の良習を馴致することの四項に歸結せしむることが

出来る。

要旨

知識的方面—家事整理上必要なる普通の知識の附與。

技術的方面—家事整理上必要なる普通の技術の附與。

能力的方面—研究工夫の思考能力の附與。

道徳的方面—家事整理に關する趣味の養成。
勤勞節約利用秩序清潔の良習の馴致。

而して之を現時の家事教授の缺陷より觀察する時は、能力的方面と道徳的方面に關し特に努力するの必要を感じるのである。

第五章 家事教材の撰擇と排列

第一節 教材選擇の基礎的要件

教材選擇の必要 家事教材選擇の必要は、普通に(イ)家事上の實務中にて家事教材と成り得べき事項は殆ど無限である、(ロ)然るに教授時間數は有限にして而かも比較的少ないとの二ツの相容れざる事情の間に調和を保たんが爲め殆ど無限にある、教材事項中より、何等かの合理的な教育的條件を尺度として少數の教材に制限せなければ成らぬとの要求から出發したのである。この合理的な教育的條件の主要なものとしては代表的で基本的な教材を採るといふ條件である、然しながら現代文化の開發上より考ふると、家事教材は單に小數の代表的基本的なる條件を満足するのみにては充分でない、必ずや現代文化の利用に適合するものであるべきである、從て教材は其の内容に於て現代の科學的文明を包有したるものにして、^{家庭}家庭の母が之を教ふるを難しとするもので、學校の家事教師の教科として之を教ふることに依て、知識的にも技術的にも能力的にも將又道徳的にも其の効果を明瞭に認め得るに足るべ

き條件をも満足することを要する。更に又現代社會生活の要求から考へると、教材内容は社會的協調性を持つたものとの條件をも満足することを要する。かのデモクラシーの思潮は、各種の生活事業に瀰漫し、家庭生活上に於ても家長專制主義或は家長至上主義の考を以てしては到底生活の幸福と安定とを求むることは出来ぬ、同様に自家至上主義に於ても亦それである、かくの如きが故に、現代生活は家人平等の幸福と社會平等の幸福とを企圖するものであるべきが爲めに、自己の家庭と他の家庭、自己の家處と自治體、自己の家庭と社會等に對し、調和協同性を有することが必要である。依て家事教育は自家至上の内容を有するものは無く、社會協調性を持つたものであるべきである。斯くの如くであるから、今後の家事教材は、この種の各方面から一層其の選擇に専心の努力を要する、今其の主要なる事項に就きて左に之を詳説する。

生活の必須上より 第四章第一節に於て家事と家事科との區別を述ぶるに方り、家事事項中より家庭の母の教育に譲り得べきもの、他教科の教授に譲り得べきものを省きたる残りの事項はに家事科屬すべきことを述べたが。此の範圍内に屬する事項と云へども其の數殆ど

限り無きの觀がある、依て之を制限すべき條件の第一として、生活上必須なるものたるべきことを以てする、然しながら叙上の家事科に屬すべき事項は、例へ無數であり無限であるとしても、皆家事的事項なるが故に生活上必須ならざるものは無い譯である。依て其の多くの事項中で、普通の生活上に必須なるものを探り、普通ならざる事項を捨つることにする、蓋茲に普通と稱せしは、日常家庭生活上最も多く各家庭が普遍的に遭遇する事項を意味したものである、依て必須なる事項なりとも、稀に遭遇する事項は之を捨てねば成らぬ、何となればかゝる事項は普通教育上の家事教材としては之を割愛せざるを得ないからである。

理解の適合上より 家庭生活上普通に必須なるものも、其の數尙多きに失する、依て更に第二の制限として兒童の理解に困難なる事項を捨つることである、然らば何を以て兒童の理解に困難なる事項なりとするか、吾人は之に答ふる兒童の發達に不適合にして、其の生活圏内に非らざる事項なりと云はんとするものである。同様の見地より、次項に述ぶる第三の制限を提唱することが出来る。

興味の喚起上より

一方より云へば、兒童心身の發達に適する事項は理解に適する事項であり、理解に適する事項は即ち興味を感じる事項である、又他方より云へば、兒童の生活に觸れて居る事項は能く之に親しみ、能く親しむ事項は能く其の豫備知識を有し、豫備知識を有する事項は又理解に適し興味を感じる事項である。かくの如く興味を感じる事項は、更に進んで同類事項又は類似事項等をも研究せんとする努力をも生ずるものである、この點から家事教材第三の制限としては、教育的興味を喚起するに足るべき教材たるべしといふ條件が必要である。

地方の要求上より

家事教授は家庭に於ける實生活の事項を授くるものである、教育は兒童將來の生活準備の爲めに施すものでは無く、現在の生活を完成させんが爲めに施すものであるとして、兒童の現在の家庭生活の實際的事實を完成させ有意義にさせるが爲めに必要な事項を授くればよいのである、それが必然的に卒業後の次期の生活準備となるのは當然のことである。かくの如く考へて來ると、家事教材は其の地方の家庭の實生活の要求に適合したもので無くては成らぬ譯である、若し然らずんば其の教材に關する知識と技術とは、何等

其の地に生活する其の兒童の現在生活を完成する上に有意義でなく成るからである。

故に家事教材選擇の第四の制限として、其の地方其の郷土の實生活を指導開發して行く上に適切なるべしとの要求を満足するものたるべきである。彼の教材の郷土化とか地方化とか稱するのは、此の意味のものであることは、多言を費やさずして明瞭なることである。

現代の要求上より

家事教材は地方化し郷土化したるものなりと同時に、次の第五の制限として現代文化の内容を包有したものであるべきだとの條件を要するのである。蓋現代の文化は、之を物質的に云へば、時と物とエネルギーとの三次元の世界を支配する法則を出來得るだけ人生に利用することで、之を倫理的精神的に云へば、人格價值實現の生活を爲すことである。之れ現代文化人の最大要求であり従て又現代文化人の最大苦心である。かの有らゆる社會的施設や國際的協調等は、皆之より出發して燦然たる光彩を放たんとし或は放ちつつあるものである。然るに翻て家庭生活に行はるる家事に就て觀察すると、専ら傳統的な形式に拘泥して盲目的に行ひ居るものは少く無い、洗濯にせよ割烹にせよ掃除にせよ、或は臺所の設備にせよ一家の運用にせよ、殆ど前世紀の舊態を改むること無く、之を壁一重外の社

會文化に比較すると、其の内外に於て隔世の觀無き能はずである。今之を開發し之を指導誘掖して行くべき當面の責任を負ふ教科が家事科であるとするならば、其の教科は現代の文化を包容したものでなければ成らぬ、これ家事教材の現代化を提唱する所以である。

教授時間の制限上より 以上の制限に依て教材を捨てても尙殘す所の數は頗る多いものである、依て之を限りある教授時間數内に學習せしめ盡すことは困難である、故に最後の制限として、其の残りたる教材中より更に基本的代表的なるもののみを採つて他を切捨つることであることを必要とする。

茲に基本的と稱するは、其の教材に關する知識技能を以てする時は、他の多くの家事事項の處理法を構成し得るものであつて、代表的と稱するは、其の教材が有する内容は、代表せんとする他の多くの家事事項の特徴を總括具有するものである。

吾人は以上の諸要件に照して教材を精選し、規定の時間内に於て取扱ひ得べき少數の教材に就て、出來得るだけ大なる効果を收めんことを期さなければ成らぬ、家事教師の優劣の別かるる所以は又此の點にも存在する。

第二節 選擇されたる家事教材の實際

高等小學校に於ける家事教材 我が國の高等小學校の家事教材は、衣服・食物・住居看病・育児・經濟及び一家の管理の範圍内より、前節に示せる選擇條件に照して採定するのであるが、其の標準とも見るべきものは、文部省編纂の家事教科書所載のものである、この大要は先に範圍に就て述ぶるに方りて掲げたが、其の詳細は教育實際家が已に周知の事實である、依てこれを標準として適當の斟酌をなせばよいのである。

外國に於ける一例として、米國シカゴ・パブリック・スクールの八學年制の學級に於ける家事科教材を掲げて參考に供する、該校の家事は第六學級以上に課するものであつて、大様は左の如くである。

第六學級。臺所。臺所の整理・皿洗ひ、分類・其の注意及び補充、冷蔵箱其の構造・取扱上の注意、野菜・其の成分及び榮養價、穀類・其の種類、果實・其の種類、鶏卵、牛乳、バター・バター製造・其の代用品・バターと代用品との比較、パン、牛肉・其の成分・料理法、飲料・ココア・チョコレート・コーヒー等。

第五章 家事教材の選擇と排列

幼兒食物。市民としての責務、家屋の清潔及び美麗、通路につき同上、道路につき同上、附近の影響、牛乳、牛肉、魚肉、果實及び他の幼兒への供給物の良否の検査鑑別。

植物体内食品の集積、植物性食品に就ての實驗、動物性食品、消化に関する簡單なる實驗、食品中に含有する水分。

裁縫。ハンカチ、エプロン、バック、枕掛、編物、メリヤス、コルセットカバー、緞子衣縁、カラー・カフス等の製法。

大麻・亞麻及び木綿、羊毛の洗滌・梳毛・紡績、織物纖維の比較、化學的及び顯微鏡的鑑識。
第七學級。果實の保存、麥粉の混合、以上の原理、醱酵の一般理解、イーストの實驗、フラ

イ。
牛肉。其の組織液の溶解度及び凝固度の種々の要件に関する實驗、料理の復習及び應用法、魚類の鑑別・料理法、スープレック、サラダ、サラダドレッシング、果實及び野菜の組合せ、デザート、經濟的ブッチング、氷菓予の製法。

洗濯及び仕上。ハンカチ、テーブル掛、單衣物、種々の白染法、石鹼製造、糊入仕上法。
掃除、塵拂ひ、洗滌、リンネル・毛皮・羊毛織の保存の注意、防臭、防虫、救急、看護、非常處置、個人及び家庭衛生。

パクテリア實驗、人間の食物及び健康上の關係としてのイースト及びモルト、乾燥・加熱・鹽漬・砂糖漬・氷結法による食物貯藏法、サイダー・酢・酸性牛乳の製造。

熱の効果に関する實驗、液體・氣體及び固體の膨脹・其の普通の應用、水の氷結及び其の應用、狀態變化、固體より液體に・融解、液體より氣體に、蒸發、氣體より液體に・凝縮、液體より固體に・凝固、其の普通の應用、蒸溜装置及び其の應用、木炭、骨炭、食物に関する著明なる化學變化。

裁縫。ミシン機械應用、血敷、エプロン製法、着物裁縫及び仕上、寝巻、女袴、體操遊戲服、編物、女子用帽子等。

第八學級。大仕掛に依る已習事項の練習、液體に関する簡單なる實驗、液體の水平面、臺所用鍋、蒸鍋のウォーターゲージ、水の深さと水壓、水タンク、其の應用、液體の壓力傳達、押上ポンプの應用、人體に於ける血液の循環、簡單なる熱水循環裝置。

之に依て見ると、我が國の家事教材と著しく其の種類を異にし、我が國に於ける教材にして彼に於て缺けるもの非常に多く、之に反して彼に於ては我に缺く所の理化學的事項を多く如味して居るのである。之れ我が家庭生活は過去に於ては、多くは自家自給自足的なるに反して、彼に於ては社會施設の發達に依る消費共同經營による供給を利用すること多きが爲めと、生活の科學化とに依る必要に基づくからである。

高等女學校に於ける家事教材 比較對照の研究上より高等女學校の教授要目の一般につき記述する。

我が國に於ける高等女學校の家事教材は、文部省發布の教授要目に依て其の標準を知ることが出来る、實科高等女學校や女子師範學校に於けるそれも亦高等女學校に於けるものと殆ど同一である、依て茲に之を表示するの煩瑣を省くことにする。

外國に於ける例として、先きに述べた米國家事學會（アメリカン・ホームエコノミック・アソシエーション）が、八名の調査委員に依託して調査決定したものは、我が國に於けるものと趣を異にするにより、實地教授者の参考とすべき點が少くないと思ふ、依て其の要項を左

に掲ぐる。

第一。食物

（一）選擇

（一）理論的考察。細項省略以下之に準ず。

（二）分類

（イ）食品。動物性、植物性、礦物性。

（ロ）調味品、嗜好品。藥味及び香料、飲料。

（三）成分及び性質

（イ）理論的、（ロ）化學的、（ハ）物理的、（ニ）生物學的。

（四）榮養價

（イ）理論的、（ロ）消化、（ハ）同化。

（五）生産及び製造

（イ）理論的、（ロ）天然的、（ハ）管理産物、（ニ）家庭産物、（ホ）商業産物。

第五章 家事教材の選擇と排列

(六) 模造物

(イ) 理論的、(ロ) 性質的及び範圍、(ハ) 豫防

(七) 價額

(イ) 理論的、(ロ) 價額決定要件、(ハ) 消費者より見たる費用、(ニ) 購入法、(ホ) 社會的
要件。

〔二〕準備

(一) 料理

(イ) 理論的、(ロ) 分類、(ハ) 材料、(ニ) 用具、(ホ) 方法、(ヘ) 衛生的考察、(ト) 標準。

(二) 貯藏

(イ) 理論的、(ロ) 分類、(ハ) 材料、(ニ) 用具、(ホ) 過程、(ヘ) 衛生的考察、(ト) 標準。

(三) 給仕

(イ) 理論的、(ロ) 食卓給仕形式、(ハ) 用具、(ニ) 審美的、(ホ) 衛生的考察、(ヘ) 標準。

(四) 取扱及び注意

(イ) 理論的、(ロ) 分類、(ハ) 用具、(ニ) 衛生的考察、(ホ) 標準。

〔三〕用法

(一) 理論的考察

(二) 食糧

(三) 響應。(イ) 一食の献立、(ロ) 一日の献立、(ハ) 個人、(ニ) 集團。

(四) 取扱。(イ) 個人、(ロ) 家族、(ハ) 集團。

(五) 社會的關係

(六) 標準

第二、衣服

〔一〕選擇

(一) 理論的考察

(二) 分類。(イ) 材料、(ロ) 織物、(ハ) 衣服の種類。

(三) 成分及び性質。(イ) 理論的、(ロ) 化學的、(ハ) 物理的、(ニ) 生物學的、(ホ) 衛生的。

- (四)製產物。(イ)理論的、(ロ)天然產物、(ハ)管理產物、(ニ)家庭產物、(ホ)商業產物。
- (五)模造物。(イ)理論的、(ロ)性質、(ハ)豫防。
- (六)價格。(イ)理論的、(ロ)價額決定要件、(ハ)消費者より見たる費用、(ニ)購入、(ホ)社會的條件。

〔二〕準備

- (一)調製。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)材料、(ニ)用意、(ホ)過程、(ヘ)衛生的考察、(ト)標準。

- (二)修繕及び仕立換。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)用意、(ニ)過程、(ホ)衛生的考察、(ヘ)標準。

- (三)洗濯。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)用意、(ニ)過程、(ホ)衛生的考察、(ヘ)社會的、(ト)標準。

- (四)取扱及び保存。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)用意、(ニ)過程、(ホ)衛生的考察、(ヘ)標準。

〔三〕用法

- (一)服裝。(イ)理論的、(ロ)決定要素、(ハ)生理學的、(ニ)心理學的、(ホ)審美學的。

- (二)裝飾。(イ)個人、(ロ)家族、(ハ)集團、(ニ)特別なる目的。

- (三)管理。(イ)個人、(ロ)家庭、(ハ)集團。

- (四)社會的關係。(イ)習慣、(ロ)禮裝、(ハ)作業服

- (五)標準。

第三。住居

〔一〕選擇

- (一)分類。(イ)理論的、(ロ)一時的、(ハ)永久的。

- (二)不正建築。(イ)理論的、(ロ)性質、(ハ)豫防。

- (三)價格。(イ)理論的、(ロ)價額測定要件、(ハ)使用者より見たる費用。

〔二〕準備

- (一)設計。(イ)理論的、(ロ)四圍の狀態、(ハ)建築樣式、(ニ)立面圖、平面圖、仕様書。

(二)構造。(イ)理論的、(ロ)構成材料、(ハ)作業、(ニ)監督及び検査、(ホ)警備、(ヘ)衛生的考察、(ト)標準。

(三)採光。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)材料、(ニ)装置、(ホ)過程、(ヘ)生理學的、(ト)衛生的、(チ)標準。

(四)暖房及び冷室。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)装置、(ニ)過程、(ホ)材料、(ヘ)衛生的、(ト)標準。

(五)換氣。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)装置、(ニ)過程、(ホ)衛生的、(ヘ)標準。

(六)給水。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)装置、(ニ)過程、(ホ)衛生的、(ヘ)標準。

(七)排水。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)装置、(ニ)過程、(ホ)衛生的、(ヘ)標準。

(八)用具。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)過程、(ニ)衛生的、(ホ)標準。

(九)修繕。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)材料、(ニ)衛生的、(ホ)標準。

(十)管理。(イ)理論的、(ロ)分類、(ハ)用具、(ニ)方法、(ホ)衛生的、(ヘ)標準。

〔三〕用法

(一)用法。(イ)理論的、(ロ)家庭、(ハ)家居の目的上の監督、(ニ)物質的供給、(ホ)標準

第四、家庭管理

〔一〕物質的基礎

(一)理論的考察

(二)收入。(イ)財源、(ロ)分配。

(三)奉仕。(イ)家族の人数、(ロ)大人數、(ハ)小兒數、(ニ)雇人數。

(四)安寧及び企業の爲めの管理。

〔二〕社會的接觸

(一)理論的考察

(二)法律的考察

(三)經濟的・社會的及び倫理的考察。

〔三〕活動及び事業

(一)理論的考察

第五章 家事教材の選擇と排列

- (二) 家族生活。(イ) 一般的觀察、(ロ) 慣習的活動、(ハ) 稀有の要求。
- (三) 集團生活。(イ) 一般的觀察、(ロ) 慣習的活動、(ハ) 稀有の要求。
- (四) 社會活動

〔四〕目的及び結果

- (一) 理論的觀察
- (二) 身體的適合
- (三) 精神的訓練及び發達
- (四) 基礎的感情及び趣味の發達
- (五) 感化
- (六) 社會的・道德的・精神的進歩。

之を見ると、我が國の要目とは著しく其の内容を異にし、衣服・食物・住居及び家庭管理の四部門を、科學的・職業的・社會的方面より見て、其の内容を決定し且つ排列して居ることが知らる。之れ彼の國に於ける家事の發達は、實用的時代より出發して科學時代を経過

し、今や正に社會的時代に到着して居る爲めの必然の結果なのである。然るに我が國の家事は、漸く實用的時代を経過して科學的時代に入らんとして居るのであるから、叙上の如き相違のあるものも亦止むを得ざることであらう。吾人は斯科實地教授者と共に全力を傾注して其の發達を助長しなくては成らぬ。

家事教材内容の斟酌 家事教授の基礎的條件は、叙上の如くであるが、此の條件を實際の事項に適用具體化するに方り、更に斟酌するを要する二つの事項がある。其の一は、科學的段階にあるべき家事本來の性質として、科學的文化の實質を具備する様に其の内容を斟酌することである、從て傳統的習慣等に拘泥すること無く、其の内容の改むべきは勇敢に之を改むることが必要である。其の二は、家事を社界的段階に進め行く必要より、其の内容を社會生活と一層密接に交渉ある様に改むることである、かの菜の葉は如何にすれば青色に燦で得るかの如き問題に腐心するよりは、寧ろ排水と社會衛生問題、一家經濟と消費組合問題、生活の安定と社會文化の利用等の如く、より新らしく、より必要なる。而してより大なる幾ツもの問題につき研究するのは現代の要求する家事教材内容の希望であらねば成らぬ。

第三節 教材排列の基礎的要件

教材排列に関する要件の三方面 選擇したる教材を排列するには、三方面より其の要件を考慮せなければ成らぬ、其の一は兒童の理會に適せしめんが爲めに心理的要求に應すべきことである。其の二は科學的取扱を爲さんが爲めに、論理的要求に應すべきことである。而して其の三は實際の取扱上の便否より、他教科目又は季節等の對他的要求が満足さるべきことである。今此の三方面の要求に關し、次に少しく考察を試むる。

心理學的要件 心意發達の順序よりして、次の三項に歸結せしめ得る。

(イ) 簡單なる事項を先にし複雑なる事項を後にすること。

(ロ) 具體的事項を先にし抽象的事項を後にすること。

(ハ) 已習關係事項を先にし未習事項を後にすること。

彼の料理に於て、一品料理の基礎實習を先にし、献立料理の實習を後にせんとするが如きは、(イ)の要件より來れるものであり。住居に於て、掃除家具手入の如き實習を先にして、土地家屋の選擇の如きを後にするのは、(ロ)の要件より來るものである。(ハ)の要件は、觀

念類化の必要上より來るものであつて、殆ど説明を要するまでも無く明瞭なことである。

論理學的要件 論理學上の要求に應ぜんとするものであつて、次の四項に歸結せしめ得る。

(イ) 因果關係ある教材は、因となる事項を先にし果となる事項を後にする。

(ロ) 基本と組立との關係ある教材は、基本となる事項を先にし組立と成る事項を後にする

(ハ) 原理と應用との關係ある教材は、原理となる事項を先にし應用と成る事項を後にする

(ニ) 類似せる事項は連続して排列する。

彼の各種の食品の選擇を授くる前に食素に關する事項を授くるが如きは(イ)の要件より來れるものであり、献立料理を授くる前に一品料理の基礎實習を授くるが如きは(ロ)の要件より來れるものであり、白布の洗濯仕上を授くる前に、石鹼の洗淨作用や澱粉糊に關する事項を授くるのは(ハ)の要件より來れるものであり、綿ハンカチ・綿白足袋・金巾製作業服等の洗濯仕上等を連続して排列するのは(ニ)の要件より來れるものである。

對他的要件 教材相互の關係、他教科目との教材内容關係、季節との關係等に依る要件

であつて、次の三項に歸結せしむることが出来る。

(イ) 家事教材相互の關係を考へ、科學的順序に排列する。

(ロ) 他教科目との關係を考へ、基礎教科との連絡を保ち得る事項は、基礎教科の教材を先にし、家事教材を後にする様に排列する。

(ハ) 季節との關係を考へ、春夏秋冬の季節に適合したる材料方法結果等を表はし得る様に排列する。

彼の住居・衣服・食物を授けたる後に、看病・育児を授くるが如きは、(イ)の要件に基きたるものにして、後者に前者の知識を應用せんとするものであり。理科教授細目と家事教授細目との交渉が、何れの學校に於ても詳細に調査されるは、(ロ)の要件に基きて、前後の矛盾なからしめんとするものであり。四季を通じて適當なる季節献立料理を授け、又は夏期に洗濯實習を課するが如きは、(ハ)の要件に基きたる結果なのである。

此の問題に關し特に考慮を要することは、理科と家事科との交渉問題である、若し此問題を普通に行はるるが如く、單に兩科の教授細目編製上に於て文書に就きてのみの交渉にて兩

科の連絡を充分なりと考ふるならば、それは皮膚の解釋に過ぎない。眞の教授上の連絡効果は兩科の教材内容の實質的結合に於て爲し遂げ得らるべきものだから、理想的に云へば理科教師と家事教師とは同一人であればよい。然しながらこれは云ふべくして行はれ難き事情がある、故に吾人は之に次ぐべき良法を案出して、教授の効果を大ならしめんことを期せなければ成らぬ。過去より現在までに、實行され來たつた連絡法は、凡そ右の四項に類別し得らるる。

(イ) 理科教材と家事教材との學年配當上、家事關係の理科教材を、家事教材に先立たしむる方法。

(ロ) 理科教師と家事教師とは、相互關係教材の内容に關し、打合會開催等によりて互に知悉し理解する方法。

(ハ) 理科教授に於ては應用段に於て家事的應用事項を指導し、家事教授に於ては、家事處理の方法を肯定證明するに理科教授に依る已習の概念を以てする方法。

(ニ) 家事教材中にて、物質的處理に關する或種の事項を、理科教授に統合する方法。

過去に於ける家事教授の効果が、比較的貧弱なりし事實よりすれば、教法の不徹底もさることながら、此の連絡法の研究も亦不充分なりとせなければ成らぬ。かの教材學年配當の如きは形式上のことであり、擔當教師打合せの如きも時としては兩科教師の反目會たるに過ぎざるの事例なきに非ずであり、理科教授と家事教授との實質上の連絡の如きは、後者が理科的知識の不充分なるが爲めに、事實上畫餅に歸することが無きにもあらずである。依て吾人は更に本科教授の効果を大ならしむる上に、左の事項に關して努力を望むものである。

(イ)理科教師は家事を研究し、家事教師は理科を研究すること。

(ロ)教材取扱上に於ては、理科は應用段に於て家事的事項を演釋せしめ、家事科は提示段の本學習に於て、理科にて授けたる概念理法を基礎としての考察を行はしむること。

この詳論は、教授の方法論に屬するから、後章に至つて述ぶることとする。

第四節 排列されたる家事教授の實際

教材排列の二様式 教材排列の方法には二様式がある、其の一は段階的排列法で他の一は圓周的排列法である、之を家事教授の實際に訴へて考へて見ると、段階的の排列法にては

住居・衣服・食物と次々に一部門づつを完結しながら排列して進むのであるから、教材は其の部門毎に統括されて行く、従て前部門の學習事項を次の部門の學習に應用するに便である。然しなから此の排列法は、他教科目との連絡關係に於て満足されぬ點がある、特に理科との關係に於て然りである。圓周的の排列法にては、他教科目との已習事項に連絡せしめ得べき事項、例へば住居・衣服・食物等の或る部分を先づ排列し、他教科目教授の進行を待ちて再び住居・衣服・食物等の他の部分を排列することに成るから、連絡問題に於ては稍満足し得るが、各部門が最後に至らざるば統一を告げざるの不利がある。

高等小學校家事教材の排列 文部省發行家事教科書に依る家事教材の排列は茲に之を述ぶるまでも無く周知の事實である、依て他の一例として關西地方の某縣に於て調査研究したる排列を例示する。

高等小學校第一學年第一學期	
週	
教授題目	教 授 要 項
	地方化スルべき事項
	實習事項

一 緒論	(一)女子の務、(二)家事 學習の心得。	
二 衣服	(一)目的、(二)原料。	
三 同	(三)洗濯、(イ)乾式洗濯、 (ロ)濕式洗濯、(一般の方 法)	洗濯用劑、
四 同	(一)白木綿麻洗濯。	糊の製法。
五 白木綿麻洗濯	(二)同仕上。	白木綿の洗濯。
六 同	(一)單衣木綿の全洗。	木綿風呂敷前掛の全洗。
七 衣服の洗濯	(二)解洗、端縫方。	木綿單衣の全洗、 衣服の解方、端 縫方。
八 同	(三)簇張。	簇張。
九 同	(四)板張。	板張。
一〇 同	(一)洗濯、(二)仕上。	洗濯仕上。
一一 絹織物洗濯	(一)洗濯、(二)仕上。	洗濯仕上。
一二 毛織物洗濯	(一)方法、(二)理由。	黒インキ鐵錆汚 點拔。
一三 汚點拔		

高等小學第一學年第二學期	
一四 衣服の色揚	(一)染料、(二)染方。 地方により染料を斟酌す 色揚法。
一五 寢具	(一)夜着蒲團、(二)蚊帳。 寢具疊方、干方。
一六 總練習	
一 住居	(一)目的。 衛生上の改良點。
二 同	(二)選定、(イ)土地、 (ロ)家屋。
三 掃除	(一)屋内の掃除。 屋内の掃除。
四 同	(二)屋外の掃除。 屋外の掃除。
五 同	(三)便所の掃除。 便所の掃除。
六 疊建具の手入	(一)障子の張替、手入。 障子の張替。
七 同	(二)襖硝子戸、疊の手入。 硝子戸疊の手入。
八 木製器具の手入	(一)ワニス塗物手入。 ワニス塗物、艶 以物手入。

九 金屬器具の手入	(一)銅器の手入、(二)眞鍮器の手入、(三)火鉢、(四)ランプ提灯、(五)電燈、(六)傘、(七)蝙蝠傘の手入、(八)下駄靴の手入。	銅器眞鍮器の手入。電燈の手入、傘、蝙蝠傘の手入。下駄靴の手入。	
一〇 雑具の手入	(一)火災、(二)水害、(三)地震、(四)盗難、(五)借家心得、(六)轉宅心得。	非常時の心得は、地方によりて斟酌す。地方によりて必要なし。	
一一 非同	(一)火災、(二)水害、(三)地震、(四)盗難、(五)借家心得、(六)轉宅心得。	非常時の心得は、地方によりて斟酌す。地方によりて必要なし。	
一二 非常時の心得	(一)火災、(二)水害、(三)地震、(四)盗難、(五)借家心得、(六)轉宅心得。	非常時の心得は、地方によりて斟酌す。地方によりて必要なし。	
一三 借家轉宅の心得	(一)火災、(二)水害、(三)地震、(四)盗難、(五)借家心得、(六)轉宅心得。	非常時の心得は、地方によりて斟酌す。地方によりて必要なし。	
高等小學第一學年第三學期	一 看病の心得 二 藥用及び介抱 三 同 四 病人の衣食住 五 同	(一)看病の必要、(二)看病の心得 (一)藥用、(二)介抱。 (三)氷嚢、(四)バツプ及び濕布、(五)乾温、(六)嘔吐便通咳嗽。 (一)衣類の地質、(二)身體の清潔。 (三)病室の選擇、清潔、裝飾。	地方より實業に對する心得を授く。 檢温檢脈の方法 氷嚢バツプ温濕布使用。 寢衣敷布の取換

六 應急手當	(一)火傷、(二)發傷、(三)卒倒、(四)創傷出血、(五)中毒	繃帶法。 マツサージ。	
七 同	(一)火傷、(二)發傷、(三)卒倒、(四)創傷出血、(五)中毒	繃帶法。 マツサージ。	
八 マツサージ	(一)必要、(二)注意、(三)方法、(四)方法の續き。	マツサージ。 マツサージ。	
九 同	(一)必要、(二)注意、(三)方法、(四)方法の續き。	マツサージ。 マツサージ。	
高等小學第二學年第一學期	一 飲食物 二 同 三 割烹心得 四 同 五 野菜の切方煮方 六 白飯、野菜の煮方、煮方、切方。	(一)必要、(二)成分、(三)食品調味品、(四)調理の種類、(五)調理の目的。 (一)場所、(二)飲料水、(三)用具、(四)燃料、(五)順序。 同前の續き。 (一)各種野菜の切方及び煮方、(二)調味品使用法、(三)盛方。 (一)白飯炊方、移方盛方、(二)野菜燻方、煮方、切方。	飲料水は都市村落により斟酌す。 地方的材料を取る。
高等小學第二學年第一學期	一 飲食物 二 同 三 割烹心得 四 同 五 野菜の切方煮方 六 白飯、野菜の煮方、煮方、切方。	(一)必要、(二)成分、(三)食品調味品、(四)調理の種類、(五)調理の目的。 (一)場所、(二)飲料水、(三)用具、(四)燃料、(五)順序。 同前の續き。 (一)各種野菜の切方及び煮方、(二)調味品使用法、(三)盛方。 (一)白飯炊方、移方盛方、(二)野菜燻方、煮方、切方。	飲料水は都市村落により斟酌す。 地方的材料を取る。

七 麥飯、野菜和物	(一) 麥飯炊方、(二) 野菜和方。	丸麥、挽麥、壓麥等の地方的物。	麥飯炊方、和食物作方。
八 筍飯、味噌汁	(一) 筍飯炊方、(二) 味噌汁作方、(三) 味噌汁作方、豆腐切方。		筍飯炊方、味噌汁作方。
九 五目飯、澄汁	(一) 五目飯炊方、(二) 澄汁作方。	地方的材料を取る。	五目飯炊方、澄汁作方。
一〇 豆煮方、餡掛汁	(一) 豆煮方、(二) 餡掛汁作方。		豆煮方、餡掛汁作方。
一一 萩餅	(一) 萩餅炊方、(二) 餡作方。		萩餅の作り方。
一二 漬物、牛肉煮方	(一) 糠味噌漬、(二) 季節野菜漬、(三) 牛肉良否鑑別煮方。	地方的習慣を考慮す。	漬物漬方、牛肉煮方。
一三 魚拵方、煮方、焼方。	(一) 魚良否鑑別、(二) 魚拵方、(三) 煮方、(四) 焼方。	地方により海魚又は川魚とす。	魚拵方、煮方、焼方。
一四 茄子の鳴焼	(一) 油煮方、(二) 味噌作方、(三) 焼方。		茄子鳴焼作方。
一五 總練習			

高等小學 第二學年 第二學期

酢物類 (一) 酢物作方、(二) 麥麵作方。

酢物材料は地方的とす。

酢物作方、麥麵作方。

二 玉子料理	(一) 玉子鑑別、(二) 玉子焼、(三) 燻玉子、(四) 炒玉子、(五) 蒸玉子。	玉子料理。
三 日常食品	(一) 植物性食品、(二) 動物性食品。	
四 同	同前。	
五 同	同前。	
六 調味品	(一) 製法、(二) 成分、(三) 効用。	茶の入方。
七 嗜好品	(一) 種類、(二) 効用。	
八 保健食料	(一) 保健食料、(二) 消化率、(三) 滋養價。	
九 献立	(一) 混合の必要、(二) 献立上の注意。	献立の作製。
一〇 揚物、大根下シ	(一) 揚物、(二) 大根下シ	揚物作方、大根下シ作方。
一一 献立實習	飯、汁、深皿、小皿。	献立實習。
一二 病人の食物、離乳期前後の小兒の食物。	(一) 粥、(二) 重湯、(三) 葛湯、(四) スープ、(五) 牛熟卵。	粥、葛湯、スープ、牛熟卵の作方。
一三 食物の貯藏	(一) 腐敗の原因、(二) 貯藏法。	

第五章 家事教材の選擇と排列

一四	哺乳児の食物	(一)母乳、(二)牛乳、(三)比較、(四)哺乳上の注意、(五)哺乳器	地方により煉乳粉乳の使用法を授く。	哺乳器取扱法、洗滌法。
一五	同	同前の續き。	同前。	同前。

高等小學 第二學年 第三學期

一	小兒の衣服	(一)衣類、(二)襪襪。	衣服着方、襪襪付方。
二	小兒の疾病	(一)消化不良、(二)感冒、(三)百日咳、(四)肺炎、(五)デフテリア、(六)麻疹、(七)痘瘡。	感冒、百日咳の手當。
三	同	同前の續き。	同前。
四	小兒の躰方	(一)日常の躰方、(二)子守の注意、(三)玩具遊戯、(四)示範教材、(五)學校との連絡。	
五	同	同前の續き。	
六	一家の經濟	(一)豫算、(二)貯蓄、(三)買物、(四)家計簿記	地方的貯蓄法を授く。
七	同		簿記實習。

八	善良なる家庭	(一)主婦の心得、(二)老人の奉養、(三)純良なる家風、(四)一家の規律、(五)女子の天職。	
九	同	同前の續き。	

以上の教材細目中にて、教科書の教材の學期配當と教材其の物とを斟酌したるものを概括表示すると、左の如くである。

學年	學期	題目を附加したるもの	題目を削除したるもの	題目中に附加したる事項	題目中に削除したる事項	題目を変更したる事項
第一學期	緒論	毛織物及び絹織物の洗濯。衣服の色揚。	衣服の整理保存。	木綿、麻洗濯。乾式洗濯。漂白。白。	衣服の汚點。衣服の色合。衣服の汚點。	白布類の洗濯。木綿麻織物の洗濯。
第二學期	借家及び轉宅の心得。	住居の修理保存。石鹼洗及び灰手入。	掃除。建具の修理。往居の修。石鹼洗。灰手入。	木製器。白木物。	戸締及非常時の心得。	

第五章 家事教材の選擇と排列

服成は住居なる項目の下に學習する時は、只雜然として何等整理したる知識を得難いであらう、故に緒論として女子の務、家事學習の心得なる項目を附加し、先づ家事の何なるか又家事實習には如何なる心得を要するかを知らしめたる後に、他の事項を授くるのを適當だと考ふ。

(ロ)衣服整理の基礎知識を與へんが爲め、衣服の目的原料性質及び洗濯法の一般を授くる。
(ハ)白木綿及び白麻の洗濯に漂白及び白染を附加したのは、將來家庭の衣服整理上に改良を與へんが爲めである。

(ニ)近時物價騰貴し、洗濯仕上を洗濯屋に托すれば、相當の高價なる勞銀を拂はなければ成らぬ、故に洗濯法の實習を心得居ると否とは、一家の經濟にも相當の影響を及ぼすのである、故に是等の點をも考慮して絹物の洗濯仕上をも附加したのである。

(ホ)汚點扱は、外觀上及び保存上に影響する大切なる事項なれば、其の極めて普通なる、血・乳・鐵銹の汚點扱を附加した。

(ヘ)衣服の色扱は家庭にては最も必要である、かの褪色して使用に堪えざる布も、之を色

揚げする時は再び之を使用し得ることは、經濟上より見て極めて有効なることである、且染色は女兒の喜びて學習する教材なるが故に之を附加することにしたのである。

(ト)住居の修理保存、石鹼洗及び灰汁洗は、掃除上實際に必要を生ずること甚だ多く、又防臭劑及び消毒劑を使用することは、衛生上甚だ緊要なることなれば之を附加したのである
(チ)近時都市にては、電燈及びガス燈を用ふること非常に多し、故に之が取扱ひ法及び其の掃除法を附加するの必要がある。

(リ)借家及び轉宅の心得は、都市生活者の教材としては極めて必要なりと認めらる、故に之を附加したのである。

(ヌ)看病中、病人の介抱をなす際に、検温檢脈は、相並びて大切なることである、又嘔吐便通・咳嗽に對する心得も亦必要なりと信じ、之を附加した。

(ル)割烹教材中、麥飯野菜の和物、筍飯、五目飯、豆の煮方、餡掛汁、萩餅、茄子の鳴焼麵麩調理、揚物、大根下し等は基礎的代表的教材なるにより、之を附加した。

(ヲ)臺所の清潔、飲料水、用具取扱、燃料等は、割烹を學ぶものの極めて大切にして缺く

べからぶる事項である、故に之を附加することにした。

(ワ) 嬰兒の取扱中、負方は直接に必要な事項だから、之を附加した。

(カ) 小兒の衣服中、色合に關する事項は必要であると考へて之を附加した。

(ヨ) 小兒の疾病中、甚だ多いものは百日咳である、故に之を附加した。

(タ) 子供の躰方中で、極めて注意すべきは子守の選擇及び其の指導監督であると思ふ、故に之を附加することにした。

(レ) マッサージは、病人介抱上及び老人奉養上必要なことである、故に之を附加することにしたのである。

(二) 教材中にて削除したる事項の理由。

(イ) 衣服の色合及び保存法は、裁縫科に譲りて之を削除した。

(ロ) 住居の修繕保存及び石鹼洗灰汁洗は、掃除に關係することか多いから、之を掃除の項にて授くることにした。

(ハ) 木製器具の白木物及び塗物は、汚れ居らざるものを手入するよりは、使用後に手入す

るのが實際で興味があるから、是等は割烹後に實習させる爲め特別の項目を削除した。

(ニ) 金屬器、陶磁器、硝子器の手入も、同様の理由により項目を削除移轉した。

(ホ) 病人の衣食住中、食物に關する事項は、割烹の際に授くることにした。

(ヘ) 飲料水は、理科にて授く、然れども淨水法の必要な地方にては、家事中にて之を授くることをよしとする。

(ト) 離乳期前後の飲食物は、病人の飲食物と略同様なるを以て、病人の飲食物を授くる際に學習せしめる。

(チ) 染色布の汚點板は極めて困難である、又白色布の汚點の如くに目立たざるにより、之を授くることを省略したのである。

高等女學校家事教材の排列 高等女學校家事教材排列の一例として、奈良女子高等師

範學校家事科大正十年度卒業生が、教育實習中共同研究した排列案の要領を摘録する。

〔一〕緒論

〔二〕各論

(二)住居。(イ)目的、(ロ)掃除、屋内屋外、(ハ)家具の選擇及び手入、疊建具什器、(ニ)設備、屋内・屋外、(ホ)住居の選定及び構造、(ヘ)轉宅、(ト)修繕、(チ)保存、(リ)災害。

(三)被服。(イ)目的、(ロ)織物の原料及び種類、(ハ)衣服の選定、(ニ)洗濯及び仕上、(ホ)汚點板・原理方法、(ヘ)染色、染料・方法、(ト)附屬品、夜具等、(チ)被服の保存整理。

(三)食物。(イ)食物の必要、意義・人體の成分・必要、(ロ)榮養素、蛋白質・脂肪・炭水化物・鹽類・水・ビタミン、(ハ)食物の消化、吸收、(ニ)日常食品、動物性・植物性・礦物性、(ホ)嗜好品及び飲料、(ヘ)獻立、保健食糧、混食、獻立作製上の注意、(ト)調理、目的・注意・方法、燃料、(チ)食品の鑑別及び貯藏。

(四)看病。(イ)看病の必要、(ロ)看病人の心得、(ハ)醫師の招聘、選擇注意、(ニ)病人の衣食住、病室、病床、病衣、食物、(ホ)藥用、内用法・外用法、(ヘ)普通手當、病狀觀察介抱、(ト)應急手當、繃帶、人工呼吸、創傷處置、救急法、(チ)傳染病、種類・豫防・消毒法、(リ)危篤者及び死者の取扱方。

(五)育兒。

嬰兒期。(イ)嬰兒の取扱、入浴、臍帶、被服襁褓、睡眠、抱方、負方、寢方、(ロ)哺乳、天然榮食、母乳・乳母乳、人工榮養、牛乳・煉乳。混合榮養、(ハ)誕生、胎兒の保護、(ニ)生齒及び離乳。

幼兒期。(イ)運動及び遊戯、衣服睡眠、(ロ)玩具、(ハ)躰方、(ニ)小兒病。

少年少女期。就學及び青年時代。

(六)經濟。(イ)經濟の意義及び必要、(ロ)家庭と消費、(ハ)經濟の原則、(ニ)收入及び支出、(ホ)衣食住の經濟、(ヘ)貯蓄及び保險、(ト)家計整理、豫算決算、家計簿記。

(七)一家の管理。(イ)整理の方針、分擔、自治、協同、(ロ)整理の方法、年中行事、交際、雇人、國家社會に對する務、家庭日記。

尤もこの排列は指導教官の批判を経しものに非らざることを斷つて置く、著者自己の意見に依る排列は、已に其の著家事新教科書に依て具體的に發表してあるから、今之を再録することを省くことにする。

第六章 家事教材の學術的研究

第一節 家事教材の自然科學的研究

自然科學研究法の本領 自然科學が、其の研究の方法上に於て特色とし本領とする所は、(イ)實驗、(ロ)觀察、(ハ)考察、(ニ)立證、(ホ)客觀的發表、なる五段の過程を踏み、直觀的事實に基礎を置きて進み行くことである。

(イ)實驗。自然物及び自然現象は、隨所に隨時に二ツ以上相伴ふて常に複雑なる形をなして失現する。故に研究の目的に適せんとせば、適當なる器械裝置と勞力とを費やして、適所に適時に單一なる形と成して、適當なる速さを以て現象を出現させなければ成らぬ、之れ即ち實驗の必要なる理由である。而して自然現象に關する事項の研究に實驗を適用するには、豫め目的の現象に關する系内の變化を考察して、問題の解決に必要な幾かの條件を假定する、次に其の條件を系統的に一ツ宛入れ換へながら秩序的に實驗して、出現する現象の結果を觀察することである。かの無定案の下に何等の系統も秩序も無く實驗をなすが如きは、

よしや偶然の發見に遭遇することあるにもせよ、科學的研究法としては必然的のものには非ずして、不成功の結果に到着するものなるが故に禁物である。

(ロ)觀察。自然現象を無意識的に見聞することを經驗と云ひ、特に研究せんが爲めに注意して見聞することを觀察と云ふのである。研究上に用ふる觀察は主として實驗に基く現象を對象とするもので、實驗を爲すは觀察せんが爲めである。觀察は公平無私にして私心を挟まず、有りの儘にして、強いて或結果を要求しては成らぬ。

(ハ)考察。歸納又は演繹推理に依るものにして、觀察事項を比較し、或は分解し或は綜合して共通せる事實を抽象し概括するか、若しくは已に抽象し概括せる概念又は理法より事實を演繹解釋する。此の心的過程が即ち考察にして、この考察は必ず實驗的觀察事項即ち直觀事項に基礎を置くか、或は之より導かれたる概念に基礎を置かなければ成らぬ。

(ニ)立證。考察の結果到達したる結論は即ち立證である、立證には直觀的事實より出發して抽象的概念に到着する歸納的證明と、抽象的概念より出發して個々の具體的事實の説明に到着する演繹的證明とがある。前者は主として基本科學の研究的態度にして、後者は主とし

で應用科學の研究的態度である。然らば即ち家事研究は應用科學の研究的態度を持ち、演繹的立證法を以て進むべきものである。

(木)客觀的發表。科學的研究の結果は之を客觀的に發表することに努めねば成らぬ。若し然らずして主觀的に會得し居るのみにして、之を言語文章に發表するに非ずんば、兒童の學習を指導し或は世の文化を開發し以後世子孫に残すことは出来ぬ。然るに技術に關する事項は、斯道の名工達人と稱せらるる人にも、多くは其の技術上のテクニクを主觀的に會得し居るのみにして、其の技術的結果を必然に到來せしむべき諸條件を客觀的に會得し居らぬことが多い。之れ古來名匠の優秀なる技術が、其の人の死と共に滅亡して後世に傳はらざりし所以である。故に家事教師たるものは、其の子弟を指導學習せしむる爲めには、先づ教師自身は其の教材に關する學術的研究の結果を、客觀的に發表することに努力せなければ成らぬ。

理論的方面の研究 之れには二ツの方面がある、其の一は基礎學の理論を研究することである。茲に基礎學と稱するのは、先に『第四章第一節家事の對象』を述ぶる時に述べたり

し、土木學、建築學、機械學、製造學、農學、美術工藝、經濟學、社會學、法律學、心理學、教育學、道德學、倫理學、哲學等を指すのである。是等の主要なる基礎學の原理を理解するに非ざれば、今後に於ける家事科を組織づけて科學的研究を爲すことは不可能である。

他の一は、基礎學の原理より出發して、當面の家事問題に演繹したる理論の研究である。かの家事物理學、家事化學、食物化學、燃料論、衣服哲學等と稱する如きは即ちそれである。世の家事教師中には、時とすると普通に理論と稱するものを、技術上の順序・材料・分量及び操作の解説其の物を意味せしめ居る場合があるが、それは理論では無い過程の案内である。吾人の理論と稱するものは、其の過程案内の正に然らざるべからざる所以の理由を指すものである。此の理論研究は、吾人の先輩の研究に成る著述の恩惠に依るの外、教師自身の自己研究に依らなければ成らぬものである。

實驗的方面の研究 科學的研究は、其の過程が歸納的なるにもせよ演繹的なるにもせよ、事實に基礎を置かねば成らぬ、事實の基礎は實驗に訴ふることによりて始めて捕捉することが出来る、故に家事教材の研究には實驗の伴なはざるべからざる理由は明瞭である。

實驗には發見的のものと證明的のものとの二種がある、前者は歸納推理の資料蒐集として用ひられ後者は演繹推理の結論の證明として用ひられる、家事研究は主として演繹的なるが故に證明的實驗を利用する機会が多いが、歸納推理を利用する場合も決して少なくは無いから、是等の實驗を併用することを心掛けなくては成らぬ。

實驗は其の證明的なると發見的なるとを問はず、其の方法は物理化學實驗装置と方法とを用ひ、或る事項は定性的に或る他の事項は定量的に行ふのである。故に家事教師は、基礎科學研究の際の實驗法に熟練したる手腕を有して居らなければ成らぬ、而して其の過程は、問題解決に關與する條件を系統的に一ツ宛入れ換へつゝ秩序的に進むべきであることは、先に科學研究の本領に關して述べた通りである。

實習的方面の研究 家事は家庭の實務なるが故に實習を伴ふのは當然のことである、而して其の教師たるものは、單に實習的技術の過程を経験せるのみで無く、技術的技巧に一定度の熟達を要すべきことは殆ど議論の餘地を残さざる處である。最も家事的實務は藝術では無いから、専門藝術家の技藝練習とは其の目的を異にし、實用上の要求よりするものである

から、徒らに藝術的技巧の末のみに走つて其の原理や原理應用の考察能力を忘れては成らぬ。故に器械力を借り得べきことは飽くまでも之を利用することである、例へばかの裁縫に於て手縫の技術の巧巧さを誇りてミシン機械を排斥するが如き類は、文化生活上吾人の敢て採らざる所であるからである。

産業的方面の研究 家事教材は更に産業的方面より之を研究するの必要がある、農蠶業・牧畜業・林業・漁業・物理工業・化學工業等に關する各種の産業は、其の製産物を衣食住の資料として家庭が之を需要するから、其の一般を知ること、獨り其等資料の由來を知悉し得る許りで無く、其の品質の良否の鑑別並に正當なる用法・手入法・保存法等を知悉し得らるるからである。世には家事的實務は、社會的産業と異なるが故に、之を學び之を知るの必要なしと考へ、産業上の製造技巧を參酌し、其の長を取つて家事に應用することを爲さず、偶々之を爲すものを評して家事の産業化とか或は工業化なりとして排斥するの狹量にして且近眼なるの教師なきに非らざるは嘆かはしきの限りである。

産業的方面の研究法としては、當該圖書によりて豫備知識を蓄へたる後、實地に産業工場

等を見學することである。見學の機會は、(イ)同志連合の見學旅行、(ロ)他の目的にての旅
行先にての機會、(ハ)生徒引卒の修學旅行の機會、(ニ)居住地に於ける隨時の參觀等である

第二節 生活改善資料の研究

改善資料研究の必要 文化の發達に伴ふて、吾人生活の各方面は次第に改善されねば
成らぬことは、上來暫々述べ來れるが如くである。然るに現在に於ける小學校教育に用ふる
家事教材は、其の教授要旨にも明らかなるが如く、家事上最も普通なる知識を附與するにあ
るを以て、其の種類及び内容は、共に我が國の一般家庭生活に普遍にして且普通なるもので
あるべきである。詳言すれば、其の種類は地方に偏せざるもの或る特殊の家庭に偏せざるも
のを選定し、其の内容は民族的習慣に適合せるものなるべきである。

然るに文化の伸展は生活の方法を改善すべく要求し來つて居る、而して其の改善の原則は
時と物とエネルギーとの節約利用にありて存し、其の節約利用は科學的知識の應用を外にし
て他に求むることが出來ぬのである。かの社會の一般工業の如きも、經驗的に發達し來れる
家内手工業より次第に學術的に發達した科學工場的機械工業に移るに至つて、其の製品の品

質産額等に偉大なる改良進歩を見るに至つたのである。然らば即ち家庭生活上必要にして缺
くべからざる家事操作も亦過去の習慣と傳統との捕はれから脱出して科學的に移り、以て時
と物とエネルギーとを節約利用し得る方法を研究し、之に伴ふ機械器具並に社會分業施設又
は生産業等を巧妙に利用する様にするには、家庭生活の改善上極めて必要なることだと言
はねば成らぬ。之れ家事教授上に於て、過去に於ける普通の習慣的な家事整理の方法に甘ん
ずることなくして、進んで改善資料を研究し、之を教授上に適用して所謂地方家庭の善導を
成さねばならぬ所以である。今次に、改善資料に關して其の數例を述べる。

住居の改善資料 東京に本部を置ける生活改善同盟會は、斯道の士を委員として調査し
た結果に成れる改善事項を基礎として、茲に其の要點を摘録することは、家事教授上の參考
資料として當を得たものだと思ふ。

(イ)住宅は漸次椅子式に改めること。座式に依る住宅は、其の整理に時間を浪費し、仕事
の能率を低下するのみで無く、衛生上の不利も亦少くは無い、殊に近時に於ける一般生活法
の變化に伴はざるが爲め、所謂二重生活を餘儀なくするの事實は、比々として其の實例を見

る所である。かの椅子式は、現今世界共通の生活形式にして、經濟上・活動上及び衛生上幾多の長所を有する。今吾人が急に椅子式を採用することは、永年親しみ來れる習慣を捨つることにして、住居の特有なる趣味を全く奪はるるの感なきに非らざるも、諸般の生活方法の改善は、獨り住居の座式のみを永く残すことは出來まい。

さればとて、從來の家屋を全部破壊して新に椅子式家屋を建築することは經濟的事情の許さざるものがある、依て過渡期の方法として從來の家屋の一部だけでも之を改造又は設備換へをなして椅子式にするるとよい。此目的の爲めに、如何なる室を如何に改造し或は設備換へをすべきかは、土地の情況稼業の種類趣味等によりて異なるべきである。依て家事教師は其の土地其の家其の稼業等に應じて適當なるものの何なるかを研究し、教授指導の資料と爲さねば成らぬのである。

(ロ)住宅の間取及び設備は在來の接客本位を家族本位に改めること。本邦從來の住宅の間取及び設備は、徒らに形式をのみ過重視して接客の便宜をのみ考へ、家族生活の便宜を輕視して居る、故に將來眞に意義ある生活を營爲せんとするには、先づ家族本位の室を主とし、

客室を従とするの主義に基き、接客本位の多年の因襲から脱して家族生活を愉快にし、常に清新の氣を漂はせることを主眼として、出來得るだけ便利にして且衛生的經濟的審美的な間取と設備とをすることに、一層力を用ひなければ成らぬ。

(ハ)住宅の構造及び材料は、虚飾を避け衛生防災等の實用に重きを置くこと。從來の住宅構造は、徒らに舊慣の形式を墨守し、科學の應用を閑却し、妄に工作を繁瑣にし、或は無用の部分に美材を使用する等虚飾に偏する嫌がある。故に今後は、舊慣による形式を排し、自由なる工夫と清新の趣味とに着眼して、虚飾と浪費とを避けて文化の發達に添はなければ成らぬ。同時に從來の住宅が外觀虚飾に偏した結果實用を閑却した傾がある、故に防寒・防暑・耐火・耐震・耐水・耐腐及び盜難豫防並に保健衛生に適する構造及び材料等に注意し、住居の安慰に努むることを要する。

(ニ)家具は簡便堅牢を旨とし住宅の改善に準ずること。家具什器は、之を種類上より云へば非實用的なる物も少くない、之を數量上より云へば其の數極めて多い、之を構造品質上より云へば不格構にして脆弱粗惡なる物が少くない。故に使用目的に適せしめ、外形の調和を

保ち、構造を堅牢にし、品質を向上すること等を改善条件として之を工夫し、家庭生活上に於ける時物及びエネルギーの節約利用の實績を擧げ得る様に爲さねば成らぬ。

衣服の改善資料 我か國在來の衣服は、靜的趣味に長じて居て休養服としてはよいが、動的趣味に短にして活動に不便であることは世人の等しく認めて居る所である、而して其の改良は住居と相關的のものであることに注意を要する。今生活改善同盟會が調査した結果を参照して、其の改善方針を述べると、凡て左の如くである。

(イ) 日常服は男女共に漸次衣袴式に改めること。衣袴の制は男女共に世界共通のものにして、理論上よりも衣服として最も當を得たるものである。故に衣と袴とを分ち、男子服は衣は筒袖とし袴は兩脚を分ちて細くすることを要件とし、女子服も亦之に準じ、容儀衛生便利經濟等の諸點より、適當に改善せなくては成らぬ。

男子は現今其の公的生活に於ては、殆ど衣袴式の洋服を着用し、和服は私宅内に於ける休養服として用ふるの觀がある。女子は男子と同様に洋服を用ふることは、未だ俄に出來難き事情があるが、生活々動の必要は遂に女子をして、男子が履み來れると同一道程を衣服に關

して履ましむるであらう。

(ロ) 過渡期に於ては、少くとも男子の活動服は衣袴式とし、女子の日常服は短袂狹帶にすること。衣袴式は理想だとしても、過渡期に於ては全部之を改め難きにより、少くとも男子の活動服は衣袴式に改めたい、かの從來の洋服・法被・股引の類は即ち衣袴式であるが、住居を衣袴式に改善せざる限りは、私宅内に於ても之を用ふることは出來難いことである、故に持ち合せの和服を私宅用として着るもよい。

女子服も衣袴式に改めるまでの道程として、先づ袂を短くし帶幅を狭くし、成るべくは袴を用ひて衣服の身丈を短くし、且洋式下着を着用したい。

(ハ) 子供服は成るべく洋服にすること。子供は特に活動性に富むものなるにより、成るべく自然性を任せずに育てたい、この點から我が國の子供服は不適當である。又我が國人は、一子供の衣服を大人の賞翫の爲めに華美なる物を着用せしむる傾がある、この點からも我が國の子供服の不適當なることは歎すべきである。故に之を實用的衛生的活動的な洋服に改むることは、極めて急を告ぐることである。

(二)裁方は、傳統的形式に拘泥すること無く、縫方は早縫法を工夫採用すること。男子の休養服とし、又女子服として従來の和服或は短袂狹帶の和服を用ふるとしても、裁方を一層自由にし、セルでもネルでも大幅長尺物を、體格の如何により必要だけの長さを切買して使用することに改めたい。並巾反賣の着尺物は、此點に於て不經濟である。又縫方は出來得る限りミシン機等を利用して、早縫法を實行することである。

(ホ)地質は衛生的耐久的なる物を選び、衣服整理上の手数を減少すること。我が國に於ては、昔時は女子の勞力と時間とは甚しく廉價であつた爲め、衣服經濟は、其の原料は脆弱でも安價なる物を用ひ、頻回の洗濯仕立換を施して僅に經濟を維持して來たものである。然るに現今に於ては、女子の勞力時間は昔日の如く廉價では無い、それだのに尙昔日の如く脆弱短命な材料を用ひ、其の整理に多くの手数を掛けるといふことは、衣類經濟の根本方針を誤れるものである。依て今後の衣服は、其の原料は成る可く衛生的であると同時に耐久的なるものを選定して、容易に變色せず破綻等を來たさざる物を用ひて、多くの洗濯仕立換等を避け得る様にするこゝである。

(ハ)着付を簡易にすること。和服は身體の形態に適合して居らぬ、故に同一寸法の仕立にて如何なる體格の人にも適合するやうに着付けせしむることが出来る、其の結果として帶紐等にて身體の各部を幾重にも緊縛する、特に女子の着付に於て然りである、従て衛生上の危害を受くること大なるのみで無く、着付に多くの時間と勞力とを要するのである、依て之を簡易にし、而かも着崩れを防ぎ得る様に工夫改善することが必要である。

食物の改善資料 食物營養に關する研究は、輒近に於て著しく進歩して來た結果、食品の選擇料理等に改善を要する多くの事項を招致したのである。殊に我が國の食物の如く、先進國に比して科學的發達を遂げ居らぬ場合に於て然りである、況んや近代に於ける生活上の要求が、次第に社會的意義を帯び來れるに於ては尙更の事である。

(イ)食品の選擇を營養本位にすること。我が國從來の食品の選擇は、營養分に關して多くの注意を拂はなかつたのである、之れ此方面の知識の缺乏に依ることが其の主要なる原因であつたであらう。然るに現今では教育學術の發達普及に伴ふて、日進の學術を日々の生活に應用するに至つたのであるから、營養本位の標準を以て食品を選擇し、出來得るだけ廉價

にして、出來得るだけ少量にして、而かも所要の營養効果を收め得る様な選定法を實現することを要求して止まぬ。

此の方面に關して、特に注意を要することは、第一は蛋白質問題にして、其の構成成分たるヒッシャー氏の所謂アミノ酸の種類を異にする所のポリペプチドより成る各種の蛋白質を攝取する様にし、且トーマス氏の所謂生物學的營養直價の大なる種類のものを選定すればよい。第二は無機鹽類問題にして、過去の時代には自然に食品に伴ふものとして、特に注意を拂はなかつたのであるが、現今の營養學から云へば、鹽類の成分として、ナトリウム・カリウム・カルシウム・マグネシウム・鐵・鹽素等の必要量を含むし、而かも食物全體としては成鹽基性元素量が成酸性元素量に超過し、所謂其のアルカリテートの陽性なるべきことを要求する。第三はビタミン問題にして、人體の生長促進及び病的症狀發生の豫防をなし、健康調節上に特殊の作用を營爲するものと見做されて居る、從て其の種類・分布・性質等の一般を知悉して食品を選擇することは、一家數人の健康を保證し増進する上に極めて大切なことである。

斯くの如くなるが故に、家事教師は家事教授に先立ちて、教授資料としての精細確實なる研究を遂げ、以て食物改良の實を擧ぐる爲めの明瞭的確な知見を持つて居ることを要する、かくてこそ其の學習指導が、始めて有効なるものと成る譯である。

(口)食品の配合を合法的ならしめること。食品の配合即ち献立上の食素の種類及び分量に關しては種々の標準量がある、獨人フォイト氏の標準保健食量を始めとし、英人ブローフェーア氏佛人カユテー氏米人アトウォーター氏及びチッテンデン氏の保健食量がそれであり、又我が國の田原博士のそれも亦標準保健食量として用ひ居るものである。

是等の標準量を通覽しても知らるるが如く、保健食量は性別・年齢・體格・活動度・氣候及び習慣等に依て相違すべきもので、其の標準を一定することは出來ず又一定すべきものは無い。特に現今の學說に於ては、蛋白質の最小價なるものに於て然りである。然しながら叙上の各氏の研究に依て、吾人の據るべき大體の標準を見出すことは出來る。

然らば、各家庭に於て、食品を配合し献立を作製する上に、其の營養素の種類及び分量等は、右の所說に大様に合致すべく爲すことは、現今の學術に於て比較的依據すべき事實で無

ければ成らぬ。かの習慣上より、稍もすれば食物の配合とし云はゞ、海産物と陸産物との配合や、形状色澤の配合や、形式上の皿數品數等の配合にのみ拘泥するが如きは、無用事として之を改良すべきものである。

(ハ)料理の方法は、栄養價を低落せしめざる様にし、且食品本來の風味を維持すること。我が國舊來の食物料理は、一般に栄養分の損失に無頓着にして、風味にのみ重きを置いた傾向があり、且其の風味なるものは食品固有の物には非ずして、多くは調味料に依る附味に過ぎない場合が多い。依て今後の料理研究の主眼點は、栄養分の損失を小ならしむること、及び食品固有の風味を維持し發揮することに有りて存すると思ふ。

(ニ)食事法を簡易にすること。我が國の家庭では、夫々に獨立した臺所を設備し、食物は其の原料食品を購入し、毎日毎食必ず各戸獨立の料理を施して、所謂自給自足の食物生活を爲し居るのである。従て食品の購入・獻立・下拵・料理・配膳・後始末等に多大の時間と勞力を費すのみならず、費用上より見ても不經濟なることが少く無いのである。依て今後は出來得るだけ食品は或る程度までの加工品を臺所に購入し、些少の勞力を加へなば直に食し

得る様な方策を採ることが必要である。この方針から見ると、かの社會分業者より加工食品の供給を仰ぐが如きも有効なる一法である、例令ばパン屋より食パンの配達を受くるとか、饅頭屋より饅頭の配達を受けるが如きである、同様の意味に於て社會施設の利用として簡易食堂等を善用するのもよい譯である。要するに文化の發達に伴ひ、種々の社會分業社會施設等を家庭生活に利用し、昔時の孤立的自給自足主義の家庭生活を排斥するの勇敢さが無ければ成らぬのである。

一家管理の改善資料 一家の經營を科學的にし、其の生活能率を向上する爲めに、家庭管理の改善資料として、家事教授が研究すべき事項は、左の如くであると思ふ。

(イ)秩序を立つること。一家の日常行事を、必然的に秩序づけることである。行事と稱するのは、毎日毎週繰返して起り來たる家事的仕事を指すものにして、必然的秩序と稱するのは、生活要求上正に然るべき順序である、即ち『ねば成らぬ』の順序を指すものである。

さて、此の意味に於て毎日行事毎週行事毎月行事及び毎年行事を始めとし、特別行事等を豫定し置きて、其の順序を追ふて規律立ちて家事を整理して行くことである。かの社會事情

が簡單であつた爲めに、生活が時間的にも物質的にも餘裕のありし時代の如く、家事を偶發的突發的の都合主義を以て處理し行くが如きは、現代文化に適應する所以で無い。

(口)分擔すること。秩序を定めたならば、次に家人は適當に其の行事を分擔することである、茲に適當にと稱するは、男女の性別により年齢の長幼により、又公的職業の有無種類により或は身體の健否の度により、若しくは其の人の才能の長短等に依て己に適する仕事を分擔するの意味である。

元來一家は主婦のみの一家には非ず、家人の共同のものである、故に家事は主婦のみに依て一切を爲さるべきでは無い、唯主婦は之を主宰し且其の大部分を分擔すべきではあるが、而かも家人は各其の宜しきに從つて之を分擔すべきは當然である、この點に於て今後の家庭管理は、教材内容を研究工夫して改善の實を擧げなくては成らぬ。

(ハ)自治をすること。己に家人が家事を分擔した以上は、其の分擔範圍の事項は分擔者に自治せしむるがよい。何となれば、家事を分擔しても尙且主婦が一々之を指揮し命令するに於ては、煩瑣を避け能率を増大すること能はざるべきである。この點に於ても過去の家事整理

理法は無定案であつたと云へる、故に教授者は教材内容の研究工夫によりて改善するを要する。

之を要するに、自然科学的方面より家事の改善資料を研究するには、單に科學上家事整理の技術的テクニックを改善するに止まらず、社會生活との交渉をも考慮し、出來得る丈け家庭生活を簡易にし安慰にし且有効ならしむべき方向に進ましむることである。故に家事教師は教法に就て研究するに先立ち、教材内容の研究にも亦没頭せなければ成らぬ、之れ家事教授の効果を大ならしむる原因の一ツなるが故である。

第三節 家事教材主眼點の研究

主眼點把握の必要 教材の主眼點把握の必要を教授の實質的目的より考察すると、其の知識及び技能を確實に理會させ、其の教材に關する概念を正確に構成をする爲めの學習指導上極めて大切だと云ひ得る。何となれば、主眼點は其の教材の骨子となる點であるから、概念構成上の骨格たるべきものだからである。從て教師は教材を取扱ふ以前に、其の教材に關する知識及び技術が、何々の幾ツの要件から成立して居るか、而して其の幾ツかの要件中の

何れを以て主眼點とし、何れを以て副次點とするかを明瞭に決定し置かなければ成らぬ。此の見地から云へば、普通の有りふるる家事教科書の如く、教材に關する知識を漫然として文學書の如く書き併べ、何等の科學的整理を施して居らぬが如きは、不備なるの甚だしきものだといふべきである。

以上は、知識技能の獲得其の物を目的とせる所謂實質的目的に就ての所論であるが、教授上の他の目的即ち形式的目的のからいへば果して何うであるか、教授者は教材の取扱上實質陶冶を追求すると同時に、之に伴ふ意識活動の形式的能力練磨を期待する以上は、この問題に關しても豫め考慮を費して置かねば成らぬ。

形式的目的に關して吾人の考慮すべき問題は分ちて二ツと爲すことが出来るのである、其の一は觀察推理判斷又は想像の如き意識能力を、家事教材に關して充分に練磨して置くべきことで、他教科に依る練磨に待つべきでは無いといふ事である。

蓋意識的能力を他の或教科目例へば理科なり數學なりの教授にて充分に練磨し置く時は、他の凡ての場合例へば家事問題に遭遇しても亦敏捷確實に其の意義能力を働かせ得るものだ

と考へたのは、過去の教育説の誤りである。何となれば家事を修めて形式的訓練を受けし者は、衣食住等に關する意識能力こそ明瞭確實であれ、他の總ての問題に關する能力は明瞭正確だと云ふことは出来ぬものである。時としては却て他の問題に關しては不明であり獨斷的であることすら決して少なく無いのである。かの過去に於ける多くの教育説の誤解は、素質と經驗との混同より來れるものである、例へば茲に一人の家事研究者があつて、家事以外の問題に對しても極めて敏捷正確なる推理判斷を下すとす、然してこの事實は其の人の素質の然らしむるものであつて、之を以て家事研究の形式的賜物だとするのは不當であつて、決して萬人一様に望むべからざる事實である、之れ即ち素質にして經驗にあらざるが故である、即ち家事の形式的訓練は、家事教授内容に就て行ふのであるから、其の内容を離れたる他の世界に立ちても同様に役立つことの望み難きは當然である、茲に地の世界と稱するは家事問題以外の場合を指したるものであるから、等しく家事の世界に屬するものなる限りは、其の教材以外に於ても其の能力活動の明確なるべきは又當然の可能事である。故に吾人は多方面に向つて敏にして正なるべき能力活動を期待せんとせば、多方面の教材につきて形式的練磨

を遂げしめなければ成らぬ譯である。之れ普通教育に於て各教科を分立させることの必要が理由の一つである。

他の一は、形式陶冶上を意識活動の全過程を尊重すべきか、又過程上の或要素を尊重すべきかの問題である。現今の教育説では、能力過程を分解して其の或一要素をのみ見ることが許されぬ、詳言すれば推理とか判断とかの一能力のみを引離して尊重し、之をのみ練磨するといふことは現今の教育學説と相容れないのである。何となれば能力の練磨は意義活動の一部分に價值あるものでは無く、其の全過程を綜合して有機的に考察したる時の全意識活動の構成價値を尊重すべきだからである。この構成の過程中には、或部分では觀察の主となることがあり、或部分では推理の主となることあり、或他の部分では判断の主となることあるのは當然であるから、現今の學説にては過程中の一要素を度外視するのでは無いが、是等の要素の錯綜して有機的に構成された活動の總和の上に目的の尊重を置かねば成らぬ。

以上述べ來れることを回顧すると、教授上實質陶冶の目的から云へば、教材の知識技能中特に或要素につきて主眼點を研究決定し置きて、概念構成上の中心骨格を附與する様に努力

すべく。形式陶冶の目的から云へば、意識活動の全過程が價值本體であるから、特に過程中の或要素のみを選定して主眼點とすべきでは無いといふ結論に到着して居る。

教材の種類と主眼點の相違

教材の主眼點は實質的目的上の或要素に求むべしとしても、其の主眼點と成るべき要素は教材の種類に依つて異なるべきは當然の事である、從て教材の取扱上其の何れの點を主眼點とし、何れの點を副次點とすべきかは、個々の教材に就きて研究決定すべきものにして、豫め之を概言することは出來ぬ。

教材の種類異なるに依りて何れの要素を主眼點とするかの實際の問題を例示するに先立ち、教材取扱上其の教材の實質的知識と形式的能力との何れの陶冶を以て當面の目的とするかに就て論定するの必要がある。何となれば、實質主義者は前者を以て當面の目的だと論じ、形式主義者は後者を以て教授上の目的だと争ひ居るからである。然らば其の何れを以て當面の直接目的となすを正當なりとすべきか、蓋教授の目的とする所は、其の教材の實質的目的の上に立つものであるから、知識の獲得といふことが當面の直接目的であり直接の任務で無ければ成らぬのである。彼の教授要目や教授細目が、知識を題目として教材を示して居るの

は即ちそれを證するものである、若しそれ形式的目的を以て當面の直接目的とし直接任務とするならば、教授要目上又は教授細目上の題目は、意識活動を表はす題目を採つて、觀察教材、推理教材、判斷教材等の如く成つて表はれなければ成らぬ。かくの如きは爲し得べきで無く、又爲すべからずである。即ち知識の獲得には意識活動の能力作用を要するが故に、知識の獲得其の物に依て意識能力の練磨を成し得るのである。生物進化論の證明する所に依ると一器官の發達は之を使用するの一途あるのみである、從て知識獲得による全意識活動に依て、始めて形式的能力の練磨と發達とが成し遂げ得らるる譯では無からうか。

斯くの如くなるが故に、教授上吾人が當面の直接目的とする所ものは實質的陶冶の知識でなつて、形式的陶冶の目的は間接のものであると結論しなくては成らぬ。

直接の目的と間接の目的とは輕重の問題では無い、世人稍もすると直接の目的は重く間接の目的は輕きものの如く思考するかも知れぬ。然しながら、それは實際の教授に於て一方を重視し他方を輕視することが出來、又實際に往々にして斯くの如く誤られたる教授のあるのみで、目的其の物の本質では無い。之を本質より云へば、知識の實質を離れて形式的陶冶

をなすこと能はず、形式の能力活動なくして知識の實質を獲得することが出來ぬ。故にこの兩者は車の兩輪の如く鳥の兩翼の如く、互に相離るべからざるの關係にあるものにして、輕重の差を論すべきものではない。

實際の教授を爲すに方りて特に注意すべきことは、過去の時代に於ては、總ての教授は兎角實質的目的にのみ拘束され、形式的目的を度外視され勝ちであつた、特に教法に於て進歩の度の幼稚でありし家事教授に於て然りであつたことである。故に今後の家事教授は、更に一層形式的陶冶を重要視して、過去の缺陷を補ふの必要がある。

住居の一例 文部省發行家事教科書第一學年第一課「住居」を例に採ると、本課は二教時で住居の目的住所の選定及び家屋の用法の三項に關して學習させる豫定に成つて居る。先づ第一に研究すべきことは、是等の三項中何れを以て主眼點とし何れを以て副次點とするかである、此問題の解決を二つの立場から論じ得る、其の一は科學教育主義の立場から見たもので、他の一は自由教育主義の立場から見たものである。前者の見解に依ると、教材内容を科學的に系統的に見るべきだから、其の知識系の基礎的要素が主眼點と成る、即ち住居の目的

が主眼點で住所の選定、家屋の用法は副次點と成る、何となれば住居の目的が正當に理會され居らば、其の目的の表現形式たる住所の選定及び家屋の用法は、時と所と人との宜しきに從つて之を爲し得る譯だからである。後者の見解に依ると、教育即ち生活論であるから現在の教育活動は現在の生活其の物を有意義ならしむる爲めのものである、従つて兒童期に施す教育は兒童の生活を完成する所以のものであつて、次期の生活準備或は後年の生活準備の爲めに施すものではないのである。然らば即ち家事科に於て教へんとする理法概念の何なるにもせよ、兒童其の物の生活が教材であつて、其の教材に依て授けんとする理法概念が理會されなければ成らぬ、大人成女の生活中より教材を探り取つて之を兒童少女に強ふるのは普通教育上生活の理性化を實現し得る所以で無い。斯く現在の生活其の物が教材となり、之を取扱ふ活動が教育であるとするならば、兒童の學習對象は、心身の環境に顧みて之に求めしめなければ成らぬ。

此の見解を住居の目的住所の選定家屋の用法の三項に適用すると、第三項なる家屋の各室の用法は兒童の教材として最も適當なりと云へる、兒童は家屋内に於て家人と共に家庭生活

を營爲し居る以上は、兒童も家人も共に其處に寢食をなし居るのである、従て其の生活活動に對し家屋各室の性質設備の如何による用法の適否を、自己への接觸問題として思考することが出來、又當然思考せなければ成らぬ問題である。依て家屋の用法を主眼點とするを可とする、他の事項即ち住居の目的住所の選定は之を副次點として取扱ふか、或は後年の教育に讓るをよしとする。

以上は住居の教材の二項に就て何れを主とし何れを副とするかに就て述べたのであるが、次に起る問題は其の『家屋用法』中に於て、更に其の内容中何れの要素を以て主眼點とするかである。さて教授要領を見ると、家屋の用法なる項目中に指示してある教授事項は、左の三つである。

(イ)間數・廣・間取と、家人數・職業との關係。

(ロ)職業生活上より見たる家屋の各室。

(ハ)家族生活上より見たる家屋の各室。

而して第三項に關しては、更に左の七項を掲げてある。

(イ)居間。即ち家人常住の室。

(ロ)押入。即ち家具什器を入れ置く場所。

(ハ)玄關。即ち出入口。

(ニ)客室。即ち客に應接する場所。

(ホ)臺所。即ち食物を料理する場所。

(ヘ)浴室洗面所。即ち身體を清洗にする場所。

(ト)便所。即ち不淨の場所。

家事は家人の家族生活上必要な事項を學習するものであつて、職業生活としての問題では無い、農家に於ける農業施設、商家に於ける商業施設、工業家に於ける工業施設等は、家事科以外に職業教育が將來の職業として生活準備の爲めに取扱ふべきものである。従て大なる都市に於ける實業生活者にありては、家庭生活の家屋を職業生活の家屋とは全然區別されべきである。例へば職業生活を爲す商店は都市の中央部に設置し、家族生活をなす家屋は都市内の閑靜なる部分か或は郊外に設置すの類である。

若しそれ現實の狀態に於て、一家屋内にて職業生活と家族生活との兩面生活を爲すもの多しとするならば、それは原始的な生活狀態若しくは過渡期に於ける生活狀態の片影を残せるものであつて、表面の室を商業用として陳列販賣に使用し、裏面の室を家族生活に使用するの類である。かかる場合に於ては、家事は家族生活の裏面の各室のみを取扱ふべきであつて、表面の營業室には無關係なるべきものである。従て斯種の場合に於ては、兒童の生活は裏面の各室に親しむものにして、表面の職業生活に無關係なのは普通であり當然である、蓋家事は家族生活上の問題のみを取扱ふのか自明の事實だからである。故にこの場合の家事は、家族の一人としての自己を發見させ、家族の一人としての自己を成長させ、家族の一人としての自己を完成させるが爲めに、其の學習活動を指導すればよい、之れ前記の(イ)(ロ)(ハ)の三項中、家族生活上より見たる各室なる(ハ)の項目を以て主眼點となすべしとの結論に到着する所以である。

更に一步を進めて、家族生活の各室中にて、其の何れを取つて主眼點とし他を副次點とするかの問題がある、或る者は居間を以て主とすべしと云ひ或者は客室を以て主とすべしと云

ひ或る他の者は臺所を以て主とすべしと云ふが、吾人の考ふる所では、家庭生活に對しては居間なる一要素のみに價值あるものにあらず、臺所なる一要素にのみ價值あるものでも無い、これ等各要素たる各室の結合に成る調和の上に價值があるのである、故に或る一室をのみ主眼點とすべきでは無い。從て其の學習目的は家庭生活の各屋全體が主眼點で、之を分解したる各室を攻究し、次に之を統一して家全體の概括を爲さなくては成らぬのである。

之を要するに、住居の教材に於ては『家庭生活上より見たる各室』を以て主眼點とし、其の間數間取廣さと家人數等の關係を學習させればよいのである。

衣服の一例 文部省發行家事教科書第一學年第十課『衣服』を例に取ると、本課は二教時を以て衣服の目的・衣服の地質・衣服の色合の三項に關し、左の内容の學習を期して居る。

(一)衣服の目的

(イ)衛生上。體溫調節、身體保護。

(ロ)容儀上。禮容整備、品格保持。

(二)衣服の地質

(イ)地質の優劣。毛織、絹織、綿織、麻織。

(ロ)服種の特徴。單衣、袷、綿入、羽織、袴。

(三)衣服の色合

(イ)色合、柄柄、模様の適否。

(ロ)染色の堅牢度。

是等の諸條項中其の主眼點と爲すべきは、衣服の目的なるべきか或は地質なるべきか若しくは色合なるべきか。更に之を各項につき分解する時は、衣服の目的中にも、其の主眼點となるべきものは衛生的要素なるべきか、容儀的要素なるべきか、又地質及び色合に關しても同様に二ツの要素が相對立して居るのである。

今之を科學教育主義より考察する時は、目的が中心で地質色合が其の派生的條件である、故に目的を主とし地質色合を從として取扱ふべきだと云へる。蓋カールライル氏の衣服哲學が其の着衣の起源を何處に求めやうと、エスターマーク氏の禮節の進化論が着衣の根本動機を如何に結論しやうと、更に又ベルグソン氏の進化哲學が着衣衝動を生命進化の何邊に歸結せ